504
167

始

504-167

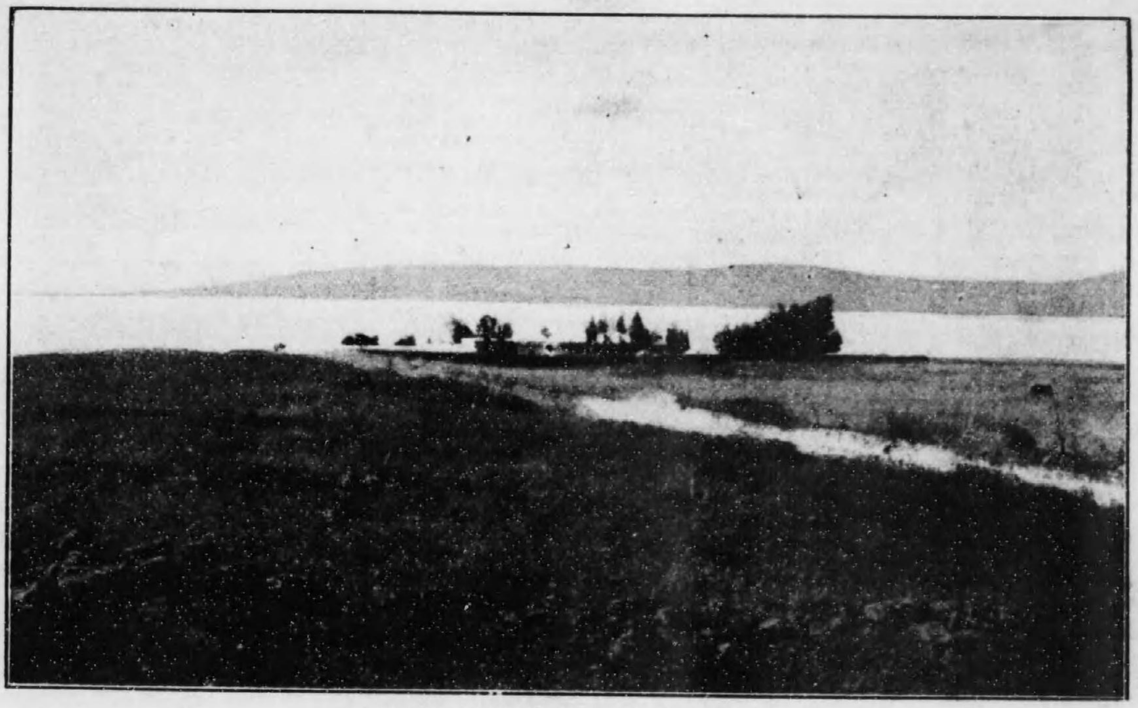
東京帝國大學圖書之印

大屋左一著

聖書の歴史的地理

日曜世界社刊行

大正
12.4 9
交内



ムウナベカの説傳・畔湖ヤラリガ

序言

聖書は人類歴史の搖籃にして、亦その冠冕である。故に之を知らずしては、神と人類との最初の關係を明かに知る事が出來ず、人類の未來について正しき見解を懷く事も出來ず、隨つて亦現世に於て如何に處すべきかの適確なる針路を定むる事も不可能である。而して聖書を正解せんとせば、啻にその中に含まれたる歴史・詩歌・預言の意義を知るに止まらず、亦その背景である地理を明かにしなければならぬ。否これなくしては、到底その歴史・詩歌・預言を正解する事は出來ないのである。それは土地なくしては播種も收穫もなく、戰場なくしては戰はれず、また舞臺なくしては如何なる劇も行はれざる如く、全く地を離れては、詩歌も預言も成立し得ないからである。されば聖書の地理を學ぶ事は、啻に興味ある事柄であるのみならず、實に緊要缺くべからざることなのである。

併しながら、地理は單に地理として、全く歴史と懸離れて研究すべきものではない。必ず之

に附帶した歴史的事實、若くは傳說を以て彩られねばならぬ。その地の過去は如何、如何なる事件がその處に行はれたか、何故その事件が他の處に行はれずして、その處に行はれたのであるか、その歴史と地理との必然的關係は如何、その地及び周圍の狀況は如何。而して亦その地の現狀は如何。これらを明かにするには、是非歴史の助が必要である。實に歴史と地理とは離す事の出來ない密接な關係があるのである。茲に於て歴史的地理の必要が起つて來る。之は聖書に就ても同樣である。

然るに從來日本の敎界に於ては、この重要事が閑却せられてあつて、僅かに明治廿六年二月瀨川淺氏がホルボット博士の著書を譯して、「聖經地誌」と題して出版せられた他には、ミス・スミス氏の著述にかゝる至極簡單な「聖書地理」があつたのみである。しかしこれらのものでは、聖書歴史の地理的背景を、詳しく知らんとする我らの目的を達するには不充分である。しかも二書共に今は既に絶版となつて求むる事さへ出來ぬ。茲に於て誰か起つてこの目下の缺陷を補はねばならぬ事となつてをるのであるが、未だ何人も之に着手せられた事を聞かない。そこで見聞甚だ狹く、知る所實に乏しきにも拘はらず、私は之をその儘に看過するを得ず、祈禱の結果遂に筆を執つて創世記よりヨハネ默示錄に至るまで、聖書全部に渉つて、その歴史的地理の記述を試むるに至つたのである。

私は元來歴史に多大の興味を有するものであるが、信者となつて後は、より多くの興味を以て聖書歴史の研究に志すに至つたのであつた。けれども、之をよく理解する爲には、どうしてもその地理的背景を明かにする必要に迫られたのであるが、幸に明治三十九年十一月大阪傳道學館（自由メソヂスト神學校）に入學するを許され、そこに聖書地理歴史を學ぶこと三ケ年、その後同校に敎鞭を執るに至り、また之を敎授する事前後三ケ年、その間この種の書籍を渉獵して、讀むに從つて記し、聞くに從つて之を補綴し、不完全ながらもその任務に從事したのであつた。本書の稿本はその敎授の手控に基いて作られたものである。

であるから、勿論之は私一個の見聞に因るものではない。否、パウロが「なんぢの有てる物に何か受けぬ物あるか」（コリント前書四の七）、凡ては貰ひ物であつて、私の探見によつて新に發見した何物もないのである。みな先輩諸氏の努力の結果であつて、本書はそれらをあちらこちらから寄せ集めて建てた、小さな建築物である。唯私は

之を現形に組立つる勞を取つたまでゝある。

先日私は某新聞で「厨川白村博士が『近代文學十講』を出した時、死んだ夏目漱石氏が『厨川君は知つてるだけ書いてしまひましたね』こいつたが、之はそれまで覺えた抽象的知識の總ざらへこいふ意味で、全人格活動を『近代文學十講』に打込んだこいつたのではないから厨川博士は安心して宜しい。」こ書いてあるのを讀んで、私を知つて居る或人々らは私のこの書を見て、これに似た事をいふであらうこ考へた事であるが、無論私が本書に書いた事だけが、私が聖書地理について知つてをる事の總ざらへではないけれども、しかし兎に角、私が本書の著述に私相當の努力を惜まなかつた事だけは事實である。

私は同じ著述をするならば、五年や十年でその生命を失ふやうな際物は書きたくない。もこよりかゝるものも、その折々の間に合うて、甚だ調法で、必要なには相違ないが、苟くも聖書の如き永遠にわたる書籍に關係あるものを書くこするならば、さう短命なものを書く事は實に不釣合の感じがする。それ故他に先輩若くは後進者の誰かによつて、更にまされるものゝ出ない限り、十年でも廿年でも生命のあるやうにこ念じて筆を執つたものゝ、しかし本書がこれ程私のこの抱負を遂げしめて呉れるか、それは私自身にも確信がないのである。若し誰かゞ本書の不備を感じて、さらにまされる著述を出して下さつて、私のこの期待を打破し、本書をして短命に終らしめて下さるならば、私はバプテスマのヨハネの如く、「彼は必ず、盛になり、我は衰ふべし」こ稱へて、その書の祝福を祈り、本書の短命なりし事を感謝するであらう。私は斯る著述の速かに出でんここを待つものである。

終に私は本書の書振その他につき、二三の點をここはつて置かねばならぬ。その第一は凡てが自分が自らそれを見聞した如き書振をしたここである。これは勿論「これは何某氏が何こいふ書の何處に言つてをる事です」こか「何々であるこいふここです」こか「何々であるこの事です」なごすべきが當然であるが、一は文章を簡潔にする爲、他は幾分か讀者諸君が興味を以てお讀みになる事が出來るやうにこ思つて、こんな變則の書振をしたのである事を許していたゞきたい。そして、夢にも私が賢ぶつてした事でないここを、承知して戴きたい。

第二は引用した著書を一々その處々に明かにしない點である。これはその繁に堪へないのこ、前述の如く教授の手控を臺本こした爲、一々その出所を記憶しないからである。但その重なる

ものは「引用及び參考書目」として左に記して置く故、それで御承知を願ひたい。

これらの參考書の中、特に讀者諸君に注意をして戴きたい書物は、ホルボット博士の「舊約及び新約全書の研究綱要」（舊新約全書の研究）である。私は時代の區分及び事件の排列は、大體かの書に依る事とし、且つ各時代の梗概、事件の原因、及び結果に關する稍精細なる考察等は彼の書に讓る事となし、本書には之等の記載を極大まかにして、地理的背景の叙述に重きを置いたのであるから、言はゞ本書は彼の書の姉妹篇とでもいふべき者である。されば讀者諸君が本書と彼の書とを併せて讀まるゝならば、聖書の歴史と地理を知る上に、稍滿足な結果を治め得らるゝであらう。

第三におことはりして置くべき事は、地名人名等の發音に不適當なのが間々あらうと思ふ事である。これは參考の著書によつて、相違してをるのが屢々あるが、原語の正しき發音を知らぬ私には、どちらを採つてよいのか分らぬ場合が多くあつたので、引用書通り或は私の我流讀をして置いた。但それは僅少であつて、聖書に錄された地名人名は、聖書の發音に從ひ、新約書の方は悉く邦語改正譯に從ふ事とした。

最後に私は本書の附錄として、その二論文の掲載を快諾して下さつた敎友山口瀧造兄と、本書に挿入地圖の大部分をかいて下さつた畏友齋藤敏夫兄と、多くの費用を投じ、喜んで本書の出版を引受けて下さつた親友西阪保治兄に對して、滿腔の感謝を表する次第である。

一九二二年十二月廿三日　黎明の汽笛をきゝつゝ

大阪市外西天下茶屋の寓居にて　著者

內容目次

序言

第一章　舊約時代の世界概觀

第一節　位置・廣袤……一

第二節　湖海……三

第三節　山脈……六

第四節　河流……九

第五節　國土……一二

第二章　一般人類時代の地理

第一節　洪水以前の世界……一三

第二節　洪水以後の世界……二七

第三章　族長時代の地理

第一節　アブラハムの旅行地……三三
第二節　イサクの旅行地……四七
第三節　ヤコブの旅行地……四九
第四節　エジプトの歴史地理……五九
第五節　エジプトに在るイスラエル人……七六

第四章　イスラエル國民時代の地理

第一節　漂泊の曠野……八五
第二節　イスラエル人の曠野漂泊……九一
第三節　エドム國及びモアブ國……一一七
第四節　約束の地パレスチナの概觀……一三一

第五節　パレスチナの先住民族並にその隣國民……一五七
第六節　パレスチナの征服戰……一六六
第七節　十二支派の土地の分割……一九二
第八節　士師の政治……一九五

第五章　王政時代の地理

第一節　單一王朝時代……二〇一
第二節　王朝分立時代……二三〇
第三節　ユダ王朝衰亡時代……二五八

第六章　エルサレム及びその附近

第一節　エルサレムの歴史と地理……二七三
第二節　エルサレムの附近……二九一

第七章　ユダヤ順國時代の地理
第一節　アツスリヤ國の歴史地理……三〇九
第二節　バビロニヤ主權時代……三一八
第三節　ペルシヤ主權時代……三一〇
第四節　ギリシヤ主權の時代、マカビース家獨立の時代、羅馬主權の時代……三二五
第八章　新約時代の世界概觀
第一節　湖海……三四一
第二節　島嶼……三四三
第三節　各州の位置……三四四
第四節　著名なる都會……三四七
第九章　イエス時代の地理

第一節　パレスチナの政治……三五一
第二節　パレスチナの行政區劃……三五三
第三節　耶蘇の宣教地……三六二
第十章　使徒時代前期の地理
第一節　初代教會時代の區分……三九一
第二節　ユダヤ教會時代の地理……三九二
第三節　過渡の教會時代……三九七
第十一章　使徒パウロ時代の地理
第一節　パウロの第一回傳道旅行……四一七
第二節　パウロの第二回傳道旅行……四二五
第三節　パウロの第三回傳道旅行……四三八

第四節　鎖付の傳道者たるパウロの旅行……四五四
第五節　パウロの最後の旅行……四六四

第十二章　使徒時代末期の地理

第一節　使徒ヨハネの生涯……四六九
第二節　ヨハネ默示錄の七教會……四七三

附錄

約束の地メソポタミヤの現況……二
現時の パレスチナ……七
猶太人の故國復興運動……一三

目次終

圖畫目次

圖版

ガリラヤ湖畔傳說のカペナウム……卷頭
舊約時代の世界地圖……一
ベエルシバに於けるアブラハムの井……四八—四九
舊約時代のパレスチナ地圖……一三〇—一三一
タボル山……一五二—一五三
死海の眺望……二一六—二一七
カンラン山より見たるエルサレム……二六二—二六三
ベタニヤ……三〇〇—三〇一
新約時代のパレスチナ地圖……三四〇—三四一
カペナウムの荒殘……三七二—三七三
新約時代の世界地圖……三九〇—三九一
アテネ市……四三四—四三五

挿圖

日本と舊約世界の比較圖……二
紅海沿岸の風景……五
アララテ山……七
ベルスニムラドの塔……一八
同塔の着色……二〇
ラケルの墓……五六
エジプトの大寺院……七〇
大オベリスク……七二
イスラエルが漂泊滯留したる地方……八七

地名索引

【ア】

アイ……176.279.294
アインハニエ……298
アクラ山……278
アケルダマ……282
アシケロン……259
アソス……446
アソド……398
アダタ……422
アツスリヤ……15.309—12
アテネ……349.433—6
アドラムの洞穴……213
アドリヤ海……343
アナトテ……294
アハワ……333
アピオポロ……461
アフリカ……345
アベク……238
アベルベテマーカ……228
アヤロン……186
アラクセス河……9
曠野……20.85—91.113
アラバ……120
アラビヤ……17.345
アララテの地……12
アララテ山脈……7
アルシ……99
アルノン……121
アルメニヤ……12
アレキサンデリヤ 349.453
アワ……316
アンテオケ(スリヤの)……348.410—12.418.425
アンテオケ(ピシデヤの)……422
アンテパトリス……455

【イ】

イコニオム……423
イルリコ……441

【ウ】

ウル……33—36

【エ】

エクロン……261
エージヤン海……242
エスドラエロン……137
エズレル……219.239—40

シナイ山の遠望……一〇三
イスラエル進軍の圖……一〇六
イスラエル陣營圖……一〇七
ヨルダン河……一三五
南北にパレスチナを截斷したる圖……一四四
東西にパレスチナを截斷したる圖……一四五
イスラエルが征服する以前のカナンの地……一四六
カナンの征服……一四七
現今のエリコ……一五九
ゲリジム山……一六七
ソロモン王國分裂圖……一七〇
キリスト時代のエルサレム……一八一
神殿の再建……二一三
エルサレム附近の圖……二一五
現今のゲツセマネ……二二六
エルサレムの石垣の落成……二二五
ナザレ……二三四
ハッチンの角……二六五
ヤコブの井……二七七
ヘルモン山……二七九
カイザリヤ……二八七
ダマスコ……二九八
ヨツパ……三〇二
現今のツロ……三〇八
パトモス島……三五一

目次終

エタム……93
エタムの曠野……90
エテオピヤ……345
エダルの塔……58
エヂオンゲベル……112
エジプト……20,59—75,345
エラテ……256
エラの谷……211
エラム……15
エリコの邑 174—6,245,305
エリコの谷……169,170
エリム……97
エルサレム 262—3,269—70
273—291,334,348,470
エルサレムの下邑……265
エデンの地……24
エデンの園……21—4
エドム……116—8
エバル山……141,180
エフライム……228,296
エブロナ……113
エペソ……348,437,440—3
464,466,470,474
エマオ……298
エレミヤの洞窟……293
エンゲデ……216—7,242
エンドル……220

【オ】

オリブ山……142,281
オン……69

【カ】

カイザリヤ 348,398,410,455
ガザ……143
カシビヤ……328
カスピアン海……3
カスピアン山脈……8
ガテ……213,218
カデシバルネヤ……
……109,111,115,252
カナ……369
カバトキヤ……347
カペナウム……370—1
ガラテヤ……347,426,439
カリヤ……347
ガリラヤ海……135,138,342
カルケミシ……267
カルデヤ……16
カルバリ(ゴルゴダを見よ)
……279—80
カルメル山……141,235—8

【キ】

キブロテハツタワ……107

ギベア……202,212,294
ギベオン183—5,223—4,297
キヨス……446
キリアテヤリム……298
キリキヤ……347
ギリシヤ……336,444
キルガル……173,205
ギルガルの本營182,183,245
キルハラセテ……246—8
ギルボア山……141,220—1
ギレアデ……140
ギレアデ山……142
キンネレテの湖……6

【ク】

クタ……346
クニド……459
クプロ島……343,419
クレテ島……344,465
クレネ……345

【ケ】

ケイラ……215
ゲシユル……227
ゲツセマネ……302—4
ケデロンの谷……276
ゲバ……206
ケヘラタ……113
ゲラセネ人の地……382
ゲラル……46,48
ゲリジム山 142,181—2,380
ケリテ河……235
ケンクリヤ……437

【コ】

紅海……3,94
黑海……342
ゴサン……314
コス……448
ゴモラ……46
コラヂン……371
コリント……349,436—7,445
ゴルゴダ(カルバリを見よ)
……293
コロサイ……464

【サ】

ザクロス山脈……8
サマリヤ……138,233,234,241
315,317,357—9
サモス……447
サルヂス……478
サラミス……420
サロン(シヤロンを見よ)
……407—8

【シ】
鹽の谷…… 251
シオン山…… 242,278
死海……6,136,142
シケム…38,55,179—80 232
シシリー島……344
シテムの谷……44
シドン……456—8
シナイ山……89,91,101—3
ジフの野……215,218
シヤベの谷……45
シヤベル山……112
シヤロンの平原（サロンを見よ）……137
シユシヤン……328,332
シユネム……249,250
シユルの曠野……86
ショコ……211
シラクサ……360
シロアムの池……306
シンの曠野……90,98
【ス】
スカル……878—80
スコテ……92
スミルナ……475
スリヤ……18,346
【セ】
セバルワイム……316
セルギヤ……419
セラ……251—2
【ソ】
ゾアル……46
ソドム……41,46
ソロモンの廊……395
【タ】
タウロス山……8,421
タベラ……106
タボル山……141
ダマスコ……248,399—401
タルソ……348,405
ダルマヌタ……372
ダン……235
【チ】
チクラグ……219
チグリス河……9
地中海……6,133,143
チンの曠野……88
【ツ】
ツロ……143,449—52
【テ】
テアテラ……478

デカポリス……383
テコア……227,243
テサロニケ……349,431,432
テーベ……70
テベリヤ……372
テマン……121
テラアビム……328
テルザ……232
デルベ……424
テロベオンの谷……277
【ト】
ドタン……250
ドフカ……99
トレスタベル……461
トレマイ……452
トロアス……427,444,446,466
トログリオム……447
【ナ】
ナイル河……11,61—3
ナイン……376
ナザレ……363—8
涙の石壁……306
南國……139
【ニ】
ニコポリ……466
ニネベ……312—4
【ネ】
ネアポリス……429
ネボ山……91,142
【ノ】
ノ（テーベを見よ）……
ノアモン（同上）……
ノフ（メンピスを見よ）……
ノブ……213,293
【ハ】
ハザソンタマル……（エンゲデを見よ）
ハシモナ……112
バシヤン……122,140,361—2
ハゼロテ……108
バタラ……448
ハツチンの角……376—8
パトモス……344,471—3
バビロニヤ……318—22
バビロン……322—7
パフラゴニヤ……346
バベル……27—8
パポス……420
ハマテ……316

ハラ……314
ハラン……36—7
バランの曠野……88.217
ハレテ……214
バンフリヤ……347.420

【ヒ】

ビシデヤ……347
ビスガの峰……129—31
ヒデケル……10
ビテニヤ……346
ビハヒロテ……94
ヒラデルヒヤ……480
ビリビ……348.429－30.445
ビリボカイザリヤ……385—6
美麗門……395
ヒンノムの谷……277

【フ】

フイニシヤ……18.346
フルギヤ……347

【ヘ】

ベエル……122
ベエルシバ……46.47.48
ベエルラハイロイ……45.48
ベエロテ……295
ベゼタ山……279
ベゼク……191.205
ベタニヤ……304
ベツサイダ(西の)……371
ベツサイダ(東の) 384.385
ベツレヘム……56—8
ベテスダの池……301
ベテホロン……186.297
ベテラ……253—4
ベテル……41.49—50.234.245.295
ベニエル……53.54
ベネヤカン……112
ヘブロン……42.48·190.223
ヘブロン山……142
ベラカの谷……245
ベリシテの平原……137
ベルカ……420
ペルシヤ……13.330—1
ペルガモ……476
ヘブロン山……140.402.403
ペルシヤ灣……3
ペルラ……470
ベレア……360—1
ベレヤ……433

變貌山……386.389

【ホ】

ボズラ……253
ボテオリ……460
ホバ……45
ホルマ……111
ホル山……91.118
ボント……346

【マ】

マオン……216
マガダン……372
マクテシ……265
マケラス城……381—2
マケロテ……113
マツケダ……187
マハナイム……52
マルタ島……344.360

【ミ】

ミクマシ……206.294
ミグドル……94
ミツパ……51.203.214
ミテカ……112
ミテレネ……446
ミラ……458
ミレト……447.466

【ム】

ムシヤ……347

【メ】

メギド……265
メソポタミヤ……16.附錄2
メデヤ……13.314
メラ……96
メロム湖……135
メンピス……67

【モ】

モアブの國……123—4
モアブの野……12
モリア山……47

【ヤ】

ヤベシギレアデ……204.222

【ユ】

ユダヤ……139.346.359—60
ユダヤの野……300
ユフラテ河……10

【ヨ】

良き港……459
ヨツパ……143.409
ヨテバタ……113

ヨルダン河 10.134.171.245

【ラ】

ラオデキヤ…… 480
ライシ…… 191
ラキシ…… 255.260
ラマ……203.212.296
ラメセス …… 92
ラモテギレアデ…… 241

【リ】

裏海…… 3
リテマ…… 112
リブエ…… 345
リブナ…… 112.261
リフラ…… 269
リンモン…… 295
リンモンパレヅ…… 112.361

【ル】

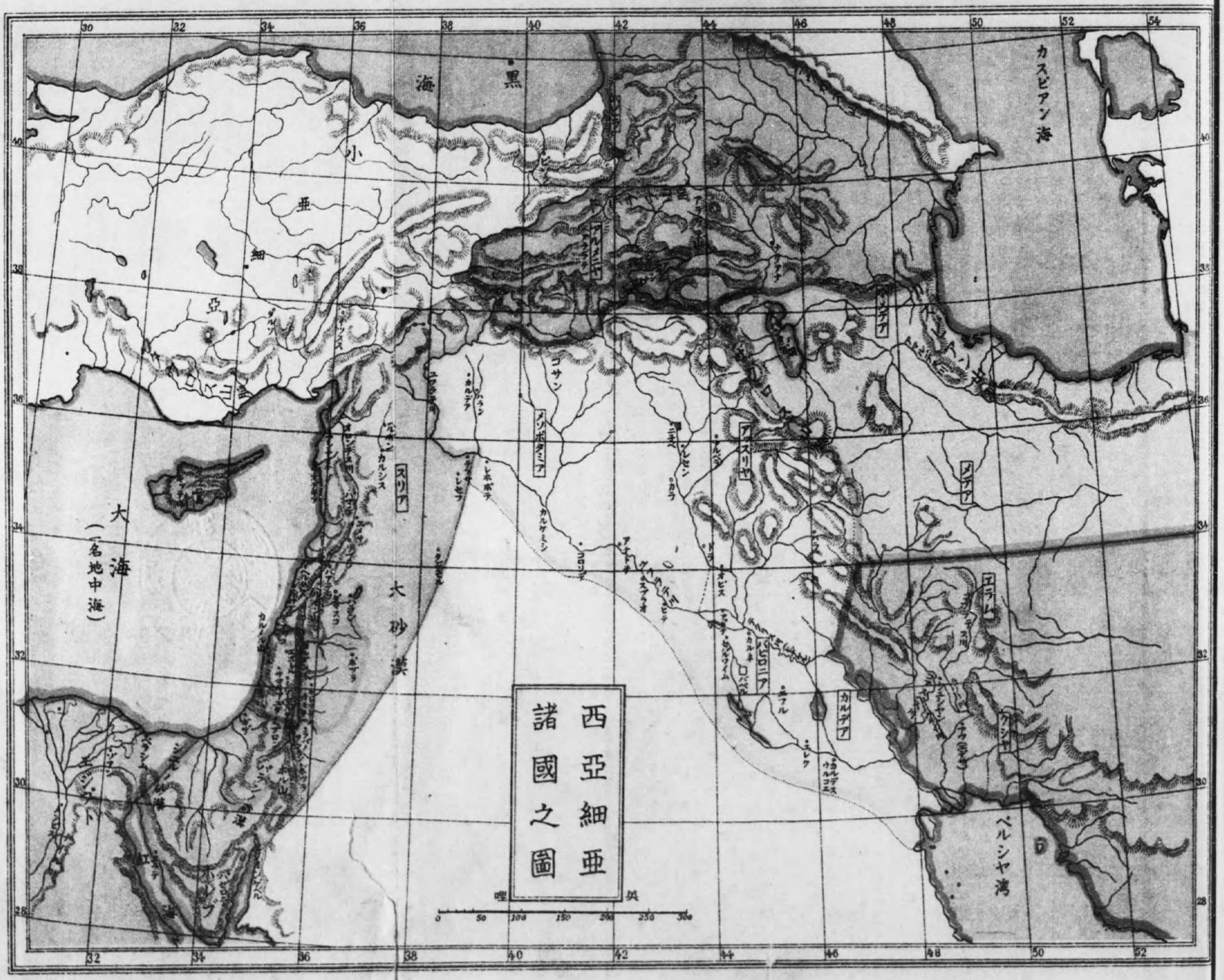
ルカオニヤ…… 347
ルキヤ…… 347
ルステラ…… 423
ルダ…… 406
ルデヤ…… 347

【レ】

レギオン…… 460
レバイム…… 299
レバノン山脈…… 8.141
レビデム …… 99—100

【ロ】

ロドス …… 448
羅馬帝國…… 338
ロマ府… 349.461—3.467—8



ヨルダン河 10.134.171.245

【ラ】

ラオデキヤ…… 480
ライシ…… 191
ラキシ…… 255.260
ラマ……203.212.296
ラメセス …… 92
ラモテギレアデ …… 241

【リ】

裏海…… 3
リテマ…… 112
リブエ…… 345
リブナ…… 112.261
リフラ…… 269
リンモン…… 295
リンモンパレヅ…… 112.361

【ル】

ルカオニヤ…… 347
ルキヤ…… 347
ルステラ…… 423
ルダ…… 406
ルデヤ…… 347

【レ】

レギオン…… 460

聖書の歴史的地理

第壹章　舊約時代の世界概觀

本章に於ては、舊約時代の世界を飛行機の上から見下すやうに、極ざつと見て行く事にしよう。かうした見方を從來鳥瞰的研究といつたが、私は現代的に「飛行機的觀察」と名づけて置く。

第一節　位置・廣袤

舊約時代の世界の位置

先づ舊約世界地圖を開いて、その輪廓に注意すると、左端の縱線は三十度、右端は五十四度を示してをる。即ち東經三十度より同五十四度までの間で、之を日本の里數で計算すると、約五百六十里ある。而して南端の横線は北緯廿七度で、北端のは四十度であるから（その以北は舊約地理に關係がないから除くとして）この間が約三百六十里ある。

廣袤

北緯廿七度といへば琉球や小笠原島などと同緯度で、同四十度は、陸中・羽後の北部と同緯度である。

東西約五百六十里、南北約三百六十里であるから、その面積は約二十萬一千六百平方里といふ計算になるが、かう一口にいつても、何程の廣さかが、ちよつと見當がつき難い。しかし「それは合衆國のアラスカを除いた三分の一位、若くは日本の朝鮮・臺灣・樺太を除いた八倍位の廣さだ」といへば、大分わかつて來ると思ふ。だが、上圖の如く舊約略圖に日本地圖を塡充して見ると、もつと明かに會得せられるであらう。

裏海

ペルシヤ灣

紅海

第二節　湖海

我らの飛行機は、先づ圖の東北隅にあらはれたとする。第一に目につくものは、海のやうに度い大湖である。之は南北二百四十里、東西四十二里乃至百八里もある、世界最大の湖で、しかも一切水の流出口がないので、その水は鹹からく、多くの魚類が住んでゐるとの事である。その名はカスピアン海で、日本の呼名は裏海である。

飛行機は南進して、圖の東南に達する。そこにペルシヤ灣が、東南から西北に灣入してをる。地質學者は「昔は尙數十哩灣入してゐた」と論じてをる。我らはこの灣に二つの大河が注ぎ入るのを見る。文明は河海の沿岸に起るといふが、實際この河々に沿うた所に、古代の文明は起り、舊約歴史中の著名なる事件は、此地方に大關係を有するのである。しかしこの河々や平原は後廻しとして我らは飛行機を西に飛ばそう。

西南隅に至れば、そこに紅海がある。北の方が二肢に分れ、シナイ半島の東・南・西の三方を圍繞いてをる。紅海はヘブルの語原文では「蘆の海」と稱ばれ、七十人譯の舊

約聖書や、希臘原文の新聖約書によれば「紅海」と稱ばれてをる（出埃及記十五の四、民數紀畧卅三の十、列王紀上九の廿六、使徒行傳七の卅六）。

紅海と稱ばれた理由については、その海に紅珊瑚のある故ともいはれ、その附近に住んでゐたエドム人（エドムとは赤の意）に因んで、エドム人の海即ち赤き人の海……紅海となつたのだともいはれてゐるが、その海面が、中にをる浮游生物の爲に、血紅色となる事が屢々あるからであらう。序ながらエドム人を何故「赤き人」といふかについて、我らは創世紀の記事を瞥見して置かう（創世記廿五の廿九―卅四）。

尙この邊の風色について、德富氏の「日本から日本へ」（東の卷）を借りる。

『三月七日―昨夜紅海に入つて、朝來多くの島々を見る。古倫母を出て、十日目に見る陸なのだ。朝鮮の島見たやうに、何れも礁角不毛のものばかり。

三月九日―今日も可なり風濤が烈しい。印度洋の swell が追ひかけて來るのださうな。小さな飛魚の群が千鳥の如くぱつぱと飛ぶ。小形の海豚も踊る。海が小さくなつて、役者も小さい。然し海の色は美しい。三千尋の印度洋も、三百尋の紅海も、同じ空色を映すからだ。

三月十二日―船窓から日の出を見る。秋のやうに涼しく晴れた朝で、金の日が海から生れる。印度洋で見た白金の日の出には劣るが、然し矢張美しい日の出だつた。

朝から左舷に亞弗利加の陸を見、右舷頭には亞剌比亞の山を見る。午後は、近々とシナイ山の下を通つた。赭禿げの寂しい山。

夕日に赭く亞剌比亞の山は燃ゆ、亞弗利加の山々は妙義山を見るやうな山脈を、くつきりと入日のあとの澄みきつた空に見せて、如何にも美しい。』

無論御承知の事であらうが、今は紅海の西の肢から、北へ堀りぬいて、地中海へ通り得るやうになつてゐる。スエズの運河がそれである。かのモーセがイスラエル人二百萬を率ゐて、紅海を横斷したといふのは、この附近

紅海沿岸の風景

地中海

で起つた事件である（出埃及記第十四章參照）。

地中海は西方の中央にある大海である。聖書にこの名を以て稱ばれてをる所は一ヶ所もない。ヨシュア記一章四節には「日の沒る方の大海」と錄され、申命記三十四章二節には「西の海」と書かれてある。ヨナの昔話や、パウロの航海などで、かなり多くの聖書物語を遺してをる海である。

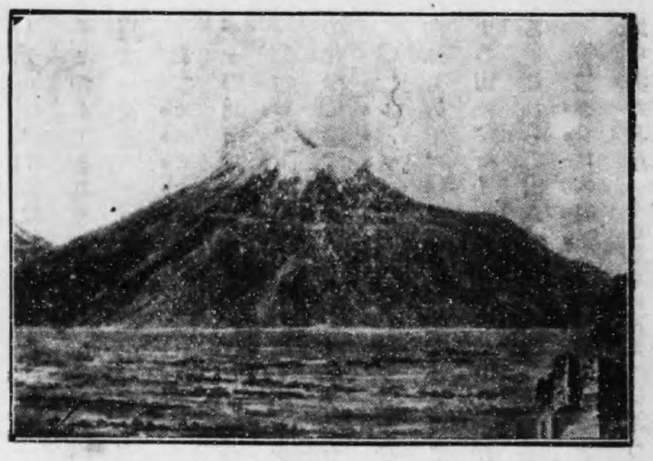
死海・キンネレテの湖

地中海の南部を少し東に入つて、恰度紅海の東肢から北に當る所に、死海がある。その北にキンネレテの湖がある。新約時代にガラリヤ海と稱ばれた湖である。これらについては、後に詳しく調べる事として、ここでは唯その位置と名稱を記錄に止めて置かう。

第三節　山脈

今度は山脈の概觀に出掛けよう。飛行機はカスピアン海の西方、東經四十二度・北緯三十九度のアルメニヤの上空を飛んでをると假定する。そこは諸山脈の中心で、そこを

アララテ山脈



アララテ山

起點として、次の五大山脈が起つてをる。

（一）アララテ山脈　これは中央の山脈で、三個の峯嶺から成立ち、その最高峰は一万七千二百五十尺（富士山より約五千尺高い）、その次の峯が一萬二千尺あるとの事である。頂上は四時白雪を戴いてゐる。アララテとは「聖き地」の意で、これはノアの方舟がそこに止まつたところから名づけられたものであらうペルシヤ人は「ノアの山」と稱んでをるとの事である。パロットといふ旅行家が、この山に登つた事があるが、彼の話に「ノアの方舟は多分頂上にある二つの峰の間に止まつたものであらう」とある。或はさうかも知れぬが、

カスピヤン山脈
ザクロス山脈
レバノン山脈
タウロス山脈

イデルシヤイムは「それは最高の峰でもなく、その次の峰でもあるまい、唯その山脈に止まつたであらう」と述べてをる。序ながら創世紀八章四節の「止りぬ」といふ字の原語は「安置」といふ意味で、一定の場所に靜かに息むといふ意である。

(二)カスピヤン山脈　これはアララテ山脈から東方に亘り、裏海の南岸を周つて、メデヤの北境をなすものである。アララテを頭部とすれば、この山脈は右の腕である。

(三)ザクロス山脈　これはアララテ山脈より起り、稍東南の方向を取り、ペルシヤ灣の北岸に達するもので、いはばアララテ山を頭とする右足である。

(四)レバノン山脈　これはアララテ山脈の西部より起り、西南に亘り、紅海の方面に向ふもので、いはば左の足である。この山脈中に有名なるヘルモン山を初め、バレスチナの山々、セイル山、シナイ山などがある。これらの山々は土地と身體とを構成する。これらの山々の物語は他日膝栗毛で踏破する日の語草として、預つて置かう。

(五)タウロス山脈　これはアララテ山脈の左の腕、即ちアララテ山脈から西方に亘り地中海の北岸（小亞細亞の南部）に沿うて走るものである。この山脈については「使徒パウロの傳道旅行地」について調べる時に、話す事とする。

第四節　河流

土地と身體

土地は恰かも身體のやうなものである。山岳の巖石を骨骼とすれば、地下水は内部を循環つてをる血液、土壌は肉、河川は汗や涙で、そして草木は毛髪に當るであらうか。それは兎も角、前にのべた諸山脈の間を、その方向に從つて流れてをる河川について、瞥見する事としよう。やはり飛行機は、アララテ山の上空より飛ばす事として。

アラクセス河

(一)アラクセス河　この河は聖書の中には見ないけれども、アララテ山より發源し東流して裏海に入るもので、之を舊約世界の北境となす事が出來る。河の長さは百八十里位ある。

チグリス河

(二)チグリス河　我らは再びアルメニヤに復つて、アララテ山より發源しザクロス山脈の西南麓を下り、東南に流れて、ユフラテ河と合し、ペルシヤ灣に入る大きな河の上空を飛ぶ。即ちチグリスである。その水源よりユフラテと合するまでの長さは、約四百

七十里ある。聖書にはこの河を「ヒデケル」と錄されてある（創世記二の四）。「ヒデケル」とは急流の義である。

ユフラテ河

（三）ユフラテ河　次にはペルシャ灣から逆に、大河に浴うて西北へ上る。河口から四百四十里の間は舟楫の便があるこの事、そこから水源まで尙二百四十里あるから、河口より水源までは都合六百八十里ある。水源はやはりアルメニヤにあつて、始めアララテ山の北麓から、タウロス山脈に沿うて西流する事百六十里、又レバノン山脈に浴うて南流する事百六十里、更に東南に流れて一大平原を過ぐる事三百六十里、そして終にペルシヤ灣に入るのである。この河は古來東方亞細亞と、西方亞細亞と交通する要路で、聖書にはこの河をユフラテと呼び外に「かの大河」、「大河ユフラテ河」又單に「河」と錄されてゐる（創世記の二十四、同十五の十八、ヨシュア記一の四、同卅四の二、詩篇八十の十一）。ユフラテとは「甘き」との義である。

ヨルダン河

（四）ヨルダン河　これはレバノン山脈の並行した二脈の間に發源し、南流して死海に入るものである。前の諸河（かはぐ）に比べて、實に小さい流であるが、聖地パレスチナを貫流する重要なる河で、亦多くの物語を生み出した河である。この河については、後に詳しく

ナイル河

踏査する事としよう。

（五）ナイル河　これはアフリカの内地より發し、埃及を北に貫流して、地中海に入るものである。この河についても多くの興味ある物語があるが「エジプトの歴史地理」を述ぶる時まで、お預りとして置く。

第五節　國土

國土の大區分

以上見た所によつて、大體の地形はわかつて來た。これらの山脈や河々を境界として國土が分れる。先づ大區分を述べると

一、東部の高地　ザクロス山脈より東の方、大砂漠（ルツド砂漠）に至る。

二、中央の平原　ザクロス山脈とレバノン山脈との中間に位し、その大半は砂漠（シリヤの砂漠及びアラビヤの大砂漠）である。

三、西部の高地　これはレバノン山脈と、地中海の間にあるもの。

言ふまでもなく、こゝに示さうとする國土の位置は、自然の區分によるもので、その

政治的境域を指すものではない。政治的境域は時代によつて、常に多少の變動があるからである。

一、東部の高地に位する者

東部高地の國土

(一)アルメニヤ　アララテ山と裏海及び黑海の間に横はる高燥の地で、列王紀略には「アララテの地」と錄されてある(列王記畧下十九の卅七)。前述べた如く、こゝはアラクセス、チグリス、ユフラテ等の大河の發源地で、亦ノアの方舟の止まつた所である。彼の子孫は、こゝを出發點として、世界に蔓延した。誠にこゝは新に人類を全世界に繁殖せしむる爲には、地理學上最も適當の場所で、斯る處にノアとその家族が住居する事になつたといふのは、全く神の驚くべき知慧によるものである。昔はこの地の附近に、アッスリヤ、バビロニヤ、メデヤ等の大帝國が起り、又現今ではロシヤ、トルコ、ペルシヤ三國の境界となり、絶えず政治問題を惹起す地となつてをるが將來もまたこの附近が、世界の政治・商業の中心とならんとしてをるのである。

メデヤ

(二)メデヤ　裏海の南にある。東はルツド砂漠に限られ、西はザクロス山脈でアッスリヤやアルメニヤと界し、南はペルシヤに接してをる。その延長約二百二十里、幅は百二十里許ある國内はザクロス山脈の一支脈によりて、南北に二分せられ、北部を北メデヤ、南部を大メデヤといふ。北メデヤは山や谷が多くて、肥えた土地であるが、南部は平坦で、岩石多き砂漠が大部分を占めてをる。

この國の住民はアリアン人種即ちヤペテの苗裔で(創世記十の二)、常に戰鬪を好める不羈の民である(イザヤ書十三の十七、十八、エレミヤ記五十一の十一、廿八、エ)。この國とイスラエル人との關係については、北王國滅亡の際、アッスリヤ王が彼らをこの國の諸邑に移住せしめた事(列王記下十七の六)と、その後ダニエルの時、ペルシヤ王クロスによつて、ペルシヤと聯合して、メドペルシヤとなつた事の外には、特記する程の事はない。

ペルシヤ

(三)ペルシヤ　メデヤの南にあつて、東にパーシス、南にペルシヤ灣、西にエラムがある。その住民はアリアン人種で、最初はメデヤ人に服從してゐたが、大王クロスの起るに及び、メデヤに叛きて獨立し、やがてメデヤと聯合してバビロンを陷れ、その領地

を併有し、益々その勢力を増し、遂にその版圖は東は印度、西はエチオピヤに達して、東洋の一大帝國となつたネブカデネザルの夢に「巨像の銀の胸と兩腕」として、ダニエルの見たる異象に「口の齒の間に三つの脇骨を啣へた熊」として、また「一匹の牡羊」として錄されてをるのは、この國の事である（ダニエル書二の冊二・冊九、同七の五、同八の三）。これらはこの國民の性質・その勢力・ユダヤ人との關係などを示すものであるが、それは他の機會に述べる事としよう。尙エステル書にこの國に於ける興味ある物語、プリムの節の起原などが錄されてある。首府スサ　聖書にはシュシャンとある）についても、何時かまたお話する機會があるであらう。

中央平原の國土

二、中央の平原に位する者

これを（甲）ザクロス山脈とチグリス河の間にあるものと、（乙）チグリス河とユフラテ河の間にあるものと、（丙）ユフラテ河とレバノン山脈の間にあるものとに區分して、順次にさつと見てゆかう。

アッスリヤ

（甲）ザクロス山脈とチグリス河の間にある者

（一）アッスリヤ　北の方にある（列王記下十五の十九、同十七の三）。この國とイスラエル國とは、密接な關係があり、首都ニネベについても、學ばねばならぬ多くの事があるが、それは後に細說する事として、南にうつる。

エラム

（二）エラム　アッスリヤの南方にある。山地と平原の兩種の土地があつて、平原は甚豐饒である。前述べた如く隣邦ベルシヤの首都スサ（シュシャン）は、この平原中にあつた。住民はセムの子孫で（創世記十の二十二）、アブラハム時代には中々優勢で、その版圖は西の方カナンにまで及んでゐた。所謂ケダラオメルの國*がそれである（創世記十四の一―十六參照）。けれどもこの國は久しく獨立する事が出來ず、後アッスリヤの屬國となり、ペルシヤ帝國の起つた時に、その版圖に入つたのである。

*ケダラオメルと同盟したるシナルの王アムラペルは、近時發掘せられたる「ハムラビの法典」を制定したる者と推定されてゐる。

（乙）チグリス河とユフラテ河の間にある者

メソポタミヤ

(三)メソポタミヤ　北の方にある（創世記廿四の十）。メソポタミヤとは「兩河の中間」の義である。別名をパダンアラムといつた（創世記廿五の廿、冊一の十八、冊三の十八）。その長さ三百廿四里幅さは平均百四十里許ある。シンヂャル岡といふ小丘によつて、南北の兩部に分れる。北部は山陵多く、地は肥沃豐饒であるが、南部は荒果てた瘠地である。アブラハムがカナンに向つて移住する途次、寄寓したハランは北部にある。これについては「アブラハムの旅行地の話」の際に述べる事とする。

カルデヤ

(四)カルデヤ　南の方にある。この國は往々シナル或はバビロンと稱ばれた國で、土地は甚平坦で、全世界中有數の豐饒な地である。その昔の住民中、勢力のあつたのはハムの後裔であるクシ人で、彼らは紀元前二千四百年の昔、ウルに於て世界最古の帝國を組織した。この帝國は、紀元前千三百年頃まで、種々の變化を經て繼續した。後バビロンがその首都となるに及び、東洋中最大の都となつた。バビロンの他に、アブラハムの故鄕として有名なるウル、その他二三の都市があつた。この地方の文明及びウルやバビロン等については、後に詳述する事とする（エレミヤ記五十一の廿四以下、エズラ書五の十二參照）。

アラビヤの大沙漠

(丙)ユフラテ河とレバノン山脈の間にある者

(五)アラビヤの大砂漠　こゝは舊約時代中の地圖中の多くの部分を占めてをる。その形は三角形で、その南は北緯廿八度の地をペルシヤ灣より紅海に達し、その東北はユフラテ河、西はレバノン山脈を以てその境としてをる。聖書にはこの地をケダルの地とも稱んでをる（創世記廿五の十三、イザヤ書廿一の十六、エレミヤ記二の十）。勿論全體が高燥で、水分に乏しく、幾分か耕耘に堪へる地があるけれども、通常旅客は此所に足を入れる事が出來ない爲、アブラハムの時代より今日まで、隊商はユフラテ河を溯つて、テフサに達し、この砂漠の北邊を廻つて、後南に進み、かくして砂漠を横切る困難を避けるのである。尙ユダヤ國との關係については、下記の引照を見られよ（歴代史下十七の十、同廿六の七）。

西部高地の國土

三、西部の高地にある者

(一)スリヤ　この國はヘブル人のアラムと稱ふるもので、北にタウロス山脈、東にユフラテ河と砂漠、南にパレスチナ、西には地中海とフィニシヤがあるその延長約百里、

スリヤ

幅六十里許で、自然の地勢上東西の二部に分れる。西部は高地で、住民は甚少く、東部は平地である。東部の南に世界最古の都ダマスコがあり、その北にテフサがある。西部のオロンテス河畔にはハマテがある、この地方を「窪めるスリヤ」といふ。この國にはもとハムの子孫が住んでゐて、ハマテはその首府であつた（創世記十の八）。ダビデ王がその國を征服して以來、ソロモン王の時代の終まで、イスラエルに服從してゐた（サムエル後書八の三—十二、同十の六—十九）。けれども後に獨立して、屢々ユダヤ國に對して、戰を挑んだ（列王記上十五の十八—廿、同二十、同下六の八—七の廿、同十の卅三、同十三の廿二、同十四の廿五・廿六參照）。

ダマスコは當時全國の政權を掌握してゐた首都であつたが、後北部にあるアンテオケが最も緊要な都府となり、この地方が希臘人や羅馬人の手に歸した時も、その政廳のある場所であつた。後に詳述する積であるが、こゝは實に新約時代に於ける異邦傳道の根據地であつた。

フイニシヤ

（二）フイニシヤ（地圖にはヒニケとある）　この國はパレスチナの北に位し、地中海とレバノン山脈の間にある狹い長形の土地である。氣候稍乾燥に過ぎ、平野少く、且つ地味

パレスチナ

瘠薄、農業に適しない。けれども國人は進取冒險の氣性に富みて、航海に長じ、且つ當時の開明地方の要衝に當つてゐた故、陸には隊商を組織して、遠くアラビヤ、メソポタミヤ及び小アジヤ、エジプト等に往來し、又背後のレバノン山脈より材木を伐り出し、船を造つて地中海・黑海の至る所に根據地を設け、盛大に通商植民を營み、久しく海上權を握つて、商業上の利益を獨占した。國内の重要なる貿易市は、地中海濱のツロとシドンである。尙又この國民は太古より諸種の技藝に長じてゐた故、かの有名なソロモンの神殿及び王の宮殿の造營にも與り得たのである。

尙この國の興亡及びイスラエル人との關係は、王國時代の地理研究の際、述べる事としよう。

（三）パレスチナ　これは普通「聖地」と稱ばれてをる地方であつて、スリヤの南、シナイの曠野の北にある。こゝに昔ハムの裔であるカナン人が住んでゐた爲、カナンとも稱ばれた（創世記十二の五）。パレスチナとはペリシテより來た名である。この地の研究こそ、我らが探究の主眼點であるから、我らはこれを縱横に行廻つて、わがものとしたいと思ふ。

更に章を改めて詳述する事とする。

曠野

（四）曠野　パレスチナの南方に位する砂漠で、紅海の兩肢の間にある。一名シナイ半島と稱ばれてをるエジプトを出たイスラエル人が、四十年間の漂泊をなした所である。（出埃及記十三の十八申命記一の十九）。これも「漂泊の曠野」と題して、後章に詳述しよう。

エジプト

（五）エジプト　アフリカの東北隅にある。イスラエル民族が、二百餘年間滯在してゐた地である。興味ある多くの物語を遺してをるこの國についても、章を改めて述べる事とする。

以上で、第一次の飛行機的觀察は終つた。我らはよく之を記憶する爲、自ら略圖を書き、湖海・山脈・河流・國土・並に重要なる都會を記入する勞を惜んではならない。

第貳章　一般人類時代の地理

此時代の概觀

一般人類時代とは、人類の創造された時から、アブラハムの召された時までをいふので、普通に用ひられてをる英國大監督ウシャー氏の年代記に從へば、人類の創造は前紀四〇〇四年、アブラハムの召は同一九二一年（ピーチャー氏によれば一九二八年）であるから、この時代は二千餘年の長歲月に亘つてをる。この時代の始に、人類はエデンの園に置かれたが、エホバ神の命令に背いて禁斷の樹の果を食べた結果、そこから逐ひ出されて、園の外に於て大に繁殖し、次第に文明に赴いたのであつたが、その罪惡も之と共に募つてノアの時には、腐敗・墮落の極に達したので、遂に大洪水によりて悉く滅されてしまつた。

その後僅に遺されたノアの子孫が增殖したが又もや「バベルの塔」を築かんとして、神の怒を招き、全世界に散らされたのであつた。

第一節　洪水以前の世界

エデンの位

（一）エデンの園　先づ最初に學ぶべきは、最初の人類の置かれたエデンの園の事であ

園に關する諸說

る（創世記二の八）。エデンとは「歡喜」「歡樂」「愉快」「飫野」等の意であるが、その位置については、古來幾多の異說があつて、一定しない。或者は蒙古のアルタイ山の附近であらうといひ、或者はアルメニヤ、或者はカルデヤ、或者はダマスコ、或者はヨルダン河の水源、或者はパレスチナ、或者は南アラビヤ、或者は印度、或者はエジプト、或者はカナリー島、或者は大昔に大西洋にあつたと想像せられてをるアトランチスと稱する大陸であつたらうといふ。或者は北極又は濠洲にあつたとさへ主唱してをる。

エデンの位置

かく多くの說があるけれども、此所に錄されてある河の中のユフラテとヒデケル（一名チグリス）とは、確かにメソポタミヤ、バビロニヤにある河であるし、エデンといふ語はバビロニヤ語（嚴密にいへばアカドスメリヤ語）のイデヌに類似してゐる語であるし、且つイデヌとはメソポタミヤの全部若くは多部分の古稱である事が、楔形文字の碑銘によつて、近時漸く明かになつた事や、十三節にある「クシ」はエラムの古稱である事や、そして又十一節の「ハビラ」は、聖書の他の論據に徵して、確にアラビヤの一地である事などを綜合して考へると、エデンはメソポタミヤ及びカルデヤ、バビロニヤ地方であつたと推定して大過なき事と思ふ（創世記二の十—十四）。

最初の人類の生活

園はこのエデンの地の東方に設けられ、こゝに人類の祖先が置かれた。彼らは神の像に像つて創造せられた一對の男女であつた。先づ男子が創造せられ、次にその肋骨の一を以て女子が造られたとある（創世記一の廿七—廿三）。そして彼らは裸であつた。「彼らは革や絹や木綿の衣服を著けてゐなかつた。けれども虹や霞の如き后光を著て居つた。彼らはその美はしき聖き性質より分泌する衣服を以て飾つてゐたのである。恰もシナイ山が神の御臨在を以て蔽はれた時の如く、又神が御自身を榮光を以て飾つてゐ給ふ如く、彼らは虹や霞の如き被垂（ベエール）を以て蔽はれてゐたのである。それ故、彼らは何の恥づる所もなかつたのである。後日彼らが裸である事を恥づるに至つたのは、彼らの犯せる罪の爲に、その被垂が落ち去つたからである」（マツケンジー）。

彼らの周邊は觀るに美はしく、食ふに善き諸種の蔬菜と果實を以て圍まれてあつた。園の中央にあつた生命の樹や、善惡を知るの樹の如何なるものであつたかは知る由もないが、思ふに他の樹々に愈りて、一段の美はしき物であつたらうと思ふ。園を潤す四つの

川は、砂金を出し、ブドラクと碧玉等の産も豊であつた(創世記二の九・十)。

彼らの職分は神の代表者として、地上萬物を統御し、之を服從せしめる事であつた(創世記一の廿八)。彼らが諸の生物に命名したといふ事は、その統治權を意味するものである(創世記二の十九)。彼らは特に日々エデンの園を理め、之を守る任務をもつてゐた(創世記二の十五)。而して彼らの家庭は誠に樂しきものであつた。殊にエホバ神との靈交は、如何に幸福なる樂しき經驗と、豊かなる祝福を彼らに齎らした事であつたらう。

人類の墮落と園よりの追放

しかし、彼らはエホバ神の命令にそむいて罪を犯した。かくて彼らは初めてその裸體を恥づるに至り無花果の葉を綴つて雲を作つたが、神は愛の故に「皮衣」を作つて彼らに衣せ給うたとある(創世記三の七・廿一)。

エデンの地

けれども彼らは永く園の中に止まる事が出來ず、やがて追放せられて、再びこゝに入る事を許されなかつた。さりながらその住所は、やはりエデンの地であつた。尤も地は荊棘と蒺藜を生ずるに至り、これを耕すに勞苦が伴ふやうになつた。祭壇を造つて神を禮拜する事は、この時より始まつたやうである(創世記四の三・四)。アダムの長子カインが、その弟アベルを殺した事件は、この地で行はれた。その結果カインは流離の宣告を受けて、エデンの東なるノド(吟行不息の義)の地へ出で往いたのである(創世記四の五—十六)。

カイン族と文明

(二)洪水前の狀態　創世記第四章の後半には、カインの裔であるエノク(奉納)、イラデ(逃走者)、メホヤエル(神に擊たれた者)、メトサエル(神の人)、レメク(强壯なる青年)、ユバル(角笛)、トバルカイン(鍛冶)の七人が載せられてあり、彼らの事蹟として、邑が建てられ、牧畜が行はれ、琴と笛とが發明され、鋼鐵の及物が鍛へられた事が錄されてある。又レメクがアダ(曙光)とチラ(暗影)の二人を妻とした淫猥な生活の記事、並に最初の血なまぐさき文學(レメクの刀の歌と稱ばれてゐるもの)も遺されてゐる(創世記四の十七—廿四)。

敬神の種族

創世記第五章を見れば、アダムの系圖が載つてゐる。彼らは「三百年神と偕に歩み、神に取られて居らずなつたといはれてあるエノク」(廿三・廿四)を除きて、何れも八九百歳の高齢を以て、此世を去つたとある。而して彼らの道德的又は宗教的狀態を見るに、エノスの時に信仰復興があり(創世記四の廿六)、エノクの警誡があり(ユダ書十四・十五)、ノアの傳道(ペテロ後書二の五)があつたにも拘はらず、實に腐敗墮落を極め、聖書記者をして「エホバ人の惡の

人類の腐敗

地に大なるこ、その心の思念の都て圖維る所の恒に惟惡きのみを見たまへり……時に世神の前に亂れて暴虐世に滿ちたりき……世の人皆その道をみだしたればなり」こ錄さしめた程の狀態こなつた爲、遂に義人ノアの一家八人を除くの外は、悉く洪水の滅す所こなり、かくして初代文化生活の悲劇の幕はその終を告げたのである。

ノアの洪水地方

(三)ノアの洪水　洪水は一ケ年餘、全地を覆うてゐたこある。併しながらその範圍は地球の全土ではあるまい。當時人類の生存してゐた凡ての世界、即ちアララテを中心こする西部アジア及びヨーロッパの諸地方に限られてゐた事であらう。

洪水の狀況

思ふにペルシャ灣より海嘯來り、チグリス、ユフラテの兩大河はその岸に溢れ、而して猛雨は四十日四十夜天上より注がれ、洪水はこの地方の凡てを覆うたのであらう。或は獨逸の某地質學者のいへる如く、この時中央アジヤの山脈に缺潰を生じ、東方トルキスタンは乾土こなりしこ同時に、その水は西方に流出して、アラル裏海沿岸の地を蓋うたのであるかも知れぬ。又ブラトーンがその著「チマイオス」に記した如く、ジブラルタル海峽の西にあつた三十方哩の大島國アトランチスが、地震の爲に一日一夜の中に海底に沈んだこいふ事件があつたこすれば、之が缺陷を補ふ爲、俄然全世界の海水に大變動を生じ、地球はその平均を失ひ、かの支那の傳說に「天柱摧けたり――地はその根抵まで震動せり――天は北方に沈降せり――日月星辰はその運動を變じ地は粉碎せり、その中に懷抱せられし水は決出し、その上に漲溢せり、人は天に背きて、宇宙の組織全く紊亂せり日は蝕せり。星はその運行を變じ、宇宙の大調和混亂せり」こある語の如く、地軸の位置に變更を生じた結果であるかも知れぬ(マクネヤ著「創世記詳解」二四七―二六二頁參照)。何れにせよ、この事により、地形に大變動のあつた事は、疑ふべからざる事である。方舟の止まつたアララテ山については概觀の所で述べて置いたから參照せられたい。

第二節　洪水以後の世界

バベルの塔

(一)バベルの塔　洪水後百數十年を經過したる時、再び繁殖せるノアの子孫が、バベルの塔を建築しようこしたシナルの地は、チグラス、ユフラテ兩河の下流により灌漑された堆土的の土地であつたに相違ない。この地にハムの子孫ニムロデによつて建てられ

バベルの位置

たバベル、エレク、アッカデ、カルネの四邑があつて、その首都はバベルであつた（創世記十の九十同十一の一―九）。

この邊一帯に古城の廃墟を以て成れる小丘があり、過去數十年間の發掘によつて、古代の狀態は次第に明かになりつゝあるが、彼らの建てたといふバベルの塔の確跡は、未だ發見せられない。イデルシヤイムは「大略古バビロンの場所より西南五六哩を距つるベルスニムラドといふた跡と同一であらう」といつてをる。マクネヤは近來發見せられた「バビロンの塔」の話より推論して之をバビロンにあつたものとしてをる。

（ベルスニムラドの塔）

古代の塔の形

古跡によれば、塔はその形がやゝ金字狀で、階段の如きものゝ若干層より成り、その階段の數は高さに從つて多少があり、その廣さも大小の別がある。各層は上層に至るに從つて、漸次に狹くなり、その最上層に「神机」或は「神門」といふものがあつて、この處より神は一定の時間に、己を禮拜者に顯し、託宣を賜ふといはれてある。

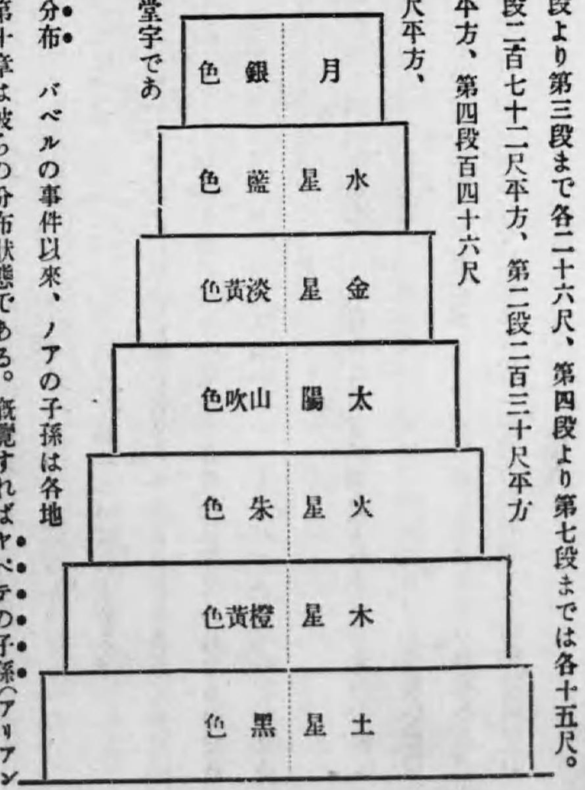
ベルスニムラドは三角の塚で、その上に塔の古跡がある。平地より高き事百五十五尺五寸、その周圍は二千尺ある。これは多分バベルの塔の數百年後に建てられたものであらうと推定せられてをるが、この塔の事を略述する事によつて、バベルの塔の如何なるものであつたかを想像する事が出來やうと思ふ。

塔の材料

塔は北東に向ひ、三面は大斜面をなし、その背後は角度が極めて小さい。全體七層に建てられてあつて、段の置かれてある臺は、燒かない煉瓦で、段は色付をして燒いた煉瓦が用ひられてある。その色は諸神或は遊星に擬へて、次の如く七色に塗られてある。建築用に適せる石の缺乏してをる事は、今に至るまでこの地方の特色で今尙粘土及び石漆が甚だ多い。

各段の高さは第一段より第三段まで各二十六尺、第四段より第七段までは各十五尺。各段の廣さは第一段二百七十二尺平方、第二段二百三十尺平方、第三段百八十八尺平方、第四段百四十六尺平方、第五段百四尺平方、第六段六十二尺平方、第七段二十尺平方。

最高段は殆んど一面に建てられたる堂宇である。



ノアの子孫の分布

(二)ノアの子孫の分布　バベルの事件以來、ノアの子孫は各地に散亂した。創世記第十章は彼らの分布狀態である。概覽すればヤペテの子孫(アリアン人種)は全歐洲及び印度・ペルシヤ、並に小亞細亞の北部に移住し、セムの子孫(セミチック人種)は紅海とペルシヤ灣の中間に横はる土地の大半を領し、ハムの子孫(ツレニアン人種)は地中海の東南部の海濱を有し、最古の航海家及び商民となり、終にユフラテ河とナイル河との間に、最古の帝國を建設した。

三種族の特質

ヤペテの子孫は智力に於て優れてゐた。殖民・政治的自由・理學・技術・哲學・文學等の文明は、彼らによつて成された。セムの子孫は宗教的熱心を以て著名である。世界の三大宗教であるユダヤ教・キリスト教・回教は彼らによつて起つた。ハムの子孫は偉大なる建築によつて有名である。エジプトに於けるピラミッドを始めとし、宏壯偉大なる無比の大建築は、彼らによつて成された遺物である。

三種族の關係

セムとヤペテの融合について、某記者は次の如き興味ある論述をなしてゐる。「神ヤペテを大ならしめ給はん彼はセムの天幕に住はん」(創世記九の廿七)とノアは預言した。教育萬能主義は人を泥濘に陷入れた盲目の手引であつた。人性に關する深い考察を缺いだ不面目なる主張であつた。今はこの迷夢が破れた事を喜ぶ。ヤペテ一人行くにあらずセム一人行くに非ず、この二者は兩々相錯綜、互に抱合融和して、初めて眞の文明が生

れるのである。ヤベテ思考に努れて、人生の歸趣に迷はゞ、セム立ちて宇宙の創造主を示して、その行く途を明かにす（徒十七の廿四）。法王教權を取つて一人立たんとすれば、ノネツサンスの運動は、理性の光明を以て、その迷愚を照す。二者相離るべからず、兩者融和して、初めて人文は進むのである』。と適切なる所論であると思ふ。

ヤベテは廣濶擴張の義、セムは名・有名・高貴―榮光の義、ハムは暖・暑・燃熱の義である。そしてカナンはすくむ・卑賤の義で、創世記九の廿―廿七はカナン人・セム人・白人の貴賤強弱の原因を明かにせるものである。

第参章　族長時代の地理

族長時代の概觀

族長時代は、アブラハムが召命を受けた時より、出埃及の時である。この時代は神が墮落せる人類の中より一家族を撰拔し、その家族によりて世界の救を來さしめんとしておいでになつた時で、アブラハムの召は前紀一九二八年（ビーチャーによる。以下舊約書の終までの年代は同氏による事とする）出埃及は一四九一年であるから、この間四百三十七年である。

第一節　アブラハムの旅行地

ウルの邑

（一）ウル　アブラハムの生涯は、カルデヤのウルに始まる（創世記十一の廿八・卅一）。此處は現今ペルシヤ灣の上方二十五六里ばかりの所、ユフラテ河の西方二里にあるムゲイルと稱せらるゝ、零落した丘によつて記標せられてをる。ここから今もホウルの名を書いた瓦―それはそれに記された文字によつて紀元前二千年のものである事を知り得らるゝ―を發見する事が出來る。これはこの地の人々がホール即ち月を神としたことを現

すものであるが、ウルは有名なる月の邑で、この地方に於ける月を拜む事の中心であつて、非常に美麗なる宮殿があつたこの事である。

ウルの文化

この町はカルデヤの内で、最も古く美はしき町の一で、一時は勢力の洪大なる王もこに都し、數百年間宗教・學術・商業の中心であつた。位置がカルデヤ中・南方アラビヤに最も近きこころにある爲に、彼の地方より多くの商品を輸入する關門であつた。古書に「ウルの船」といふ語のあるのを見れば、沿海の商業をも營んだやうである。前述べた如くペルシヤ灣が、アブラムの時代には今日よりも一層深く内地に灣入してゐた事、ユフラテ河のみならず、船の通ふべき運河もこの近傍にあつた事を知るならば、この事實の眞實である事が解る。

ウルの工業

工業の盛であつた事は、現今地を發掘して得たる當時の織物・陶器・建築物の精巧なる事によつて明かである。今日の文明もこれ以上である事が出來ない程であるこの事である。

天文學の進歩にも驚くべきものがある。或人は七十二の天文學に關する書きものを發見したといつてをる。

ウルの宗教

宗教は天體崇拜で、月の外に太陽や星をも拜した。神々には種々の階級があり。日々の行爲にはそれぞれ規則があつて、組織は整然としてをつた。日々犧牲を献げる事があり死者復活の信仰、神の審判、またおぼろげながらも天國の觀念もあつたやうである。人民が契約をなすが如き法律上の監督を要する一切の事務は、宮殿に於て祭司の前で執行せられた。若しも今日まで保存せらるゝ祈禱文が、眞實に當時に行はれた宗教思想を顯はすものであるとすれば、この宗教は最も虚妄にして、反逆的の性質ある迷信、妖術等で汚されたものであるから、アブラハムの如く鋭敏なる一神教的の頭腦を有するものは遁逃れ出づるにあらずば、避け所を求める事が出來なかつたであらう。またこの地の宗教は甚だ頑固で少しも他の者を禮拜する事を許さなかつたであらう（ダニエル書六の廿六參考）。それによりてアブラハムの一家族が、豐饒なれども有害なる土地を去つて、他に移住した理由が明かとなるのである。「立ちて去れ是は汝らの安息の地にあらず」（ミカ書二の十）

アブラハムの故郷

尚ウルは「邑（まち）」を意味する語であると共に、この語はウルのあつたカルデヤ國の一郡に

も適用せられた。されば多くの家畜を有せしテラの一族は、市中に住んでゐたといふよりも、寧ろ一郡中に住んでゐたとする方が適當であらう。果して然らば彼らが偶像教の感化を受けることも市中よりは稍少く、從つて他方に移住する事も容易であつたのである

ハランの位置

經外書（アポクリファー）のジュデス書には、彼らは宗教上の事件の爲に追放せられたと記してある。併しながらヨシュア記廿四章二節及びラバンの歴史（創世記卅一の三十以下）及び創世記十二章一節等の語によるも、又猶太人の傳説によるも、テラの一家族が常にアブラハムの如く、全く一神教の信仰を有つてゐなかつた事は明かである。

（二）ハラン　アブラハム等はウルを出發し、ユフラテ河の沿岸にそうて、メソポタミヤに向つた。而して第一に寄寓した所はこゝハランである（創世記十一の卅一）。ハランはウルを二百四十里の西北にある。ハランとは「道路」といふ意味のバビロン語で、今は粗造の草廬（こや）のある一村落に過ぎないけれども、明かに太古の零落の跡を存し、商業の中心であつたばかりでなく、政治上軍事上にも肝要な土地で、バビロン帝國の外戍（とりで）であつた事が偲ばれる。實にこの地はバビロンより西に向ひ、小亞細亞・パレスチナ―エヂプトに至る街道中の最も肝要な宿驛であつた。

ハランの宗教

こゝは山の半腹の如き所で、その下に二十方哩の平地があつて、牧畜事業に適してをる。それは昔も今も變りはない。この地に於てもウルのやうに月を神とする宗教が行はれたのであるが、ウルのやうに甚しく頑固ではなかつたやうである。

誘惑の地ハラン

ハランといふ語には、別に「渇きたる」といふ意味もある。その語の暗示する如くこゝは軍事・政治・農業には適せる地であつたけれども、心靈的には渇きたる地であつた。誘惑の地、俗化の屬れある地、人の心を濁らす地である。果して大決心を以てウルを出發したアブラハムの親族は、此地に留まつた（創世記廿四の十、同廿七の四十三、同廿八の十、同廿九の四―五）。後にこの地をナホルの邑と呼ばれたのは、その爲である。アブラハム自身も、第二の命令を與へてせき立てらるゝまでは、こゝに止まつてゐたのであつた（使徒行傳七の二―四、創世記十二の一對照）。

アブラハムのカナン入國

（三）シケム　嚴かなる命令と、惠ある約束を受けたアブラハムは、西南へ向つて出發した（創世記十二の一―五）。從者と共にハランに止まつてゐる時に買求め、或は蕃殖した奴隷を合すれば、少くとも千二百人（注）ばかりの同勢と、多くの家畜とが彼に伴つた。無論

一行の責任は掛つてアブラハムの双肩にあつた。しかも彼は唯一片の信仰もて「その往く所を知らずして出で往」いたのであつた（ヘブル書十一の八）。彼らはダマスコを經、高く聳えたるレバノン東、ギレアデの綠野、バシヤンの山林の西を通つて、約束の地に入つた。而して山を越え、谷をわたりて、遂にこゝモレの平地、即ちシケムの谷にあるモレの橡林に着いた（創世記十二の六）。

シケムの風景

アブラハムがハラン滯在中、得たる人々のうちには、無論改宗した者も多くあつた事であらうし或者は親族の關係より、或者は趣味を同じくするにより團結したであらう。その數を千二百と概算したわけは、アブラハムのカナン移住後、數年の後にあひしロトの災厄を助けん爲、彼は熟練したる家の子三百十八人を率ゐたとある所から（創十四章）一行の數は少くともその四倍はあつたらうとの推察に基くものである（マクネヤ氏「創世記註解」參照）。

シケムとは「肩」といふ意味であるから、自然エバル山とゲリジム山とを連結する、短き山脈を指すのである。この地よりヨルダンと地中海とに向つて、双方に延長する谷間は、多くの泉水で潤はされ、美麗くて肥饒である爲に有名である。博士ロビンソンはかう曰つて居る。「……俄かに地低く、土黑く肥えて、草樹の鬱蒼たるを見る。即ちその一面は野菜畠、又は諸の果樹園にして、處々の泉より迸り出づる清流は白玉を轉ずるが如く、滾々として西に流る。一度此處に杖を曳けば、恰も塵界を脱せしが如き感を起しパレスチナ中に、之に比較すべきものなし」と。他の旅行家はかう記してをる。「此處に藪はないが、常に草木があり、又木蔭がある。それは樫の木ではなく、テレビントでもない。即ち橄欖樹で、その色の鮮かに、その形の美はしき故に、他の樹は顧みるに足らぬ」と。我らはこれらの記事によつて、聊かこの地のさまを想像する事が出來る。

シケムに於ける聖約

しかしシケムの事をこゝに記された所以は、それが決して美はしき地であるからではない。アブラハムがこの地に來て、始めて自分とカナンとに關はれる神の御目的を知つたからである（創世記十二の七）。爾來この地がヘブル民族に取つて、重要なる歴史上の位置を占むるに至つたのも、この事件に基くのである（創世記卅三の十八—廿、同卅一の一—四、ヨシユア記二十の七、同廿一の廿一、列王記上十二の一・廿五、同十六の廿四參照）。

モレの橡林

アブラハムが天幕を張つたのは、モレの橡林だとある。モレとは人の名であるが、それは「高き著しき幻像」といふ意味ある文字に似通うてをるから、一地方の長官であつた

らうとも想像せられてゐる。

信仰の試金石

さて又「カナン人こゝに住めり」とあるが、之はアブラハムに對する神の約束の現實となる妨げとも見られるものである。彼らは既にこの地に永住してゐた者で、その數よりするも、力よりするも、カナン占領の障碍であつたやうである。蓋しこれがアブラハムが神を信ずる一の試金石であつた事は言ふまでもない。幸に彼は神の約束を單純に信じ、こゝに第一の祭壇を築いて神を呼んだのであつた。

カナン人

カナンとは「低地」の義であつて、元來はレバノン連山と地中海の間の低地に群れる住民であるフィニシヤ人にのみ適用せられた名であるが、彼らの勢力が益々膨脹するに連れて、次第に南にひろがり、遂にこの名がパレスチナ全體に通用せらるゝ事となつたのである。けれどもパレスチナ全體も、東の高地に比ぶれば一體に低い所であるから、カナン（低地）と稱へても不當ではない。それ故この名は人種的であると共に、亦地理的である。であるから、種族相異なる各種の人民でありながら、その境域の相接する爲に、同じカナン人といふ稱呼の下に置かれた事も明かである。

ベテル

ベテル附近の眺望

（四）ベテル　アブラハムはシケムより移りて、ベテルの東の山に天幕を張つた。之は多分家畜を養ふ爲の牧場を得る爲であつたらう。而してこゝは一層防衛の爲にも適當した山岳多き地で、元の名をルヅ（巴旦杏）と呼んでゐた。之をベテル（神の殿）と呼ぶに至つた所以については、ヤコブの歴史を見る必要がある（創世記廿八の十一―廿二參照）。

彼らの天幕を張つたベテルとアイの間にある最高き山上に立つて見渡せば、その景色の美はしさは他に比ぶるものなく、北はユダとサマリヤとの界にある山々を望み、西南には後にベニヤミンとユダの兩支族の領地となつた所があつて、遙にヘブロンを建てた坂を眺められる。殊に景色の勝れたのは東方で、眼界の盡くる所には淡墨を以て畫いたやうなモアブの山脈がある。山麓は地味肥沃なる谷で、ヨルダン河はその中を貫流し、最近の所はエリコの上の山脈である。當時ヨルダンの谷は熱帶の草木が繁茂し、その最も美はしき中心はソドムの湖（清水であつたらう）の周圍で、その眺望はガリラヤの海に似てゐるけれども、その景色と土地の豐饒な事は遙かに優つてゐた。げに樂園の如く美しくして、彼のエジプトのナイル河に灌漑せられた所の如く、四時青々たるこの土地は、

その善美なる事、地にある物を思ふ者が眞に望むべき所であつた。但しヨルダンの低地やソドムの湖水のほとりは、繁昌の邑であると共に、又淫逸の甚しき所であつた（創世記十三の十—十三、同十九の四—十一）。後にロトがアブラハムとわかるゝに當つて、この地方を撰んだ事は、彼の大なる失敗であつた。

エジプト寄寓

（五）エジプト　茲にアブラハムは飢饉の爲にエジプトに寄寓し、殆んどその妻を奪はれんとする危險に遭つたけれども、神は撰の故に彼を守り、災禍は却つて幸福と變じて、彼らは更に大なる所有を加へられて、再びベテルに歸つた（創世記十二の十一—同十三の一—五）。

ロトとの分離

（六）ベテル　ベテルに於て、アブラハムとロトとはその所有の多き爲に、遂に分れる事となり、ロトは東に、アブラハムは南に移つて行つた（創世記十三の五—十三）。アブラハムが移る前に、神は彼に周圍の地を瞻望ましめ、これらの地を與ふる約束と、子孫增殖の約束とを堅くし「汝起ちて縱横にその地を行き廻るべし。我之れを汝に與へん」と言ひ給うた（創世記十三の十四—十七）。

ヘブロンの住居

（七）ヘブロン　アブラハムの移住して行つた所は、ヘブロンのマムレの橡林であつた（創世記十三の十八）。ヘブロンとは「同盟者・親睦・親交」等の義で、マムレは「力」の義である。こゝはエルサレムの南方八里許の處にある。海拔殆んど三千尺の冷かな高地で、その谷間は充分潤澤があり、著しく豐饒であるから、ただに牧畜に適するばかりでなく、農業をなすにも適當であつただらう。そこで、彼は益々住所を固定し、自然農業を始むるに至り、イサクの時には幾らか農業を以て彼ら一族の常業としたやうである（創世記廿六の十二參照）。

墓地の購入

アブラハムは地上に於ける殘餘の生涯の大部分をこの地に經過した。而して彼はこの地にあるマクペラの洞穴を彼の妻サラの墓地として求めたのみならず彼自らも彼女の傍にその屍を横たへたのであつた（創世記廿三の十—九、同廿五の九）。この事實及他の之に類する事實の爲に此場所は彼の子孫の記憶に止まり、崇められ、愛しまれたやうである（創世記廿五の廿七—廿九、同四十九の廿—五十の十三）。

ヘブロンの歴史

尙ヘブロンのその後の歴史中、ヨシュアが之をカナン人の手より取りて、カレブに與へ、修築して之をレビ人の市邑また逋逃の邑とした事（書十の卅六、同十四の十三、同廿の七、同廿一の十一）ダビデ王が七年間ユダの王としてこの邑に住んだ事（王上二の十一）その子アブサロムがこ

の地で叛逆を起した事　母后十五の九—十）ソロモンの子レハベアムがこゝを堅固にした事（代下十一の十）並にコンスタン帝の時、基督教會もこれを祝祭した事、その後モハメッドの徒も之を紀念した事等は特に注意すべき事件である。モハメッドの徒は今日に至るまで彼らがアブラハム一家族の眞正の墓であると信ずる場所に會堂を建てゝ、宗教的禮拜を行ひつゝある。忠實なる番兵はこの墓の上にあつて、之を守つてをる。現今の人口は二萬人位であると云ふ事。この地の現狀については小西氏の「聖地パレスチナ」二〇九・二一〇頁を參照せられよ。

ヘブロンに於ける五事件

さてアブラハムのこの地滯在中、次の五事件があつた。（一）東方の王等の來襲、（二）契約を新にせらるゝ事、（三）イシマエルの誕生、（四）イサク誕生の豫告、（五）ソドム。ゴモラの滅亡。これらの事件に關する、地理を次に略述しよう。東の王たちの遠征軍はガリラヤ湖の東方にあるバシヤンの高地を經、現今メッカ巡禮者の通過するアラビヤ街道に沿うて南進したやうである。先づ第一に攻撃せられたものはアシタロテカルナイムのレパイム人である。敵はそれより尙南進して、セイル山のホリ人を打ち、曠野にあるエルパランに及び、轉廻してカデシに至り、又ハザソンタマル（エンゲデ）に住んでゐたアモリ人を打つた（創世記十四の五—七）。而して最後の激戰はシデムの谷に於て行はれたのであつた。シデムの谷とはソドム・ゴモラ及びその他の諸邑のあつた谷で、後に天よりの火で滅ぼされ、今死海となつてをる所である。そしてアブラハムがロトの災禍を聞き、敵を追及して、ロトと彼の所有と人民を取回したといふホバ（創世記十四の十四・十五）は、ガリラヤ湖の北方十二三里の所にあるライシと同じ地で、アブラハムの住んでゐたヘブロンからは、殆んど五十里の距離がある。敵は勝ち誇り、意氣揚々として酒食に耽り、或は各自の戰利品の多き爲、隊伍を亂して退却してゐたかも知れぬ。或は番兵をも置く事なく、眠つてゐたかも知れぬ（列王記上二十の十六—廿一參照）。彼らが人數も武器も遙かに劣つてゐたアブラハムらの爲に敗られたのは、之が爲である。

シデムの谷

アブラハムの追撃

戰勝者アブラハムが迎へられたといふシャベの谷は、エルサレムの北方にあるケデロン川の上流の谷であると稱せられてをるこゝに今尙諸王の墓がある。

アブラハムの凱旋

アブラハムの侍女ハガルが主婦サライの面を避けて逃げた時、エホバの使者に會つたベエルラハイロイ（我を見る活くる者の井）は、シュルの路にある泉で、カデシとベレデの間にあると錄されてをるが（創世記十六の七・十四）、ベレデの位置が未だ明でない爲、井の位置も確

ベエルラハイロイ

かに知る事は出來ぬ。けれどもカデシの位置は略知られてをる故、大體の事は知り得らるゝのである。但カデシについては漂泊の曠野について述ぶる時にゆづる事とする。

滅亡の邑々

天よりの火を以て滅されたソドム・ゴモラ等については、前に述べたから繰返す必要はないが、ロトが選れたゾアルは元ベラと稱へられ（創世記十四の二・八）、ヨルダン河の谷にあつた事だけは明かであるが、確な位置を知る事は出來ぬ。

南の地

（八）ベエルシバ　アブラハムはその後南の地に至り、カデシとシュルの間に居り、ゲラルに寄留り、ベエルシバに移住して、世を去るまでこゝに居た。その間の記錄は創世記廿章一節より廿五章九節までにある。

ゲラル

ゲラルはガザの南四里ばかりの處にあつた小邑で、ベエルシバは其處より東南十里、ヘブロンよりは十二里隔つた處にある。この地は冬には水流があり、夏には井があるから、比較的灌漑に便利である。現今矢の根石の如き古の遺物を多く發見する事により、以前多數の人々が住居してゐた事が證明せられる。また多くの井の趾があり、中に甚だ深く石で圍まれたものが二個ある。アブラハムが此處に井を堀り、ベリシテ人の王と契約を結んだ證據としてこの地をベエルシバ（盟約の井）と稱んだ事が錄されてあるが、この二つの井の中一つは彼の手によつて堀られ、一つはイサクの手によつて堀られたものであるかも知れぬ（創世記廿一の三十・卅一・同廿六の卅二・卅三）。井戸の深さは百五十尺位で、口徑は八尺ばかりあり、その出來上つた時は大なる祝宴をなす風習があつた。

モリア山

序にベエルシバのその後の歴史を見れば、こゝにイサク・ヤコブ等も住んでをり（創世記廿二の十九、同廿六の廿三、同廿八の十、同四十六の一）後にユダの支派に與へられ（ヨシュア記十五の廿八）サムエルの子等はこゝで審判をした事もあつたが（サムエル前書八の二）その後偶像を祭る所となつた（アモス書五の八、同八の十四）。

アブラハムがその獨子イサクを献げたモリアの山（創世記廿二の一—十八）は、ベエルシバより十六里北にある海拔二千五百尺の山である。こゝは後に神殿の建てられた山であるから、（歴代史下三の一）後章に於て詳述する事とする。

イサクの前半生

第二節　イサクの旅行地

（一）イサクの生涯はベエルシバに始まる。こゝは既に述べた如く、アブラハムの晩年

に永住した所で、更めて記述する必要はないが、彼はその所有の一群を、遙か南方にあるベエルラハイロイに有し、イサクにその監督をさせてゐたやうである。それ故イサクは結婚の際、並にその以後も、ベエルラハイロイに住んでゐたやうである（創世記廿四の六十二同廿五の十一）。こゝに彼は結婚後二十年にしてエサウとヤコブの双子を生み、その後十五年にして父と死別した（創世記廿五章）。

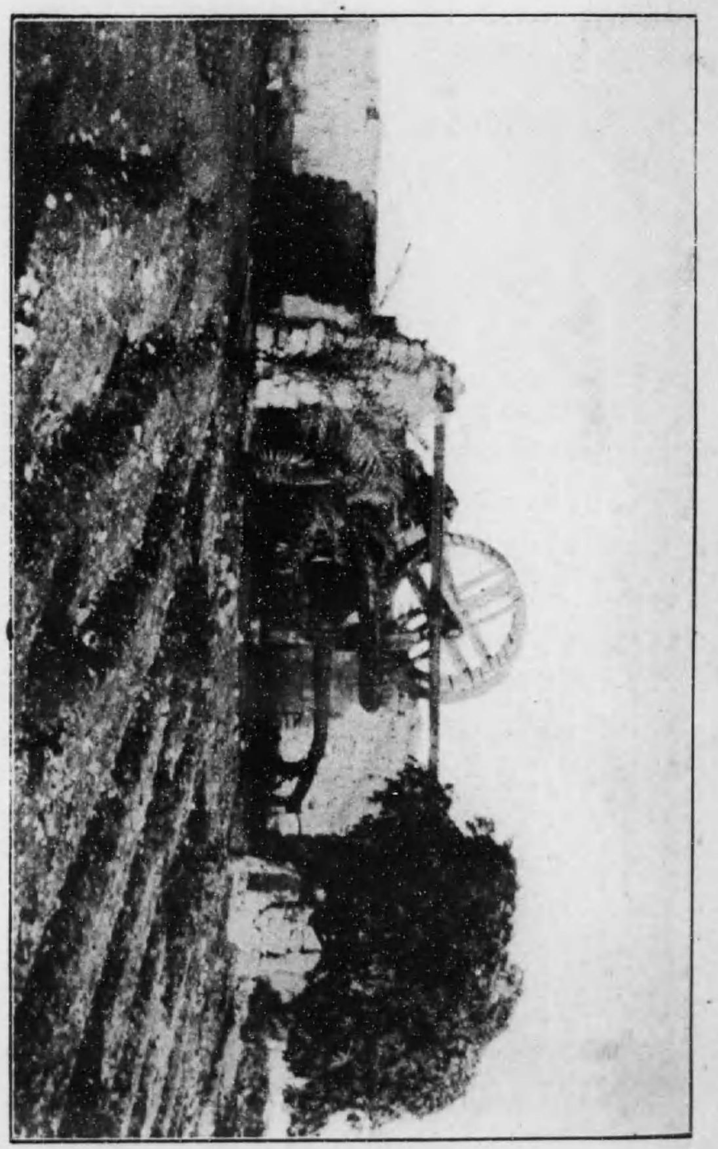
井の爭

（二）ゲラル　イサクは次に饑饉の爲にゲラルに移り、この地に農業をなし、エホバの惠により、年々多額の收穫を得、遂に甚だ大なる者となり、それが爲にペリシテ人の嫉を受け、幾度も井を塞がれたり、奪はれたりしたのであるが、平和の人である彼は、少しも爭ふ事なく、それからそれへと轉住して、ベエルシバに歸つた（創世記廿六章）。その双子の間に家督相續について爭を生じ、ヤコブがハランに向つて出發したのは、この地からであろ（創世記廿七章）。

家督相續の爭

（三）ヘブロン　その後イサクは如何なる徑路を辿つたか一切不明であるが、ヤコブがハランに於ける二十年の長き寄寓の後に、本國に歸つて、彼と同居するに至つた時、彼

イサクの晩年



井のムハラアるけ於にバシルヱベ

はヘブロンに住んでゐた(創世記冊五の廿七)。而して當時妻リベカは既に世を去りて、マクペラの洞穴に葬られてあつた。イサクは少數年間この地にながらへて、エジプト移住の十年前百八十歳の高齢を以て永眠した。

第三節　ヤコブの旅行地

ヤコブの生涯の概觀

ヤコブの生涯は大別して、次の四期となる。(一)最初の七十七年間はベエルシバ、(二)次の二十年間はハラン、(三)次の三十三年間はカナン、(四)最後の十七年間はエジプト。左にこれら旅行地中の重要なるものについて、略述する事とする。

ベエルシバ

(一)ベエルシバ　この地については、既に述べた。ヤコブはこの地に於て成長し、父イサクを助けて、農業・牧畜に從事した。

ヤコブの逃走

(二)ベテル　ヤコブは兄との家督爭の結果、妻を娶るといふ口實の下に、その實エサウの怒を避けて、ハランへ旅立つた。その途次天に屆く梯を夢みたのはこの地である。彼は多分夜間竊かに我家を出で、昔エリエゼルがイサクの妻を求める爲に遣はされた時

のやうに、イサクの子として適當なる從者を伴ふ事なく、又新婦への贈物をも携へなかつた。彼は出發の日遠く旅して甚だ疲れた。行程十六里餘、即ち後世ユダの族の領地となれる山を越ゑ、又後にベニヤミン族の領地となつた地を通つた。日は既に沒り、陰照エフライム山に消ゑた時、廣く且大なる岩石多き或谷に至つた。こゝは甚だ廣き山の背に橄欖の林があつて、アブラハムがこの地に入つた時に息んだ所、及び後にロトがアブラハムと相離れんとする際、全地を見渡した所と近かつた。その前にはカナンの邑ルズがあり、向ふには將に通らんとするハランへの難路があつた。（ベエルシバとハランの間の路程は少くとも百六十里ある）。斯る石の谷に宿るは誠に恐ろしかつたであらうけれども、朝より時も路も厭はず、最早一歩も進むことを得ないまでに進んで、身心共に疲勞したヤコブの氣分に適はしき場所であつたらう。聖書に「一處に至れる時、日暮れたれば即ちそこに寢ねたり」と錄されてあるが、之は偶然の事のやうで、實は神の定め給うた所であつた。ヤコブは息まうとして、その谷にある平たき石を重ね、之を枕として臥した。その夢の中に、見ゑざる手でその谷の石を以て梯を立てるやうに見ゑた。見てゐるうち

天に屆く梯

に梯子は益々高くなつて、遂に星のきらめく大空に達し、天開けてその中にまで入つたのである。これはイデルシャイムの註解であるが、眞に迫つた言ひあらはしだと思ふ。ヤコブは夢のうちに語り給ひしエホバの御約束を信じ、目醒めて後、その枕とせる石を記念の柱にかへ、これを神に聖別し、その岩ある谷をベテル（神の殿）と稱んだのであつた（創世記廿八章）。

ハランの生活

（三）ハラン　ヤコブはこの地にあるラバンの家に二十年間寄寓した。その間十二子を生み、多くの產業を得たのであるが、この地の事については、アブラハムの旅行の時にのべた故、茲には之を省く事とする（創世記廿九章三十章）。

ヤコブの歸國

（四）ミヅパ　ヤコブはその妻子と家畜を引連れ、竊かにラバンの許より逃げ去つた。ラバンは三日の後之を知つて、その從者を引率して彼らの跡を追ひ、七日路にして追及した。そこはギレアデ又はミヅパと稱へられたが、その位置はヤボク河の北方にあつて、スフとよばれてをる村落の附近であらう。今日こゝに粗造の石碑が群がりゐて、嘗てこの地の住民がこれを聖別したことを示し、イスラエル史中の著しき事實のあつた場所で

ある事を證してをる。勿論こゝでラバンとヤコブは契約を結び、その記念の石塚を建てたのであつた（創世記卅一章）。ラバンは茲にヤコブを追ふ事を止め、彼の從者と共に、戈を日光に輝かしつゝ、山の麓にある松と橡の林を過ぎて、ギレアデ山脈の向ふに入つた。之を目送したヤコブの感慨や如何に。

マハナイム

（五）マハナイム　既に恐れある會合は過ぎ去り、またその危險は逃れた。けれども彼は尙一層恐るべき他の敵に會はなければならぬ。彼はラバンに對してはその無情と我慾に對して訴ふる事が出來たけれども、エサウに對する狡猾なる行爲については、言ひのがるべき樣もない。エサウは二十年の今日も、尙かの日に於けるが如く復讐の心をもつてをるであらうか。この疑問に答ふるものは、彼の信仰のみである。彼はラバンの許を去る前に明かなる神の示を受けた（創世記卅二・十三）。而してラバンとの會合によつて、彼の信仰は堅められた。茲に於て、彼は間もなくギレアデ山を離れて約束の地（後にガドの領地となつた所）に入つた。マハナイムは即ちこれである。

天使の保護

彼はこゝに入つて、幸福の望が起つた。それは景色が美はしく、肥えたる牧草は靑々と繁茂し、山上には鬱蒼たる樹木があり、下を望めば肥沃の平地がある。けれども此れにも增して彼の力となつたものは、神の使の彼に會つた事である。二十年前約束の地を離れる時、彼を送つた御使は、こゝに彼が再び歸り來るのを迎へた。さきには上り降りて彼に仕へたが、今は來らんとする爭に於て、守る爲に來た。ベテルに於て夢に見た御使は、こゝに目を醒せる時に顯れて、一層神の保護を證した。マハナイムとは二營又は二軍の意である。

ヤコブの苦心

ヤコブはこゝから、兄エサウを和げようとして使を遣はした。けれども使者は「エサウ自ら四百人をしたがへて彼を迎へんとて來る」との外には、何の答をも得ずして歸つた。之は眞に驚くべき事であつたのみならず、進退こゝに谷まつて、彼は大におそれなやんだのである。その結果として案出された計策や、エホバに對する熱禱は創世記三十二の七―廿にある。

（六）ペニエル　エサウへの禮物を撰び、隊を幾つにも分ちて、ヤコブは彼らの後に歩み、而してこゝヤボクの渡、後にペニエル（神の面）と名附けられたる所に着いた。

ペニエルの風光

こゝは殆んど言ひ消す事の出來ない程、僅かに知られる場所である。即ちガリラヤ湖と死海との中間に於て、ヨルダン河に東より注ぎ入るヤボク川の中流で二つの流川の合する邊である。この邊には渡り得る渡は、唯この所のみである。この所でも近來の旅行者が言つた如く、その強き流は馬の肚を潤すほどである。この邊は景色よく、地味は甚だ肥えてゐる。樹木ある野と、豐作の畑があつて、草木の種類も多く、又甚だ美はしい。この所より殆んど熱帶的植物のあるヨルダンの谷と、又向ふのパレスチナの山々を眺むる事が出來る。而してその渡を見渡せば、ヤボクの流はその間にある夾竹桃の爲に殆んど見えず、又兩方の險阻な岩に、橡・柏および松の林がある。

神との角力

この寂寞しき所で、空には嘗てアブラハムに對する約束の證である數へ難き星が輝き、ヤボクの流の音、その流を渡る家畜の聲、女・子供・僕の渡る準備をなす響の外には、耳に達するものはない。而して凡ての家畜と、女・子供を南岸に渡して、恰も曾て彼が父の家を離れた時の如く「ヤコブ一人遺りたり」。彼は夾竹桃の茂れるヤボクの岸に、夜の明くるまで一人の人と角力をなし、その股の樞骨を挫離され、泣きて惠を求めた結果、

エサウとの會見

狡猾自賴の「押除者」たるヤコブは、「神に屬する君」イスラエルとせられ、跛足ながらも言ひ難き喜を以て、日の出づる時川を渡つた（創世記卅二の廿一―三十）。

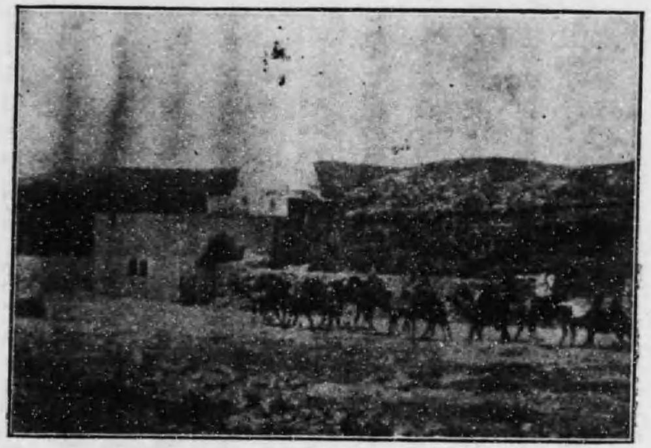
目をあげて見れば、蒼暗き松林の中に、戈は旭日に輝いて閃きつゝある。これはエサウとその四百人であるが、眞の爭は既に終つた事として、今は何の恐るゝ處なく、ヤコブは一行の「前に進んで」エサウに近づいた。しかし事は意外に簡單に落着を告げ、エサウはセイル山に引返へしたのであつた（創世記卅二の卅―卅三の十六）。

スコテよりベテルまで

（七）スコテ、シケム、ベテル、ヤコブは西に進んで、ヨルダン河に近きスコテに至り、こゝに己の爲に家を建て、また家畜の爲に廬を作つた（創世記卅三の十七）。

その後ヤコブは、いよ〳〵ヨルダン河を渡つて、シケムの邑に往つた。こゝで彼はシケムの父より土地を買求めたが、（創世記卅三の十七―廿）女デナの事によりて、この地の人々と彼の子等の間に爭があつた爲、（創世記卅四章）こゝを去つて遂に再びベテルに歸つた。彼がベテルに移る前、神の命によりて、彼ら一同は凡ての異なる神を棄て、身を潔め、衣服をかへて、その耳環をシケムの橡樹の下に埋めた。而してベテルに神の壇を築き、神を禮拜し

ベツレヘムの名稱



ラケルの墓

た時、神は御自身を顯はし、契約を新になし給うた。この地に於て、リベカの乳媼デボラが永眠した（創世記卅五の一一―十九）。

（八）ベツレヘム　ヤコブは南進して、ベツレヘムに移つた。その途中に於て、ラケルはベニヤミンを生んだ。併しその產の劬勞の爲に、彼女は遂に永眠した。その墓は今に殘つてをる（創世記卅五の十六―廿一）

ベツレヘムはエルサレムの南方約二里半の處にある。之をゼブルンのベツレヘムと區別する爲に、ベツレヘムユダとも稱んだ。（士師記十七の七、ヨシュア記十九の十五・十六）又エフタといふ別名もあつた。ベツレヘムとは「パンの家」の義で、エフラタは「豐なり」この義である。又後にダビデが住んでゐた所から「ダビデの邑」ともよばれた。現今はベイトラムといふ。

ベツレヘムの風光

邑は海拔二千五百尺の小丘の上に建てられてをる。邑の傍には橄欖・葡萄・無花果・扁桃などが夥しく成長し、丘の下には豐饒なる田園が展かれてゐた。ユダヤの荒野の旅人は、こゝに來りて、初めて砂漠の壓迫を免れ、蘇生の思をした事であらう。誠にこゝは「豐なるパンの家」の名稱に適はしき地であると共に、後日「眞のパン」なるキリストの生れ給ひし、祝まれた地である。またこの地の近傍に、ダビデの井や、ソロモンの泉など、清い泉水が多くある。ソロモンの泉はエルサレムの城を潤ほす宏大なる水道の源であつた。現今の人口は約一萬で、殆んど皆基督信者であるとの事である。小規模の工業が盛な上に、附近の山間の地味が良好であるから人民は豐かに暮してをるといふ。「街は狹く家は石造で丈夫に出來て居る。壁は厚く戸口は寬闊である。屋根は圓穹（ドーム）の形をしてをる。ベテレヘム人はこの樣な屋根を造る事に巧であるといふ譯を以て、パレスチナに聞こえてをる。ベテレヘムの人民は力量あり、勇氣あり、大膽にして自立心が盛であ

る」と或書に見えてをる。クリスマス時分には數萬の人々が運禮に來るこの事である。

過去の聖書歴史中、特に有名なのは、貞女の鑑ルツの物語（ルツ記）と、ダビデの三勇士の水汲の美談（母后廿三の十四—十七）である。尚この地の現狀については「順禮紀行」百五—百八頁「パレスチナ印象記」一三—二一頁を見られよ。

エダルの塔

（九）エダルの塔　ヤコブは復いでたちて、エダルの塔（群の觀望樓とも譯す）の外に天幕を張つた（創世記卅五の廿一・廿二）。塔は多分群羊を守る人々を保護し、盜賊又は猛獸を避くる爲に建てられたものであらう。ベテレヘムと死海との中間の土地は、太抵甚だ荒漠たる處であるから、その境界には防禦の場所を設ける必要がある。即ち攻擊せられた時には、一個人でも、少數の人々の團體でも、一時遁れ得べき所である（列王記下十八の八、歴代史下廿六の十同廿七の四參照）。

ヘブロン

（十）ヘブロン　遂にヤコブはヘブロンに行きその父イサクと同居するやうになつた。彼はこゝに久しく住んだやうである。今日に至るまで、零落物が存在して、この地が久しく牧畜者の住所であつた事を示してをる。こゝでルベンは悲むべき罪によつて、終に家督の權を失つた。

ベエルシバ出發以來二十七年間、思へば曲折多き旅路であつたよ。併し彼の旅路は尚終らない。彼は神の攝理により、エジプトに移住する事となり、ゴセンの地に留まる事十七年にして、彼地に永眠した。エジプトについては、次章に詳述しようと思ふ。

ゴセン

位置

廣袤

第四節　エジプトの歴史地理

一、位置・廣袤・地形

（一）位置　エジプトはアフリカ洲の東北方、地中海濱に位し、東はシナイ半島を經てパレスチナと隣し、またアラビヤ灣を隔てゝアラビヤと對し、西は長さ千四百里幅四百里もあるサハラの大砂漠、南はヌビアである。

（二）廣袤　地圖上のエジプトの廣さは、東西八十里、南北二百八十里、面積十一萬五千方哩で、日本々土の十分の八弱であるが、その大部分は砂漠で、ナイル河流域の實際のエジプトは、九千六百方哩即ち十分の一にも足らぬ。その内水面並に沼地澤地を除き

て、耕作に適する地は、僅かにその半すぎ、即ち五千六百方哩で、我國の四國一島にも及ばぬ小國である。

地形

(三)地形　ナイル河の流域にある谷(實際のエジプト)の長さは大略二百四十里、その幅は廣い所は十二里、狹い所は一里餘、平均大略三里足らずである。そしてナイル河はその上流は一線であるけれども、末流は昔は七つに分れて、地中海に注いでゐた。(今は三つとなつてゐる)。その中間の地は平坦で、三角形をなしてゐるから、之をデルタ(三角形)と稱ふ。その幅は約四十里である。了解し易いために日本に比較して言ふと、神戸より青森までの幹線鐵道をナイル河とすれば、その兩岸に平均三里足らずの肥沃な平地があつて、その北端に一方四十里に亘る等邊三角形を附したものが、實際のエジプトである

二、地味・氣候

地味と産物

(一)地味　斯くも細長い國であるが、その沃饒なる事は實に驚くべき程である。歴史家ヘロドトスの時代(今を去る二千三百年の昔)に於て、ナイル兩岸に二萬の都府があつたと記されてゐる。麥・黍・米・亞麻・蜀黍の類は非常によく發育して、年に三回の收穫があり、葱・韮・茐・葫等の如き最上の地味を要する植物は、盛に繁茂する。胡瓜・萊菔等水氣多き蔬菜は、亦この地の特産物である。イスラエルの民がこの耕作に從事した事は後に記す通りである。水邊に莎草の一種であるパピロス(Coperus Papyrus)といふ葦が生ゐて、その木髓より人類の使用せし最初の紙は製造せられた。ペーパー、パイプル等の語はこれより生じたのである。睡蓮(Nyphaea lotus)はナイル特産の美花であつて、その濃藍色の水面に幾千幾萬と數へる程にクリーム色を帶びた白色、淡い空色、又は柔かい淡紅色を點じたものである。この花は金銀よりも尊まれ、貴婦人はその髪や頸のまはりにかざし或は香水壜の代りに持ち歩いた。相會した喜を友人に表はしたいと思つた時には、その人に蓮の蕾を與へた。家屋にも家具にも、この花は彫刻せられ、床にも鐫められ、最後には墓標の上に描かれた。何故かく彼らがこの花に愛を注いだかといふに、それはこの花の美はしく香ばしきかほりの爲のみでなく、彼らはこれを大ナイル河の象徴と見たからである。岡には海棗(ヂートパム)・葡萄があつて、その耕作は實に容易であつ

生活費

た、ヨセフの時代に獄中で酒人の長が夢みたやうに、彼らは手でこれを杯にしぼり込んで飲んだのである。この外蜜柑・芭蕉・柘榴・抽子・桃等の產も夥しかつた。

かやうに天然の沃地であつたから、生活の困難ことては殆んどなかつた。歴史家ディオドラスの記事によれば、エジプト人一人を育つるに、今の金貨八圓で充分であつたといふ事である。

氣候

(二)氣候　その氣候といへば亦世界無比である。時偶砂漠より來るサイムームといふ惡風を除くの外は、別に人畜を困める異象はない。雷鳴の轟々たる事はなく、雨の降る事も甚だ稀である。殊に冬期三四ヶ月の如きは、青草一面に地を蔽うて、永久の春かと思はるゝばかりであるといふ。六月下旬に入ればナイルの氾濫がはじまる。以後三ヶ月間水層は日々に嵩まる。秋の彼岸に至つて、增水はその極度に達し、又三ヶ月を期して元の狀態に立ち戻る。かくの如きは毎年の事で、年毎に變化は甚だ少い。それ故至る所にナイル計と稱ふる物が設けられ、水の高下に隨ひて、季節を定める事が出來る程であるとの事である。

ナイル河の汎濫

汎濫の度は、河幅の廣狹によつて異ふけれども、高きは三丈六尺、低きも二十五尺(尤も河口は四尺位)、しかも汎濫六ヶ月に渉る事であるから、その引去つた後には、一層の沖積は全地を蓋ひ、之に最良の天然的肥料を施すわけである。座して天恩に浴するこは實にこの事をいふのであらう。

三、交　通

運輸の便

(一)運輸の便　一國を貫流する一條の大河があつて、全國民悉くその兩岸に住む事である故、運輸の便の如きは言ふに及ばず、河流にしたがつて上下すれば達せざる所はない。下るには勿論水流の助がある。然るに幸運なるエジプトは河流を溯るにも亦天與の援助がある。即ちエテシヤン風といふ風があつて、夏秋の兩期は常に北より南に向ひ、河流に逆回して吹く。それ故輕舟に一帆をのぐれば、手を束ねて河を溯る事が出來る。ここまでも幸福なる國である。

國防

(二)國防　國防の完備せる事に於ても、エジプトは亦萬國無類である。その東西は砂漠を以て限られ、防ぐべき民もなければ、攻め入るべき道もない。北方は地中海を以て

包まれ、太古時代海運の未だ開けざる時に當つては、海岸線は充分の防禦線であつた。埃及はその東北隅と南方に於てのみ開けて居る。それ故外國との交渉は常にこの方面に限られてあつた。けれども、アジア大陸に通ずるスエズの地峡と雖ども、これまたシュルの砂漠と稱して、通行に甚だ艱難なる所である。この事は一七九八年ナポレオンのシリヤ戰役の經驗に徴するも明かである。南境にはまたアツスーワン、セムネー等の石門があつて、屈强の要害をなしてをる。

外國との交通

(三)外國との交通　かく外より入るには困難があつたが、内より出づるには容易であつた。ナイル河を下つて地中海に出づれば、古代の文明國は沿岸至る所に國をなしてゐた。東岸にはペリシテがあり、麥の産地を以て有名である。その北にフイニシヤ國があり、ツロ、シドン、サレバテ等の市場があつて、當時の世界貿易の中心點であつた。ナイル河に對して地中海の北岸には、希臘半島とその附屬の島嶼がある。アフリカ海岸に沿ひて西にカーセージの市府があり、その北にシシリー島がある。伊太利本土にはエトルリヤの舊國があつた。又東の方紅海に出づれば、印度洋沿岸との交通は甚だ自由であつた。

文化と人種

四、歴史と文化

前述の如く、埃及は地理學上の構造より見るも、その位置より見るも、文明の起るべき國であつた。こゝに人類最古の國の起つたのは、誠に天然の然らしめし所といふべきである。しかしながら、國はその地の美はしきのみによつて起るものではない。これに住める人種の如何によつて文野の別を生ずるものである。然らば埃及を占領せる所謂エジプト人とは如何なるものであつたか、これ第一に考究すべき問題である。

エジプトの文明を作つた人種

(一)人種　埃及はアフリカ大陸の一部分であるから、その民はアフリカ人即ち黑奴の一種であると思ふのは大間違である。埃及人は黑奴(ネグロー)ではない。勿論埃及土着の民はハム人種であつたらうけれども、埃及の文明を作つたものは、彼らナイルの流域に住んでゐた土着の民ではなく、白皙人種であつた。それは彼らの使用した言語の性質から考へても、彼らの宗教及び習慣について考へても、亦彼らの容貌より察しても、彼らは確かに

希伯來人、アツシリヤ人等の屬するセム人種によく似た民である事がわかる。博士セイスの說によれば、彼らは元アラビヤ半島の西南部より來たもので、先づアラビヤ灣を渡り、今のソマリランド邊に居を占め、後何かの境遇に迫られて、ナイル河の上流より埃及に入り來つたものであるこの事である。

埃及人の文化

埃及に入り來つた彼らは、野蠻人ではなかつた。彼らはアラビヤ半島にあつた頃、既に彼らの思想に於て、技術に於て、著しき進歩をなした民であつた。彼らは既に石器時代を經過して、金屬使用の術に長じてゐた。彼らは移轉・掠奪を事とする遊牧の民ではなく、定住平和を愛する農民であつたのである。ホルボット博士は「彼らは才能卓越にして、崇拜の念に富み、沈思の性ありて、能く事物を研究し、愛國心あれども戰鬪を好ます、その政治組織は完全にして行屆き、その技藝は宏壯偉大である」といひ、その風貌については「骨骼短少にして壯偉、顏面黃色にして長形、頭髮は純黑にして長い」と述べてをる。

埃及の黎明

（二）歴史の梗概　既に述べた如く、國は沃饒無比のナイル下流の沿岸である。民はアラビヤ南部に原始時代の文明を承繼いだ白皙人種の一派である。而して時は暗黑全地を掩ひ、新文明は將に曙光を放つべき時であつた。この國ここの民ここの時ここありて、一大國民の興らざる理由はない。エジプト國は時勢の必要に應じて興つた。

古王朝時代

埃及最初の王をメネスと稱へた。彼は全國を始めて一統した者で、ナイルの西岸、今のカイロより程遠からざるメンピスの城市を築いた。（聖書にはノフとある—イザヤ書十九の十三、エレミヤ記二の十六、四十六の十四・十九、エゼキエル書三十の十三・十六）東西六里・南北六里の町で、町の周圍は水害を防ぐ爲に、厚く高き壁を以て取圍まれてあつた。その文明のまされる事は、遺跡によつて知られる。この城市の築かれたのは紀元前約三千年の昔である。メネスより後三王朝の變遷を經て、第四王朝のクーフーの時に至りて、世にも有名なる金字塔（ピラミッド）が作られた。クーフーの子カフラーは第二の金字塔を築き、その子メンカウラーは第三のものを作つた。三者共に世界の偉觀で、見る人にして驚かぬ者はない。これらの時代を史家は古王朝と稱んでをる（前紀三〇〇〇—二〇〇〇年）。その間十一王朝があつて、メンピスは常にその首府であつた。

中王朝時代

その後の歴史を簡單に述べると、前紀二〇〇〇年の頃北方より侵入せる蠻族ヒクソス（牧王）の爲に、ナイル河下流の古王朝は滅され、エジプト人は南即ち上エジプトに退却して、テーベに都し、（聖書にはパテロスと稱ばれてある—イザヤ十一の十一、エレミヤ四十四の一・十五）北部即ち下エジプトは全く蠻人の支配の下にあつた。これを中王朝と稱び、十二王朝より十七王朝に至る（前紀二〇〇〇—一五八〇年）。イスラエル民族のエジプト移住は、この王朝の時である。

新王朝時代

次に國人アメスが出でゝ、蠻族を打ち攘ひ、テーベは全エジプトの首府となり、後ラメセス二世等の名主が出で、國威大にあがり、寺院・宮殿等宏大なる建築物を造營したこの時代を新王朝と稱び、十八王朝より二十王朝に及んだ（前紀一五八〇—一〇九〇年）。イスラエル民族の出埃及は、この王朝の事件である。その後常に他國の下に支配せられたが、前紀三〇年頃羅馬の屬國となるまでに三十二朝を數へ、茲に王朝の歴史はその終を告げたのである。

工藝と文明

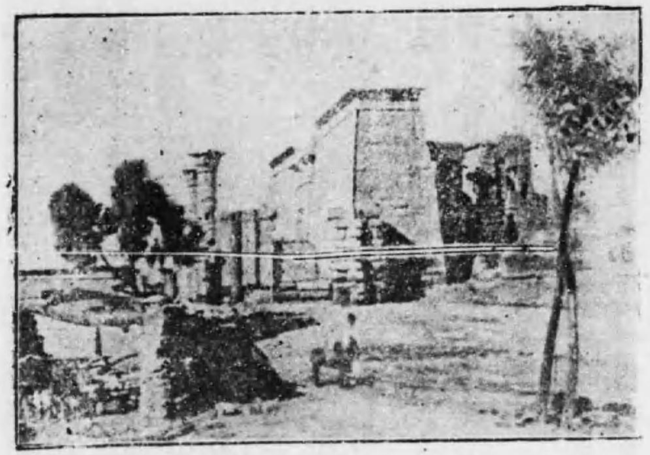
（三）工藝・文明　大金字塔の宏大なる建築物である事は略これをのべたが、之は如何なる建築物であるかといふに、高さ四百九十呎、基址は方七百六十四呎、石材八千九百萬立方呎、重量七百萬噸、（一書には千百萬噸とある）、この石材で二萬二千軒の普通の西洋館を建て得らるゝといへば、たいしたものである。絶頂は約百坪の平面である。その石は花崗石で、二百里の遠方にあるアツスーアンの產で、しかも良く琢かれてある。石の大なるものは五百噸（十三萬貫餘）あるとの事である。内部の構造は精巧實に歎賞する外はないとの事。これは大王の墳墓として作られたものに相違はないが、亦天體觀察の爲の天文臺の用をした證據もある。即ち中心より正南北に向つて二個の眞直の穴が明けられてあつて、その北の穴は恰も北極星をさしてゐる。即ち長管の望遠鏡の態をなしてゐる。而してこの人造的山嶽の如きものを作る爲には、十萬人の勞働者が、二十年間引續いて働いたらうとの事である。現今なほ根跡を殘す金字塔は七十基許りで、その中三十餘基は原形を失はずにある。

大金字塔

オンの都

大金字塔の近傍に古代のオン（日の都）といふ邑があつたが、此邑はヨセフに密接な關係のある所で、又モーセも此處で教育せられたであらう。ヘリオポリスとも稱し、大オ

テーベの寺院



エジプトの大寺院

ベリスク（方尖碑）が遺つてをる。そしてこの邑のみならず、その附近にも墳墓・古碑その他歴史の記錄及び古代の邑の跡があつて、これらを見れば甚だ興味があり、恍ごして古代の有様を夢見る心地がする。

古碑の最も宏麗なのは上エジプトの都會テーベ（聖書にノ或はノアモンとある、エレミヤ記四十六の廿五、エゼキエル書三十の十四―十六、ナホム書三の八）にある。其處の寺院は簡單に記す事は出來ない。その神殿は小さいけれども、その前の庭を隔てゝ巨堂があり、此處に百四本の柱があつて、中央の柱は高さ十一間その周圍が六間ある。その石壁に繪畫・文字・記錄等を彫刻してある。しかしこれ等こてもこの寺院に詣づる道に比ぶれば數ふるに足らぬ。この道には十一尺を隔つる毎に、牡山羊の頭に類似する「スフインクス」六十個を羅列してある。又埋葬式に用ゐる池を圍んだ宮に行くべき道がある。又宮殿に行くべき道があつて、兩側には大象の「スフインクス」を羅列してある。その長さが十六町に及んでをる。

大運河大殿堂

大スフインクス

文化生活

その他大なる工事こしては濠渠池の宏壯なるものがある。大運河がある、大殿堂がある。その中には三千六百の室を有するものもあつた。獅身女面の像（スフインクス）（體長百四十六呎、高さ五十六呎、面の顎より頂まで廿八呎半ある）がある、方尖碑がある（ヘリオポリスにあるものは高さ六十六呎、赤花崗石の一本立で四面に象形文字が一ぱい刻まれてある）。これらは凡て永久を目的こして造られたもので、消ゑ易き、花火的、時代的のものではない。實に永久の記憶　保存こは、彼らの主眼點であつたのである。

さて又、古代エジプトの文化生活は實に高尚なものであつた。その律法は寛大且つ公平で、その風俗は質素に、國民は文明にして、繁榮且つ滿足せる者であつた。婦人は尊

敬せられて、多妻を娶る者は稀であつた。科學・文學・美術は研究せられた。貿易と航海は行はれ、陸海軍の力を以て、パロの領地を守備するに充分であつた。數學・天文・醫學・繪畫・彫刻等の技術も發達し、殊に象形文字・ミイラ術は最も有名なものである。

大オベリスク

五、埃及人の宗教

埃及人をして、かくも勤勉なる斯くも宏壯偉大なる民であらしめたものは、疑もなく彼らの懷きし深遠なる宗教的觀念であつた。彼らは事として物として宗教的ではない事なかつた。彼らの社會・文學・法律・學術は皆宗教を基礎として成つたものである。彼らの大建築物は墓碑でなければ寺院或は宮殿であつた。彼らの詩人と政治家と科學者とは僧侶で、彼らの王は大僧正の職を兼ねたものであつた。若し世に僧侶的國家といふものがあつたならば、この國は確かにその一であつた。

この國の宗教を組織的に研究する事は甚だ困難である。一神教があり、多神教があり、汎神教があり、禽獸崇拜があつて、何れが埃及人特有の宗教であたかを明白に定める事は出來ない。しかし彼らがアラビヤ半島より持來つた宗教は、高尚莊嚴なる一神教であつた事は疑ないやうである。次に記すは彼らの神を讃美する歌であるが。これによりて彼らの信仰が、希伯來人のそれに劣らないほどの、高尚なものである事が知られる。

一神教

神は一にして單獨なり、彼と共に在るものなし。
神は一なり、彼は萬物を造り給へり。
神は靈なり、隱れたる靈なり、靈の靈なり、埃及の精神にして亦聖き靈なり。
神は原始より在り、原始より存在す。

神は眞理なり、彼は眞理に依て生き、眞理の上に生く、彼は眞理の王なり。

神は生命なり、人は彼に由てのみ生く。

神は父なり、母なり、父の父なり、母の母なり。

神は生む、然れども生れし者に非ず、神は萬物に生を與ふれども、生を受くることなし。

彼は彼自身を生み、彼自身に生を與ふ、彼は造て作らるゝことなく、彼は彼自身の形體の造主なり。

神は彼を畏るゝ者に向て慈悲深し、彼に哀叫するものゝ聲に耳を傾く、彼は强者に對して弱者を護る。神は彼を識る者を識り、彼に事ふる者に報い、彼に從ふ者を護る。

この莊嚴なる惟一神教と併んで、高尚優美なる多神教があつた。而してその神々は、光輝の神、和樂の神、生命の神であつて、決して嫌ふべき者ではなかつた。埃及國興起の一大理由は、實に茲にあつたのであると思はれる。

彼らは斯る神々を崇拜し、亦篤く來世の存在を信じた。彼らは靈魂の不滅を信じたばかりでなく、亦肉體の復活をも信じた。これは彼らが墳墓を重んじた理由であつて、亦何人も自分相應に堅固な墓を築いて、彼の復活の時まで、彼の屍體を護らうとした理由である。香劑を以て死屍を保存する術は、全くこの目的を以て始まつたものである。復活永生の希望を埃及人の心より絶つて、彼らは他に存在の理由を見出す事が出來なかつた。彼らは墓を作るが爲に働き、未來の裁判に無罪の宣告を受けんが爲に身を修めた。彼らの產業も道德も彼らの未來觀念を離れてあつたものではない。

しかしながら、一たび彼らが宗教の精神を棄て、その形骸に重きを置くに及んで、彼らの宗教は彼らを縛るものとなつた。彼らは靈なる神ブターを拜する代りに、彼の使者であると信ぜられた牡牛を拜み、光輝の神ラーの代りに鼈を崇め、バストの神に仕へんが爲に獅子と猫との前に跪き、或は蛇を崇拜し、（王冠には皆蛇の徽章があつた）蛙はナイル河水の充滿する時に生ずればとて、ナイル河の神の使者としてあがめ、蚋はその變化の不思議なる所より亦神として崇められ、遂に禽獸は人よりも尊くなるに至つた。茲に至

つて、彼らの衰亡は當然の事であつた。

第五節　エジプトに在るイスラエル人

エジプト寄寓時代の概觀

創世記の最終の事件と、出埃及記最初の期間は二百十五年である。その、イスラエル人の歴史は殆んど記されてゐない。唯舊約書の處々に散在せる簡單な記事によつて、僅かにその消息を知り得るのみである。この間に預言せられた著しき事實は次の二點である。一はヤコブが將に聖地を去らんとするに際りて「エジプトに下る事を懼るゝ事なかれ、我彼處にて汝を大なる民となさん」とのエホバの奬勵と約束（創世記四十六の三）、他は出埃及記の卷頭に錄されたる、その約束の成就、即ち「イスラエルの子孫饒く子を生み、彌增殖し、甚しく大に強くなりて、國にみつるに至れり」（出埃及記一の七）とある事實である。

イスラエルの住所及生業

（一）住所及生業　彼らの住居したのはゴセンの地である（創世記四十五の十、同四十七の四・六）。この地は後に起つた王の名に因んでラメセスと呼ばるゝに至つた（出埃及記十二の卅七）。ゼゝはナイル河の昔の七つの河口の東方と現今のスエズ運河との間の地で、その地方全體に廣き牧草の野があつて、エジプト全國中最も家畜の飼養に適した「地の善き處」であつた故、概ねイスラエル人の牧者の居住する所となつた。且つ此處は比較的首府に近かつたから王の家畜も此處に置かれたであらう。而してかの大饑饉の爲に、王の所有する家畜は大に增加した事であるから、之等に係はれる事務をヘブル人にまかされたのである（創世記四十七の六・十、六・十七）。

牧畜

農業

又ナイル河とその水道に沿うた地は、農業者の居住する處となつたであらう。彼らの中或者は牧者の業を廢し、農業を始めた（申命記十一の十）。これは彼らが曠野漂泊中、曾てナイル河に網を投じて大漁した事や、種々の野菜類の豐作した事を回顧して、罪を犯した事に見ても明である（民數記十一の五）。尙牧畜業の變更するにつれて、その先祖は駱駝を所有したが、埃及寄寓後に於てはその事のなかつた事も、注意すべき點である。彼らのこの轉業は後日彼らが國民として立つ上に、重大なる關係ある、文明の準備となつた。

エジプト人との雜居

又或者はナイル河の西方に移住して、エジプト人と雜居したやうである。かの出埃及の夜に天使が首子を殺す爲に、エジプトの全地を廻り、門に血を塗りし家を逾越した記

事や（出埃及記十二の十二—十四）、同じ時に際しイスラエル人がその隣人や同宿のエジプト人に、金銀の飾品衣服等を乞ひ得た事（出埃及記十二の冊五・冊八）、寄集人がイスラエル人と共に出でた事（出埃及記十二の冊八、民十一の四）、彼らの中にエジプト人と雜婚した者のあつた事（レビ記廿四の十）等を見ると、この事實が慥められる。

工藝

彼らは亦古代エジプトの技術と事業を習つた。それは彼らが幕屋を作り、之に要する材料を準備し得た事によつて明白である。歴代史略にユダの支派の家族に工匠・織布者陶工等のあつた事が錄されてあるが、これらはエジプトにあつた職業の組をさすものであらう（歴代史上四の十、四・廿一・廿三）。

遊牧

尙ゴゼンの地とカナンの界の地方にある者は、連續して遊牧し、彼らの習慣として、屢々カナンにまで攻め入つた事もあるらしい（民數記冊二の一—四、歴代史上四の冊九—四十、同七の廿一）。

（二）政治及び社會的狀態　彼らは寄寓せしと遊牧せしとを問はず、兎に角從來の社會組織を把持した。尤も久しくエジプトに寄寓する中に、幾分か組織の變更は免れなかつた。

社會組織

彼らはヤコブの十二子によつて十二支派にわかれてゐたが、レビの支派が政治的の資格を有たなくなつた爲に、ヨセフの二子エフライムとマナセが二支派となり、十二支派は依然として連續した。この支派はまた六十の「族」にわかれた（民數記廿六章）。而してヨシュア記七の十四によれば、この「族」は遲くも當代までには「家」にわかれ、亦「個人」にわかれた。しかしこの個人も、同章十七・十八に照せば、實は現今の家と見ゐる。これはヨシュア時代に俄かに出來た組織ではなく、少くともモーセ時代、否それより以前多分エジプト寄寓の際に、これらの區別が存したものであらう。

十二支派には各々その支派の牧伯があつた。彼らは千人の長とも稱ばれ、集會を監督する任務を帶びた累世貴族の如きものであつた（民數記一の四・十六・四十四、同二の三、同七の十、出埃及記四の冊一、民數記七の二・同三十の一、同冊一の十三、同冊二の二、同冊四の十八）。また六十の宗族にも、家にも、それぞれ長があつた（ヨシュア記七の十三—十四・十六—十八）。また各支派の長たる十二人の牧伯の外に、集會の代議員に選擧せらるべき二種の代議員があつた（申一の九—十、四、民廿七の二）。これは申命記二十九の十によれば、長老と牧伯（寧ろ書記とするが適當である）と稱ばれた。民を支配する權は、この長老と牧伯に委ねられ

牧伯

代議員たる長老

書記（牧伯）

たのである。これは曠野漂泊以後の記録であるが、モーセ時代の以前にも、エジプトに在るイスラエル人に長老があつたやうである（出埃及記三の十六・四の廿九、十二の廿一）牧伯のあつたのは長老よりももつと前で、エジプト人の驅使者は、民の苦役の監督を彼ら（原文は書記）に委任した事が錄されてをる（出埃及記五の六・十四・十五・十九）。後世イスラエル人の學者（原文は前同樣書記）の起原はこゝにあると思ふ。

集會

宗教的生活

モーセは民數紀略第十章に於て、世襲の牧伯のみを招集する時、喇叭を一回吹奏し、全會農より選擧せられたる長老・牧伯を集むる時には、喇叭を二回吹奏せしめて、區別してをる（民數記十の三・四）。

（三）宗教的生活　ヤコブの死後モーセに至るまでは、預言と幻とを問はず、天より直接の告がなかつたやうである。それ故イスラエル人は先祖より傳はり、亦保存せられた教訓に依賴するより外に道がなかつた。彼らの禮式中最も主なる事は三件あつた。これは父祖及び後にイスラエル人の信仰と禮拜の中心であつたといつてもよいものである。その三件とは（1）割禮（出埃及記四の廿四―廿六、ヨシユア記五の五）、（2）祭（出埃及記八の廿五―廿八）、（3）安息日（出埃及記十六の五・廿二・廿三、同二十の八）である。

心靈的狀態

また律法の中に、誓願その他種々の事が記載せられてある事によつて、彼らの中に以前より斯の如き禮式のあつた事が知られる。

尙彼らのエジプト寄寓中、その子に名けた名の意味により、彼らの家族的又は個人的の靈性の如何を推察する事が出來る。今その一例として民數紀略第一章に揭げられたる牧伯の名を見よう。ルベンの牧伯エリヅルは「磐なる神」、シメオンの牧伯シルミエルは「神は我が救なり」、ユダの牧伯ナションは「蛇」（これは蛇の頭を碎くべき大預言者を豫表するものと思はれる―創世記三の十五參照）、イッサカルの牧伯ネタニエルは「物を賜はる神」、セブルンの牧伯エリアブは「父たる神」、エフライムの牧伯エリシヤマは「聽容給ふ神」、マナセの牧伯ガマリエルは「報ひ給ふ我神」、ベニヤミンの牧伯アビダンは「我父は審判者なり」、ダンの牧伯アヒエゼルは「我兄は助なり」、アセルの牧伯パギエルは「運命なり、或は我祈る神なり」、ガドの牧伯エリアサフは「我神は集むる者なり」、ナフタリの牧伯アヒラは「我兄は友なり」の意である。同書第三章のレビの三家族の牧伯はエリアサフ

（集め給ふ我神）、エリザバン、（我周圍を守る神）、ズリエル（我磐は神なり）である（民數記三の廿四・三十・廿五）。勿論「エリ」といふ神の名稱は、神が彼らの父祖に自ら示し給うたものである。これらの名によつて、彼らの神に對する態度が、或人々の言へる如く冷膽なものでなかつた事が知り得らるゝ。

エヂプトの宗教の影響

しかしながら、彼らのエジプト人との接觸は、その宗教的勤行に於て、良好なる結果を齎らした事が全然ないとは言はれないけれども、寧ろ惡事を見習つた方が多かつたであらう。モーセの五卷の中に、彼らがエジプトで目擊したり習つたりした惡むべき行爲彼處にて實行した偶像的儀式について述べられた所が屢々ある（出埃及記廿二の一―六、レビ記十七の七、ヨシュア記廿四の十四、エゼキエル書二十の五―八）。プモス書五の廿六、使徒行傳七の四十三）。

奴隷の生活狀態

（四）奴隷生活　ヤコブの時にエジプトに移住せしイスラエル人は、二百十五年間にして、約二百萬に繁殖した。その時エジプトに政變があつて、牧王は追はれたが、それと共に彼の好意をもつてるたイスラエル人は奴隷として苦役を課せられ始めた（出埃及記一の八―十四、二の廿三）。奴隷の仕事は瓦を燒き、地に水を注ぎ、水道を堀り、或は修繕し、城砦を築き庫

を建て、墓を築く等であつた。彼らはかゝる職をなすに係はらず、衣なくして概ね裸體であつた。その食物にも制限があり、非常の虐待を受けた。古碑の示す所によれば外國の勞働者が瓦を造り、四人のエジプト人がこれを監督してをる。そのうちの二人は上役の監督者で、二人は大きな鞭を手にして「働いて止めるな」と呼ばはつてをる。又奴隷を伏さしめて、その足の裏を打つ繪もある。そして奴隷が死んだ場合は、その屍を犬に投げ與へたとの事である。出埃及記第五章を見ればイスラエル人の虐待はその極に達したやうである。

（五）エジプトよりの救　けれども時は滿ちた。神はモーセとアロンを遣はして、遂に彼らを救出し給うた。かの九大災害1.血の河（出埃及記七の二十・廿一）、2.蛙の群（八の六）、3.蚤（八の十七）、4.蚋（八の廿四）、5.畜類の惡疫（九の三）、6.人畜の腫物（九の十）、7.大なる電と火の塊（九の廿三―廿六）、8.蝗（十の十三―十五）、9.三日間の暗黑（十の廿二―廿三）は、エジプト國の高慢とその宗教を戒むる爲と、イスラエルの民が神の撰民である事を明かにする爲と、第三にはエホバはエジプトに在るイスラエル人

逾越節の起原

らしむる爲に行はれた（出埃及記八の廿二、九の十四・廿九、十二の十二）。これらの災禍の期間は約十ケ月に亘つたであらう。而して遂に最後の恐ろしき夜は來りパロ、の長子を始めエジプト全國の首子は殘らず殺されたが神の撰民たるイスラエル人のみは、殺されたる羔の血を、その門の鴨居と兩傍の柱に塗つた事によつて逾越され、彼らはその夜催逼てられて、エジプトを去つたのであつた。後世三大國祭の第一として、イスラエル人に行はれた逾越節は、この紀念の爲に行はれたものである（出埃及記十二の一―三十八）

第四章　イスラエル國民時代の地理

紀元前一四九一年、イスラエル民族がエジプトを出でた時より、同一一〇一年、サウル王の即位に至るまでを、イスラエル國民の時代といふ。この間に於て、エジプトを出でたるイスラエル民族は一個の國民となり、あらゆる政治上の制度・典章を有するに至つた。史家はこの時代を小分して、(1)曠野の漂泊・(2)カナンの征服・(3)士師の治世の三としてをる。私もこの區分に從つて本書の記述を進めて行く。

第一節　漂泊の曠野

旅行を始めんとするに際り、豫めその旅行地を地圖によつて知つて置く事は、今更言ふまでもない必要事である。けれども若し飛行機に搭乘して、それを一巡する事が出來得れば、より以上の理解興味を得られるではあるまいか。されば我らは茲に第二の「飛行機的觀察」に出掛けたいと思ふ。その範圍を漂泊の曠野に限つて。

曠野の位置

廣袤

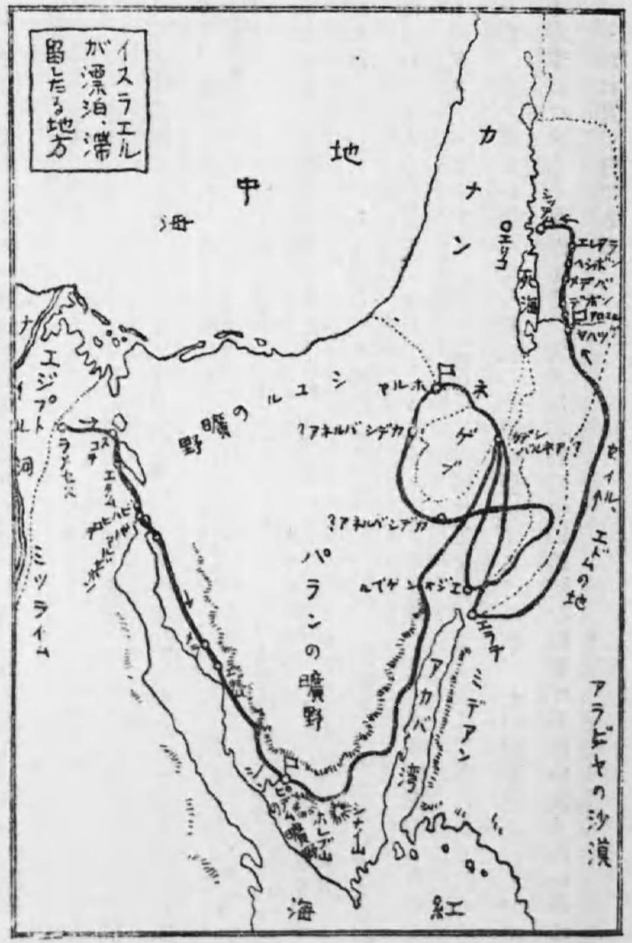
地勢

シュルの曠野

（一）位置・廣袤　我らは先づ飛行機をゴセンの地から東方へ、地中海の沿岸を死海まで飛ばさう、その延長八十餘里、さつと東京から三河の岡崎邊まで若くば大阪から廣島までの行程である。次に機頭を西南へ向けて紅海の東肢であるアカバ灣の上空を飛ばす。この灣を隔てゝ東にアラビヤの半島がある。暫くして、我らはシナイ半島の南端に着く、こゝは地中海から百里の隔りがある。更に機を西北へ紅海の西肢であるスエズ灣上を飛ばせば、元のゴセンに歸る。即ち三角形の地である。その面積は二萬二千五百方哩（四千五百方里）で、四國の四倍弱、九州の二倍弱、北海道本島よりは少しばかり狹い土地である。

（二）地勢　こんごは内地の偵察に出掛ける。

（1）ゴセンを東へ地中海の南岸即ち三角形の北部に接する地は一帶の砂漠で、そのエジプトに近き所をシュルの曠野とよぶ（出埃及記十五の廿二）。シュルとは壁の意で、この名は埃及人が東方よりの侵略者を防がんが爲に、スエズ地峡を横切つて建築した石壁即ち長き一列の城砦より來た名である。アブラハムの妾ハガルが逃走した時天使に會うて引返した所はこの内にある。



チンの曠野

（2）次に死海よりアカバ灣頭までは一帶の延長せる凹地で、これをチンの曠野と呼ぶ（民數紀略十三の廿一）。

バランの曠野

（3）こゝから半島の北部及び中部に進入すれば、北部に灰色の石灰石によりて成りたる不毛の高原がある。高さは二千尺乃至二千五百尺ばかりある。その表面は砂原と石原多く、僅かの流れがあるけれども、その多分は砂で濁つてゐて飲料に適しない。エル・アリシュ（エジプトの河）と名くるものがあるが、この河も年中の大部分は乾いてをる。中部は砂石及び黄色の砂である。これが所謂バランの曠野とよばるゝ所で（民數紀十、の十二）、申命記には「かの大にして畏るべき曠野、即ち蛇・火の蛇・蝎等ありて水あらざる乾け地」と記されてをる（申命記八の十五）。こゝはイスラエル民族が三十八年間漂泊した所で、現今もバデエト・エトチー（漂泊の曠野）と呼ばれてをる。この間に東西に貫く二條の道があるが、途上幾多の斃れたる駱駝の死體を發見するこの事、その難路思ふべしである。尤も春季には少しく草が生じ、又大なる谷の中に駱駝を飼養する程の處もない事はないが、それは實に僅である。

シナイ山地方

（4）バランの高原の南部、即ち半島の尖つた所にシナイ山脈がある。こゝはトルと稱ばれ、その北方に赤い砂石がある。中央には赤の花崗石と綠の雲碧石がある。その景色の特色は悉く山地で、その中の最高峰は約九千尺ある。この諸山の間を流れる川床と見ゐる所があつて、冬季は暫く水があるけれども、多くは乾いてをる。之は「ウエデ」（谷の意）と稱ばれてをる。又曠野の道路の處々に泉水や流跡がある。人の動作のある所に於ては、耕作した圃もある。棕櫚や園や畑や善良の牧場もあるが、多くの嚴々たる諸山は草木なき禿山である。その岩石の色の種々である事は此處の特色で、主なる色は赤と綠の二色であるけれども、山中には紫と紅色の恰も上より流るゝに似た處がある。又雲碧の綠色が次第に黑くなる所もある。且又この地は殆んど昔のない爲に、試に聲を出せば、意外の遠くまで響くを知る。而して前述した耕作した所と、岩に生ずる小さき花と芳香を放つ植物の外、岩間に生じて垂れた牛膝草を除けば、殆んど植物はない。只合歡の樹二種（その一は幕屋及び諸器具を造る材木）、白金雀花、又普通の「マナ」を生ずる柽柳のみであつた。

シンの曠野
エタムの曠野
曠野生活

(5)シナイ山脈とスエズ灣との間に横はれる狹少の地に、二個の曠野がある。南方をシンの曠野とよび(出十六の一)、北方をエタムの曠野とよぶ(民數記三の八)。

右は漂泊の曠野の概觀であるが、これを見て、曠野に於て住居した者の生活する方法がないと思ふのは誤謬つてをる。現今もこゝに生活する者が尠くない。又元來怠惰と天災の爲に今日の如くならなかつた以前に於ては、こゝで生活した者が尙多かつた。その銅鐵山と土耳古玉の山に於ける事業に就て、エジプト人が多くあつたが、彼らは其處の泉と耕作した所に心を用ひたであらう。イスラエル人は現今のベドヰン人とその曠野で多くの家畜を飼ふに、さう困難を覺ゑなかつた。彼らはその家畜に因りて乳と乾酪と肉を得たのである。後に記す如くイスラエル人はエドム人より食物と水を贖はうとした事ゆゑ、屢々通過した隊商も之を買つたであらう(申命記二の六)。又イスラエル人は多くの麥粉を所持してゐなかつた事であるから、或は買入れ、或は久しく滯在した地所では、現今のベドヰン人の如くなるべく耕作した事であらう(レビ記八の二・廿六・廿一、同九の四、同十の十二、同廿四の五、民數記七の十三參照)。

イスラエル人の旅行の梗概

(6)尙この概觀中注意して置くべき事は、曠野に於ける有名な山岳である。その一はシナイ山(出埃及記十九の廿)、これは律法を與へられた所で、半島の南にある。第二はホル山で(民數記二十の廿三―廿八)、アロンの死んだ所、これは死海の南方にある。第三はネボ山で(申命記卅四の一)、その最高峰はピスガの峯である。モーセの永眠した所で、死海の東にある。

(三)イスラエル人の旅行の梗概　その他こゝで語るべき國名や、種々の事件の起つた地名は、イスラエル人の旅程の進むに從つて述べる事とする。その旅行は(1)ラメセスより紅海に至るまで、(2)紅海よりシナイ山に至るまで、(3)シナイ山よりカデシバルネアに至るまで、(4)カデシバルネアよりバランの曠野を經て再びカデシバルネアに歸るまで、(5)カデシバルネアよりエドムを廻りてヨルダン河に至るまで、の五項に區分して、順次に述べて行かう。

第二節　イスラエル人の曠野漂泊

一　ラメセスより紅海に至るまで

イスラエル人の出埃及

（一）ラメセス　即ちゴセン（出埃及記十二の世七）。こゝはイスラエル民族の出發點である。彼らはアブラハムに約束せられた預言の時が滿ちて、出發した（創世記十五の十四）。彼らは逃走者の如くならずして、勝ち誇れる者の如く出でた。即ち彼らは勝者が多くの分捕品を携へて凱旋する如く、金銀の飾品や衣服をエジプト人より徵發して出た。急いで出でたことは言へ、揑粉の未だ酵いれざるを執り、揑盤を衣服に包んで肩に負うてゐたことは言へ、彼らは秩序整然として出行いた。錄して「四百三十年の終にいたり、即ちその日にエホバの軍隊みなエジプトの國より出でたり」、「神…民を導きたまふ、イスラエルの子孫行伍をたてゝエジプトの國より出づ」とあるのは實に痛快の文字である（出埃及記十二の四十一、同十三の十八）。彼らの數は二十歳以上の男子六十餘萬、これに女、子供を加ふれば少くとも二百萬以上あつたであらう。

スコテ

（二）スコテ（出埃及記十二の世七）　これは第一の停足地である、こゝここの次の停足地であるエタムについては、現今未だその遺跡を發見する事は出來ぬが、彼らは段々とエジプトとパレスチナの中間にある曠野へと進み行つたに相違ない。或はこの地で、いよいよ勢揃をしたのかも知れぬ。彼らはこゝを出發する時、「信仰によつてその死なんとする時己が骸骨の事について命じた」ヨセフの骨を携へる事を忘れなかつた。

エタム

（三）エタム（出埃及記十三の廿）　これは第二の停足地で「大なる壁」の意である。こゝに於て二つの事件が行はれた。その一はこの時以來四十年間、エホバが晝は雲の柱を以て彼らを導き、夜は火の柱を以て彼らを照して、彼らを進ましめ給うた事である。この雲の柱・火の柱の形狀は明かでないが、詩篇百五の三十九に「エホバ雲をしきて蓋となし」云々とある處から推測して、恰も傘を廣げた如き形であつたやうに思はれる。これは彼らが暑さの爲に熱したる曠野を通過する際、太陽の直射をさへぎりて、大なる惠となつた事であらう。その二は一旦解放を許したパロが、亦も心を變じ「我らなぜ斯くイスラエルを去らしめて我に事へさらしむるが如き事をなしたるや」といひ、彼らを捕へて再び奴隷とする爲、急に熟練なるその軍勢を召集し、殊に有力なる戰車六百輛（戰車は

エヂプト軍の追撃

紅海を渡る

闘れた馬匹二頭をして牽かしめ、之に二人の勇士が乗り、一人は盾を取りて馬を使ひ、一人は武具を取つてゐるものである。）を準備して、彼らの後を追ひかけて來た事である（出埃及記十四の三―八）。彼らはこゝより東南に曲つて、紅海の方へ進んだ。

（四）ピハヒロテ・ミグドル（出埃及記十四の二）　これは第三の停足地で、紅海の西岸である。その對岸にバアルゼポンがあつた。こゝにイスラエル人は戰車の日光に閃くによつて、パロの軍勢の近づくを認めたのである。彼らは元より戰術を知らない、又妻子を携帶してゐる爲に行動に自由がない。且又彼らを追擊せんとするエヂプト人の爲に、數百年間奴隷となつてゐた彼らは、之に對抗するの勇氣もない。しかも北方より彼らを追ひ來つたパロの軍勢を避くる爲の途は何れにもなかつた。東方には海があり、西南には高山が聳ゑて居る。超自然の救が何れよりか來るに非ずば、彼らは恰も袋の鼠の如く、一人殘らず再び奴隷の軛に繫がれなければならない狀態にあつた。

果して民の不信の咤が起つた。けれども神はモーセに命じて、かの杖を擧げ、手を海の上に伸べしめ給うた。視よ彼らの前にあつた雲の柱は移りて彼らの後にゆき、エヂプト人と彼らとを隔てた。たちまちその海上に、甞て吹きし事なき强き東風が起つて、水を吹きわけ、遂に水は左右に墻となつた。時は夜であつたけれども火の柱は彼らを照してゐた。すはエホバの勁よと彼らは海の中の乾ける處を進んだ。而して彼らが悉くわたり盡した時、夜は遂に明け、海の向ふは次第に明るくなつて、日は將に地上に出でんとした。けれども一層烈しき日はエヂプト人に光を放つた。記して「エホバ火と雲との柱の中よりエヂプト人の軍勢を臨み、エヂプト人の軍勢を惱ましたり」とある。彼らは今や海中の乾きたる中央にあつた。戰車は柔かな砂に這入つて、進行は困難となつて來た。彼らはその雲より火の輝くと共に、エホバがイスラエル人の爲に自己（おのれ）らと戰ひ給ふ事を認めた。やがて風は轉じて、水は兩旁より押寄せた。而して逃走せんとせしパロとその精兵は、共に沈みて海の藻屑と消え失せたのである。視よ、東岸にエホバの僕モーセは天を仰ぎつゝ、その右の手を海の上にのばしてゐる（出埃及記十四）。

エヂプト軍の全滅

紅海東濱の讃美

紅海の東岸に於ける讃美は、載せて出埃及記第十五章に錄されてある。あゝ何たる壯重・勇大なる調ぞ、後世安息日毎に、殿にて灌祭を注ぐと共に繰返へ（し）繰返へして歌は

れたのは實にこの歌である。而して亦やがて時は廻り來る。勝ちたる者ども神の立琴を持ちて、玻璃の海の邊に立ち、神の僕モーセの歌と羔羊の歌とを歌ふ「彼の日」の壯觀や如何に 默示錄十五の二)。

二、紅海よりシナイ山に至るまで

メラ　**苦き水の癒**

(一)メラ(出埃及記十五の廿二—廿六)　イスラエル人はやがて紅海を出立ちて、南に進んだ。彼らが始めて陣を張つた所は、海岸を去ること三十町なる現今のアインムサ(モーセの井)で、外國領事によつて、善良なる避暑地となつた。近來の旅行者の語る處によれば、十九の井があり、又棕櫚の叢の爲によき木蔭がある。モーセ時代にこの地方を耕作し、又水も多くあつた證跡がある。その次の驛についても疑はない。旅行者の言と聖書の記事とは符合してをる。イスラエルの民は三日ばかり砂利多き乾きたる川床を通行して、曠野にシュル(大なる壁)といふ名稱を與へられた、石垣の如き山の外には見るものなき、石灰石の山の間を經て、現今のハワラ(聖書のメラ)に到着したのであるが(上陸

エリムの幕張

點より十二里許)その途中疲勞且つ落膽の末、水のない爲に困難を極めた。三日間井泉を見る事なく、又携帶した水は既に盡きたであらう。漸くにしてハワラに着き、そこに泉を見つけたけれど、同地は硝石が多いため、水は苦くして飲用に適しなかつた。實にエジプトとシナイとの間の諸泉中、ハワラにある泉ほど惡い所はなく、又これを飲用する方法が今に發見せられないのであるが、神は民の呟きを止め、奇跡を以てその乏しきを補ひ給うた。而して神は彼處に於て民のために法度と律法を立て給ひ、彼處にて之を試み給うたとある。

(二)エリム(出埃及記十五の廿七)　メラよりガランデルの谷(聖書のエリム)と稱する豐饒なる地には僅かの道程で、「そこに水の井十二、棕櫚七十本あり彼處にて水の傍に幕張せり」とある。この地は久しく陣を張るに適當であるのみならず、次の驛(シンの曠野)に到るまでには、殆んど一ヶ月を費した(出埃及記十六の一)。この谷は現今も四季川流に潤されて、肥沃たる牧草があり、草木も少くない。直徑一哩ばかりの森もある。この近傍には人間も家畜も食物も充分あつて、休息する事が出來たのである。

紅海の濱

（三）紅海（民數紀卅三の十）　イスラエルの民はエリムを立つて、西南に向ひ、タイエベの谷を經て、紅海のほとりに出た。こゝは砂石ではなく、白亞の丘と岩とがある。その路を海に沿うて南下すれば、ラスアブ、セニメといつて、曠野中最も平地で、甚まじく旅行に困難多き所である。

（四）シンの曠野　民數紀卅三の十一）　彼らは次にシンの曠野に出た。シンの曠野とは前述べた如く、シナイ山脈の西にある南部一帶の砂原で、現今エルマルカといひ、白亞の丘のあるによつてかく名づけられた寂寞たる荒地である。彼らはこの荒地に來り、エジプトより携帶した食物は一ケ月にして殆んど盡きんとしてをる。その背後には遙か白亞の丘の向ふにシナイ山の中心である花崗石の山の紫の筋が見えてゐた。西は海にして、その間に遠く隔ろ豐饒のエジプトを微かに見ることが出來た。茲に於て不信は再び起り彼らはモーセに向つて呟いた。神は茲に不思議にも、彼らの缺乏を補ふ爲に、マナと鶉とを與へ、彼らが眞に律法に服從し、神に信賴するや否やを試み給うた（出埃及記十六章）。爾來四十年間、安息日を除くの外マナは日毎に降り來りて、彼らの常食となつたのである。

マナと鶉降る

レビデムへ

岩より水出づ

（五）レビデム　彼らはシンの曠野を出でゝ東に向ひ、ドフカ、アルシの二驛（民數記卅三の十二、十三）を經て、レビデムに到つた。即ち彼らは現今フヘキランの谷と稱ばれてをる所を通過したのである。この谷は靜閑にして、他に比ぶる處なきほど風景のよき所で、その。周圍に、奇形にして種々なる色の巍々たる山がある。

彼らはレビデムの平野に入らんとするに當り、その平野の界に突出した大磐石の前を通過したであらう。これは信ぜらるべきアラビヤ人の口碑によれば、擊ちて活ける水の湧き出でた岩である。紅海を出でゝ三日間、泉を見る事なく、且五月上旬の暑氣に彼の曠野を行軍した彼らは、尙一層の困難を覺えた事であらう。彼らがそこに到着した時、その水を渴望した事が察せらるゝ。彼らはその岩の前を通り、疑もなくその影の下に止まつたであらう。當時レビデム及びその附近の諸泉は、アマレクが保有してゐた。而して今や旅行のため渴き、又疲勞し、且落膽した敵を待つて、之を攻擊しようとして、その井と棕櫚の周圍に集合してゐたのである。さればこゝは岩を打つて奇跡の行はれた所で、

その向ふはレビデムの戰場であつた（出埃及記十七の一―七）。

次に戰場となつたレビデムの景色を瞥見しよう。こゝは石垣の如き山を以て圍まれた廣大且つ肥沃の平野で、恰も樂園にある思のする處である。出埃及記の時代に於ては此處及びこの附近は隨分人口があつて、その谷の北方には棕櫚の林、檉柳等の樹木があつて、その木蔭は旅行者の樂である。又時々鵯が囀り、流水の音も聽ける。この地方は半島中最も豐饒な所の一で、數里の間この谷に沿うて行くと、北方に高さ約七百尺のエベルタホネと稱ぶ山がある。これがイスラエル人がこの谷でアマレクの軍と戰つた時、モーセが起つて杖を天に向けて揚げた山と思はれる。その背後には赤き岩、片麻石及び雲碧の雷鉢のやうな處があつて、その向ふには高く聳ゆる山がある。南方はレビデムの古戰場である。その向ふには半島中最高山の一である巍々たるゼルバル山（六六九〇尺）が遙かに見え、その兩側にはレビデムに至る二の谷があつて、その間には異色奇形の亂山がある。終にモーセの立つた處から南東の方に當つて、諸山の間より青々としたシナイ山脈を眺むる事が出來る。出埃及記の時代にはこの附近に隨分人口があつたやうである。

レビデムの風景

このレビデムの谷は海拔千五百尺の高地で、附近にある綠の林と清き川とは大にその趣を異にせる風景である。種々なる色をした奇形の岩がある。白岩の間々に花と草とが生じ、その蔓は這下り、美麗な薄紅色の雲碧岩と灰色及び赤き岩との上より紅色の水が流れるやうである。此處に於て神の國を攻めたもの（アマレク）の運命は定まつたのであつた。もし之を預表的の事であるとすれば、後に神の國を攻むるものゝ報も同樣である（出埃及記十七の八―十六。）

アマレクの戰

アマレク（彼らはエサウの子孫で、イスラエル人の親族である）がイスラエル人の中疲勞した者を擊つたのは、前に到着した者の奇跡を目擊した時であらう。申命記には「疲れ倦みたるに乘じて、後なる弱き者を攻擊てり」とある。これは實に卑怯な、且つ甚だ惡むべき事である。而して彼らの斯る事を敢てなしたる正當の理由として謂むべきものは全然なく、唯これは「神を畏れざる」故によりかくなしたのであつた。申命記廿五の十八）

（六）シナイ山　イスラエル人はレビデムを出で、シークの谷を通過してシナイに進んだ。この谷は彼の花崗石の垣の如き山を横切つてゐて、檉柳の生ひ茂り路の曲る所より

シナイ山の遠望（ホレブ山）

中は花崗石で、その岩石の山々は益々高く屹立し、又灰色のため風景もいよいよ威儀を加へる。近世の有力な旅行者は、シナイに近い路について、かう曰つてをる「漸次進むに從つて、この嶮岨な岩は各々その周圍の山を離れて獨立したやうである。兩側が連續して混雜してをると思はれた山々の、離れて蒼天の見にるのは、恰も曠野に獨立した山のやうである。次第に廣き谷と長き平野を過ぎ行く路は黑く、又黃色の花崗石の二山脈の間を縫うてをる。而してこの大山脈の眼前にあたるこ恰もエジプトの巨大なる宮殿に行く道の路は路に列たる人石柱を見るやうである」と。

イスラエル人約一ヶ年の滯在所

さてイスラエル人が紅海をわたつてから、約七十里の路程を過ぎて、此處シナイ半島諸峰の中心である山に到着したのはエジプトを出た後三月目であつた（出埃及記十九の一）この地方は約そ千八百方里あつて、路の如き谷が多く、而してそれらは皆神がその民に律法を與へんとなし給ふ中央の大殿に至るものである。この地方は聖書にホレブともシナイとも稱ばれてあるが、後者は一個の山のみの稱で、前者はその總稱であらう。ホレブとは「乾きたる地の山」の意で、シナイとは荊の山の意である。現今はシナイの諸山をエベルムサと稱んでをる。その長さ約廿八町、幅十四町ばかりで、兩側には狹い谷があり、北東には平原の手の腹ともいはるべき廣い平野がある。この平野は現今エルラハと稱へられ、約二百萬の人が居住し得る處で、その前にエベルムサは高く聳へ、又その前に何處よりも見られる低い山がある。これは現今のラス・スフサフエで、エホバが降つて、十誡を授け給うたシナイ山であらう。若し然うであるとすれば、エルラハの平野は、イスラエル人の立つた所で、その前の低い山はラス・スフサフエの途中で、モーセが伴へる長老等と別れた所であらう。

シナイに於ける諸事件

イスラエル民族が、このシナイ山の麓に止まつてゐる約一年間に、次の五事件が行はれた。

（1）律法の賦與（出埃及記十九—卅一章）
（2）金の犢牛崇拜と罰（同卅二章）
（3）幕屋の建築及び聖別式（同卅五—四十章）
（4）人民聖別の律法の賦與（利未記）
（5）人民調査（民數紀略一—二章）

これによつて、イスラエル民族は、國民としての準備が一通り調うた譯である。

三、シナイ山よりカデシバルネアに至るまで

シナイ山の出發

（一）イスラエルの進軍　神の選民たる彼らがシナイ山麓に到着したのは出埃及第一年の三月目であつたが、彼らは約一年間そこに止まつて翌年二月二十日（太陽曆の四五月頃）遂にそこを出發した（出埃及記十九の一民數紀十の十一・十二）。その行旅の狀況は凡そ次のやうである。

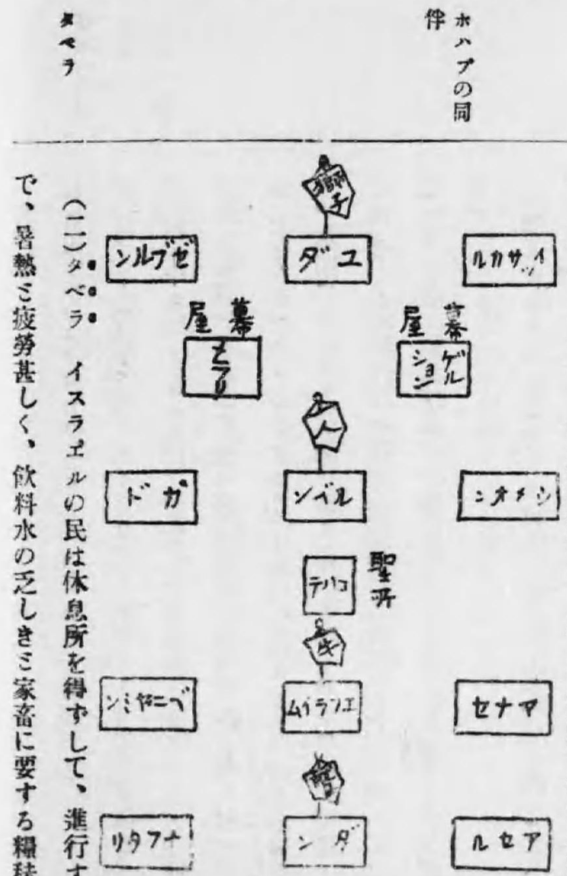
進軍の狀況

先づ幕屋の上にあつた雲が營を離れると、祭司は銀の喇叭を以て、出發の相圖をする（民數紀十一の一、同十の二・五—八）。すると一同其準備にかゝる。而してユダの子孫の營の旗につくもの即ちユダ・イツサカル・ゼブルンの三支派が、首先に進み出でる（民數紀十の十四—十六）。ユダの旗は赤色で、その旗章は獅子である。次にゲルション人とメラリ人が幕屋の幕、集會の天幕・幔・幕屋の板・横木・座・釘・柱等を運ぶ。第三にルベンの旗につくルベン・シメオン・ガドの三支派が進む。その旗は紅色で人頭の旗章がついてゐる。第四にコハテ人が聖所即ち律法の櫃・パンの案・燈臺・香壇・從事の器・祭壇・油等を運ぶ。その時モーセは信仰に基ける勇氣と喜悅を懷いて、イスラエル人が約束の地に進行する事を表はす如く、常に教會の各進歩を現はす所の祈禱と讃美を混じた左の言を發する。

『願くばヱホバよ起き上り給へ、然ば汝の敵は打散らされ、汝を惡む者は汝の前より逃げさらん』（民數紀十の卅五）

第五にはエフライムの旗即ち青に牡牛の頭の旗章ある旗の下につくエフライム・マナ

セ・ベニヤミンの三支派が進む。終にダンの族即ち黄色に鷲の章ある族の下につくダン・アセル・ナフタリの三支派進む。以上を図解すれば左図の通りとなる。

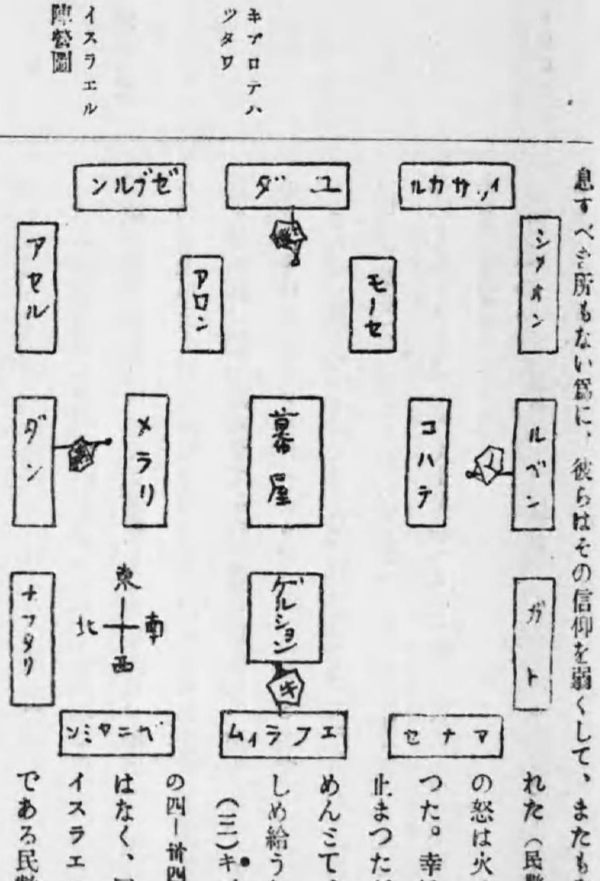


イスラエル進軍之図

彼らの出發に際し、モーセは義兄ホバブに偕に行く事を勸め、彼の之に應じた事は、該地方に於て泉と秣草のある所を發見する上に大なる利益があつた。前述の如くこゝは畏るべき曠野であつたから。

(二)タベラ　イスラエルの民は休息所を得ずして、進行する事三日、時は五月の中旬で、暑熱と疲勞甚しく、飲料水の乏しきと家畜に要する糧秣の少きと、又見渡す限り休息すべき所もない爲に、彼らはその信仰を弱くして、またもや呟の聲をエホバの耳に入れた（民數紀十一の一）。こゝに於て神の怒は火となつて燃ひさるを得なかつた。幸にモーセの祈によつて火は止まつたが、神はこの事を記憶せしめんとて、タベラ（燃ゆる）と名づけしめ給うた（民數紀十一の一―三）。

(三)キブロテハツタワ　民數紀十一の四―廿四）こゝはタベラと別の所ではなく、同所の別名である。それはイスラエルが陣を張つた場所の目録である民數紀略三十三の十六に、タベラを記載してない事によつて明かである。茲に雲の柱は止まり、やがて幕屋は組立て



られた。モーセは『エホバよ千萬のイスラエル人に歸り給へ』と祈つた（民數記十の廿六）。而して彼らは定められた如く、各々その營を張つた。即ち上圖の如くに。

慾心の墓

彼らはこの處に於て慾心を起し、神の備へ給ふ食物を輕んじ、エジプトの食物を慕うて泣いた。モーセは殆んど絶望して神に祈り、神はその願に應じて、モーセがイスラエルの長老中より選び出した七十人に、モーセの上にある靈を分ち與へ給うた。又民の缺乏を補ふ爲、鶉を降らせてその大能を現はし、慾心を罰するを以て、その聖きを示し給うた。その地をキブロテハツタワ（慾心の墓）と名づけられたのは、その慾心を起した人々それは「彼らのうちにて最も肥ゆたる者……イスラエルのわかき男」であつたとある。詩篇七十八の廿一）をそこに埋めたからである。また他の所に錄して「エホバは彼らの願慾をかなへ給ひしかど其靈魂をやせしめ給へり」とある事は、肉を求むる人に對する、大なる警戒である。（詩篇百六の十五）。

ハゼロテ

（四）ハゼロテ（民數紀十一の廿五）　イスラエルの民はキブロテハツタワよりハゼロテに進んだこの地方は石垣の圍が多く、今はその處を發見し難い。しかしシナイより十五六里の隔りがある事は推察せられる。此處でモーセの姉ミリアムは、モーセを謗つた罪により、一時癩病となり、爲にイスラエルの陣營は七日間進行を中止しなければならなかつた（民數紀十二）

※この地方には「ハゼロテ」と稱する所が幾つもある。その内の一つは、荊ある金合歡の木の束を埋めた低い石垣を以て圍まれてあつて、若しその中に天幕や家畜があれば攻め取る事の出事ない樣に出來てゐる。

カデシバルネア

（五）カデシバルネア　イスラエルの民は、やがて出發して、パランの曠野を經（民數紀十二の十六）、殆んど約束の地たるカナンの界に到着した（申命記一の十九―四十六、民數紀十三の廿六）。こゝは近來之を研究する旅行者によりて確證せられた。即ちカデシは現今のアインカデス（カデスの泉）で、パランの曠野の北東の高地にある。この高地はアモリ人の山で、そこに彼らの城邑があつた。長さ二十八里、幅二十里あつて、北の方は僅か隔てて、パレスチナの南の界ベエルシバに達してゐる。所謂南の地である。此處は牧畜に適當の地で、廣き谷もあり、又以前の住家の跡も多く、又北方には葡萄を作つた跡もあつて、かの探偵がかの地の豊饒な證として持ち歸る爲に、葡萄の球（一房が十斤乃至十二斤あ

アモリ人の山

る）を取つたエシコルの谷は、多くの人々が想像した如くヘブロンの附近ではなく、此處であつた。カデシはアインカデス（カデスの泉）の湧き出づる岸の下にある平地で、東方に山脈があり、西方に廣き平野があつて、カナン人は此處でイスラエル人の進軍を待つ故、探偵は南の地を通過するには山に登らなければならないけれども、カナン人の軍を避けん爲に、わざ〳〵アインカデスの南を東に繞り、聖書に記された如くヂンの曠野を通過し、而して山に登つたのである（民數紀十三の十七・廿一・廿二）。歸路は北より來たので、嫌疑を受くる事もなく、無事に歸り得たのである（民數紀十三の廿二—廿六）。

間者の出發

間者の出發したのは葡萄の熟し始むる時であつたとあるから、七月下旬或は八月上旬頃であらう。彼らは民の請求により、神の許の下に遣はされたのである（申命記一の廿二、民數紀十三の一）。彼らの名は何れも美はしきものであつた（例へばイガルは「神救ひ給ふ」パルテは「エホバ救ふ」アンミエルは「神の僕」ギウエルは「神の稜威」ホセアは「救の望」等）が、ヨシュアとカレブの二人を除く他の十人は、その實不信の輩であつた。彼らの不信仰と臆病はイスラエルの全營に恐懼を起さしめ、その結果遂に曠野に於ける三十八年間の漂泊

不信仰の結果三十八年間の漂泊

を宣告せらるゝに至らしめた（民數紀十三の廿七—十四の三十八）。

彼らがこの宣告を聞いた後、擅に山に上り、アマレキ人とカナン人とに打敗られ、追擊されたホルマ（民數記十四の卅九以下）は、元來ゼバテ（觀望樓）と稱せられた所で（士師記一の十七）、現今はセバイタとよばれてをる。その近傍に、右の觀望樓が發見せられたことはセバイタを守る山に建てられた堅固な城であつた。その北にダイガト・エルアメリン（アモリ人の谷との意）があり、南西にはラスアミル（アモリ人の頭との意）と名づくる山脈がある。これによつてこの地方がアモリ人の山であつた事が確證せられる。ホルマ（詛ふ）の名はこの時につけられたものでなく、後日アラデ王が攻めた後、イスラエル人がカナン人の邑を悉く滅ぼさんとの誓願をした時に名づけられたのであらう（民數紀廿一の一—三）。

ホルマの敗北

四、カデシバルネアよりバランの曠野を經て再びカデシバルネアに至る迄

カデシ

（一）イスラエルの民の停足地　イスラエル人は日久しくカデシに居り（申命記一の四十六）、而して紅海に進んで行つたと記してある（同二の一）。カデシは「聖所」或は「潔くする」との意である。元來エミンパテ（鵜の井）と稱へたが（創世記十四の七）、そこに於て

行はれた前項の事件により、カデシにバルネア(漂泊)を加へて、カデシバルネアといふ名稱となつたのであらう。このカデシより最も遠い停足地は紅海のエラナ灣に近いエジオンゲベルであつた。かれらは三十八年間漂泊つた後、再びカデシのヂンの曠野に行つたのであるが(民數紀卅三の卅六)、その間にある停足地は民數紀略三十三の十八—三十五に記載してある。リテマを振出しに十七個所の停足地がある。リテマとは「エニシダの谷」の意で、こゝはカデシに近い所にあつたであらう。現今カデシの近傍にあるアブレテメテと稱ぶ所がその古跡らしい。イスラエル人がこゝに陣を張つたのは、植物と川がある爲であつた。而して他の驛については、その名稱を研究する事によりてその近傍に水と植物のあつた所を選んで陣を張つた事が察せられる。一例をあげるとリンモンパレヅ(柘榴の遶)はコラの反逆の爲に嚴罰を受けた所であらう。リブナ(白)はそこに白楊のあつた爲に、かく稱ばれたであらう。シヤベル山(美善の山)、ミテカ(甘)はその處の水の甘い故であらう。ハシモナ(肥沃或は豐饒)は現今も甘水の池があつて、その周圍には植物が繁茂してをる。ベネヤカン或はベエロテベネヤカン(ヤカンの子孫の井)はヤカンの子

リテマ

イスラエルの停足諸地

孫が前の住所よりエドム人に逐出された時堀つた井のある所であつたらう(申命記十の六創世記卅六の廿七・歴代史上一の四十二)。ヨテバタ(善き事)、エブロナ(渡場)、及び他の所は、或は風景或は其處で行はれた事件によつて、名づけられたであらう。例へばケヘラタ(集る)、マケロテ(集會)、ハラダ(恐懼の所)等である。これらの停足地は、近世の研究により概ね見出されたこの事である。

三十八年間離散

これらの驛の少い事と、その位置によつて、彼らは各驛に久しく滯在したこと察せらるるのみならず、原文の或る言によれば、民は幕屋及びレビ人を中心として、三十八年間諸處に離散せられたこと見ゐる。當時イスラエル人が漂泊うた地方に於て、斯る多數の遊牧の民と家畜を支へる事の出來たのは明かである。若し水があつて之を利用すれば、その曠野の何處に於ても容易に豐饒なる圃を開墾する事が出來る。これに關してイスラエル人がエジプトで灌漑を見學した事は大に有益であつた。最後に言ふべき事は、こゝは全く人々を離れた別世界でなかつたといふ事である。それはこゝが東洋とエジプトとの間の大道に近いばかりでなく、ベネヤカンの如き他の種族と交際をする事を得たからで

曠野は別世界にあらず

ある。申命記二の廿六—廿九によれば、常に食物と水とを買ふ事が出來た。又同書二の七によれば四十年間乏しき事なきのみならず、財産もいよ〳〵増加した事が現はれ、又同書八の十四以下、同廿九の五、又ネヘミヤ記九の廿一によれば、神はその民の必需物を著しく備へ給うた事は明白であつて、又將來に就ける預言的形容中に、神が曠野に於てイスラエル人に對する恩寵的の待遇を思ひ出す事が數々記されてある（イザヤ四十三の十六—廿一參照）。

安息日を破りしものゝ處分

（二）漂泊中の事件　この三十八年間の記事は甚だ少いけれども、神に逆ふ二つの事件が記載せられてある。その一は安息日に柴を拾ひ集めた人の處分せられた事で（民數紀十五の廿二—廿六）、その二はコラとその黨の反逆をなした事である。その主領等はその家族及び一切の所持品と共に、生きながら地に呑盡され、他の者らは疫病の爲に滅された。若しモーセとアロンが死ねるものと生ける者との間に立つて贖罪をする事がなかつたならば、災禍は奈邊にまで及んだかも知れなかつたのである（民數紀十六〇）。

コラの反逆

この第二の事件に關聯して、アロンが神に選ばれた祭司長である事を現はす爲、神は各支派の牧伯の名を記せる杖十二本を執りて、至聖所の契約の櫃の前に置かしめ、一夜にアロンの杖のみに「芽をふき蕾をなし花咲きて巴旦杏の果を結」ばしめ給うたのであつた。これは甦り給へる眞の祭司長イエスを豫表するものである（民數紀十七〇）。

アロンの杖芽ざす

（三）第二回のカデシ滯在中に起りし事件　三十八年の漂泊後、イスラエルの民は、曾て不信仰と反逆をなした爲に、漂泊と離散の運命に陷つたその始の出發點であるカデシに、再び集つた。その時約束の地に入る事を許されたヨシュアとカレブを除いては、前代より遺つた者は唯ミリアム、アロン、モーセの三人に過ぎなかつた。此處に於て、左の三事件が起つた。

再びカデシに集合

（1）モーセの姉ミリアムの死（民數紀廿の一—二）。

（2）水に對する呟（同廿の三—一三）。

（3）エドムに使者を遣る（同廿の十四—廿一）。

エドムに使を遣つたのは、エリコ附近のヨルダン河の向から、パレスチナに入る爲に、この國を通過する承諾を得る爲であつた。而してイスラエルの民は、未だその回答を得ない内に、エドムの境に向つて、進みはじめたのである。

第三節　エドム國及びモアブ國

五、カデシバルネアよりエドムを廻りてヨルダン河に至るまで

（一）エドム國　前項の終にイスラエル人がエドムに使を遣つた事を學んだが、そのエドムとは如何なる國であるか、先づそれから述べて行く事とする。

位置と廣さ

（1）エドムの位置　廣袤　エドムはモアブの南に接した國で、その境界は死海の南部に流入するゼレデ河である。東はアラビヤ大砂漠の一部であるテマンの地で、南はミデアンの國とアカバ灣頭、そして西はアラバの地である。即ちこゝはアカバ灣と死海との間に横はる凹窪んだ地で、その長さは約五十里、幅は十二里ばかりである。

地勢

（2）地勢　この地は極めて山脈が多く、西の方アラバに沿うた所には石灰石より成れる丘陵が起伏し、その後部は奇石が峙立つて、二千尺の山をなして居る。而してこの山の東面は次第にアラビヤの砂漠に向つて傾いてをる。かやうに山脈が多い國ではあるが一般に地味肥ゆ、山間の谷間は昔から田園に適し、人民も豐裕である。これは神がエサウに約し給うた契約の應じたものであらう。（創世記廿七の卅九・四十英譯參照）

ボツラ

（3）著名の地　北境に近き首都ボツラ、奇異なる岩窟のある爲に有名なペトラ（本書第九章（二）の12參照）、及びアカバ灣頭の海港エジオンケベル等は主なる邑である。

風習

（4）風習　エドム人はアブラハムの血統であるけれども、その結緣せるカナン人の偶像を崇拜した。その習慣中の最も奇異なる事は、彼らが一般に洞窟に住つてをる事である。これはエドムの山岡は柔軟な砂石によつて出來てあるから、之を堀つて容易く洞窟を作ることが出來たのと、一は盜難を避くる爲であつた。ペテラにある洞窟の神廟・王宮・住家等は、實に壯大目を驚かすものであるこの事である。勿論彼らは偶像禮拜の民であつて、その宗教には人身犧牲の陋習もあつたといふ。ヨセフアスの言ふ所によれば（古事記十五卷十の九）エドム人の拜んだ神の中にコゼといふ神がある。この神はナバテヤ及びハウランの碑銘にあるカジウ、またビニケ人のカシオスと同一の神であらう。

史略

（5）歴史　極ざつと述べよう。こゝに始めに住居してゐたものはホリ人であるが、

その出所は明でない。その後ヤコブの兄エサウの所領となり、その裔であるエドム人が之を繼續した。彼らは常にヤコブの子孫であるイスラエル人に對して、反對の態度を取つたが、ダビテ王によつて一旦滅ぼされた。その後再興してエルサレム滅亡の時にはネブカデネザルに屬して、エルサレムを攻めた。それ故預言者や詩篇の記者は甚く之を駁擊した（ナバデヤ書參照）。俘囚時代にはその叛圖はユダの南よりエジプトにまで及んだが却つてその自國セイル山はナバテ人の占有に歸してゐた、その後マカビース家の征服する處となり、紀元後百〇五年に羅馬帝國に編入せられた。

ホル山

（二）ホル山（民數紀廿の廿二―廿九）カデシよりエドムに使を遣はすこと間もなく、イスラエル人はエドムの境に近き現今モデラと稱んでをる所に進んだ。こゝはカデシより一日路ばかり、廣きムレの谷を通過すると、そこに獨り聳ゆる高き城の如き奇妙の山のある所である。これがアロンの永眠したホル山で、ホル山とは奇妙な山といふ意味である。中命記十の六にはモセラとあるが、これは同一の所である。昔モセラとよんでゐたのを、前記の如く今モデラと稱ぶに至つたのである。イスラエル人は此處に止まつて、エドムの王の回答を待つた。こゝは東南と南西に至る別れ道（或は谷）の入口に當り、場合によつては何れの路をも撰び得たからである。しかのみならず、モデラは高地であるから、こゝより或は東よりエドム人、或は西よりアマレク人やカナン人が攻擊して來るのを、容易に見渡す事が出來たのである。

アロンの永眠

エドムの通過拒絶

※民數紀廿三十三の三十七以下によれば、アロンはエジプトを出た後、四十年の五月朔日に死んだが、行年百二十三歳であつた事が知られる。

アラデ王の來襲

やがて使者はエドムより歸つて來た。しかしその齎した返事は凶報で、エドムを通過する事を絶對に拒絶せられたのみならず、彼らの軍勢がイスラエルの營に近き界に集まつた事である。そこでイスラエル人は止むを得ず、先づ退いて再びムレの谷を通り、エドムの軍勢が待つてゐた所より、遙か南方のアラバに至り、グドハギドの谷とアドベの谷を通過した（聖書にはグデゴダとヨテバテとある、中命記十の七）。

こころがムレの谷から南に繞らうとした時、アラデ王はイスラエル人が隊商の道路より自己の領地に攻め入らうとして居ると聞いて、イスラエルを攻め擊ち其中の數人を

虜にした。多分其後衛を攻めたのであらう（民數紀廿一の一―三）そこでイスラエル人はカナンの城邑を悉く滅亡さうといふ誓願を立てたが、神は之を聽容れて、數年後勝利を予へ給うた（士師記一の十七）。彼らはこの來らんとする勝利を預言的に、その地名をホルマ（悉く滅ぼす）と稱んだ。

イスラエル南へ向ふ

火の蛇出づ

※アラデは現今のヘブロンより南八里を距るテルアラデと同一である。

（三）アラバの幽谷　エドムの拒絶、アラデ王の攻撃により、イスラエル人は愈々エドムの南を繞つて、エドムと砂漠の石灰石の高地との間道を經て、進み行く事とした（申命記一の八）。その途中に於て他の困難があつた。それはアラバの幽谷に於ける事件である（民數記廿一の四―九）、この幽谷は寂寞として暑氣甚しく、草木なく、道路は嶮悪で困難である。加ふるに水少く、「マナ」の外食物のない爲、民はモーセとアロンに向つて呟いた。そこで神は彼らを罰せんとて、火の蛇を遣り、多くの人を滅し給うた。元來この地方は毒蛇の多い所で、それは旅人によつて數々確證せられた。某記者は言つてをる「濱の砂に蛇の通つた跡が處々に見ゆる。その蛇は諸方から匐うて來てをるが、或跡は直徑一寸七分

イスラエルエドムの南を廻りて北進す

以上もあつた。案内者もこの近傍には蛇が多いといつた」と。又イスラエル人の通過した路を通つた他の旅人の言に「午後は班で、火の點や波線のある、又その齒に其しき毒のある種類の蛇がをる」とある。この蛇を大層恐れるベドヰン人も、「この邊に斯る蛇が多く居る」といふ。この蛇に咬まれた時は、恰も蝮に咬まれた如くその毒が直ちに全身に廻り、燒火箸を通す如き苦痛があるとの事である。この災禍は、モーセが野に、銅の蛇をあげた事によりて取去られた。（ヨハネ三の十四參照）

（四）エドムの東　エドムの南を廻つたイスラエル人は、現今ダマスコとメカの間に於ける隊商の通過する同じ路を北進した（民數紀廿一の十―二十）。彼らはテマンの地を經過し、ゼレデ川を渡りモアブの曠野を經て、遂にモアブ人の地とアモリ人の領地との界であるアルノン川（現今モジブの谷）に到着した。この川の流るゝ所は眞に奇妙で兩岸の距離約一里七丁、その南岸は高さ二千五百尺、北岸は千九百五十尺である。アモリ人の領地は當時このアルノン川よりヤボクの流までに及んでゐた。これは元來モアブの領地であつたが、モアブ人はアモリ人に追はれて南に退いたのである（民數紀廿一の廿六）。

井の水の歌

アモリ人の王を破る

バシヤンの征服

モアブの野に於ける七事件

この旅行中の一挿話として、彼らがベエル（井）に至つた時、エホバがモーセに向つて「汝民を集めよ我これに水を與へん」といひ、牧伯と君長の手によりこれを堀らせて、多くの水を湧出さしめ給うた事である。かの有名な「井の歌」、古雅淳朴なその歌のうたひ出されたのはこゝである。（民數紀廿一の十六―十八）。

（五）死海とヨルダンの東　無事モアブを通過したイスラエル人が、アルノン川の東方の上流曠野の處を渡り、アモリ人の地を通過しようとして、その許諾を求めた時、アモリ人の王シホンは之を拒み、却つて神の民を攻撃した爲、彼らの爲に敗られ、その領地を占領せられた（民數紀廿一の十二―廿一）。民數紀略の特點なる勇壯な「凱旋歌」（民數紀廿一の廿七―三十）はこの時より歌はれた。

かくてイスラエル人は別働隊を遣はして、北の方バシヤンの王オグに勝ち、その領地とギレアデ山を占領し（民數紀廿一の廿一―廿五）。全軍はヨルダンの東岸、エリコに向ふ所、所謂モアブの平野と稱せらるゝ所に進んで、そこに止まつた。こゝはこの近傍の諸山より奔流し來る多くの流に依つて灌漑れた肥沃な秣地で、その廣大なる陣營は、北はアベルシテム（金合歡の野）より、南は曠野の界にして死海に接する、ベテエシモテ（荒地の家）に至るまで、數方里に亘つてゐた。此處で次の諸事件が起つた。

（1）バラムがイスラエルの民を詛はうとして、なし得なかつた事（民數紀廿二―〇―廿四〇）

（2）神の民のモアブの婦人に對する醜行と其刑罰（民數紀廿五〇）

（3）神民の戸籍調査（民數紀廿六〇）

（4）モアブ人及びミデアン人を襲ふ（民數紀廿一〇）

（5）二支派半に領地を配付する事（民數紀廿二〇）

（6）律法の再布及び漂泊歴史の再説（申命記全卷）

（7）モーセの永眠（申命記廿四〇）

（六）モアブの國　前項に於て私共はイスラエルの民が無事モアブの國を通過したのを見ると共に、モアブの王がバラムをして、イスラエルの民を詛はしめようとしたのを見た。そして亦、神の民とモアブの婦人との醜行を耳にした。その復讐の爲の戰のあつた事をも知つた。されば私らは今すこし此國について調べて置く必要がある。

モアブの位置

この國は死海の東南、アルノン河の南にあつて、地中海面より高き事三千尺、長さ二十里、幅六里の小國である。しかし時によつては、ヤボク河の邊まで廣まつた事がある。それ故エリコの前面ヨルダン河の彼方の地は、當時アモリ人の所屬であつたにも拘はらず、以前よりの名稱を繼續して、「モアブの平野」とよばれてゐたのである。

モアブの惡習

この國人はゾアルの近傍に生れたロトの子孫で（創世記十九の三十―卅八）、イスラエル人の親族であるが、彼らは最も卑しき偶像崇拜の民で、その先祖の如く（モアブとは「父より」との意）最も淫洪なる儀式を以て、ケモシ又はバアルペオルと稱する偶像を祭り、時としては人を犠牲として献ぐる事もあつた。即ちモロク禮拜である。（モアブの歴史につきてはイザヤ書十五・十六兩章を見るが可い）

バラムの招かるる

（七）バラムの預言　さて、何故モアブの王バラクは、多くの出費と勞力を賭して、遠くメソポタミヤのペテル（こゝは魔術を以て職とする者の邑で、ユフラテ河に沿うてアラム即ちメソポタミヤの國にあつた。民數記廿二の五、廿三の七、申命記廿三の四。）から、魔術師バラムを招き、彼の預言にそむいて、幾度もイスラエルを詛はしめやうとしたのであるか。私は本書の性質として斯る問題について論ずる事を避けるが、唯一言述べる事を許されるならば、これは實に偶像教の死活問題であつたからであるといふ。

バラム來る

モアブの王と魔術師バラムの會見した處は、その北境に近きイル・モアブと稱ばるゝモアブの首府である（民數紀廿二の卅六）。彼らはそこよりキリアテホゾテ（後にキリアタイムといふ。ヨシユア記十三の十九、エゼキエル書廿五の九以下參照）にゆき、其處か其附近で燔祭を献げ、バラムは牧伯等と偕に祭的の筵に就いた（民數紀廿二の卅九・四十）。聖朝バラクは彼をバアルの祭事の献げた地であるバモテバアル（バアルの高山）と稱するアタラス山の山嶺に伴うて行つた。彼處は又バアルメオン或はベテバアルメオン若くはベテメオンともいひ、眺望絶佳の地である。乃ち死海は餘りに低くて見る事が出來ぬが、北を望めばエルサレム、ゲリジム、タボル、ヘルモン及びギレアデ等は皆指呼の中にあつた。かくの如く遙に約束の地を望み得たのであるけれども、彼は山狀によつて、唯わづかにイスラエルの民の極端（はし）、即ちその陣營の外邊を見る事を得たのみである（民數紀廿二の四十一）。こゝにバラムは七の祭壇を築き、七の牡牛と七の牡羊を献げ、偶像教の習慣に從つて、エホバに會はん

バラム、エホバに會ふ

バラムの第一歌

バラムの第二歌

さて、バラク及びモアブの牧伯を祭壇の傍に殘して、一つの高處に登つた（民數記廿三の一—三）。彼は偶像教の魔術師が或る自然の物體を見て神託であるごとくするやうに法術を求めたのである（民數記廿四の一參照）。エホバはバラムに會ひ給うたけれども法術を以てゞなく、バラムの口に言を授け給うた。「バラムの第一の歌」はこれである（民數記廿三の七—十）。

バラムの第二に上らせられた所は、イスラエルの全軍を見得るピスガの嶺にある「斥候の原」であつた（民數記廿三の十三・十四）。その時バラクの豫期せし所は再び裏切られて、バラムは歸つて「第二の歌」を宣べた（民數記廿三の十八—廿四）。

バラクは痛く失望した。けれども尙三度その場所を變へて、之を試みようとした。この度は以前よりも稍北方の、曠野に對するペオルの頂を撰んだ（民數記廿三の廿七—三十）。バラムは授け給はなかつたが、かのサウルに於けるが如く、神の靈が彼にのぞんだので、彼は恍惚として力なく、殆んど無覺の狀に陷つた。即ち彼自身の言によれば、その外なる眼は閉ぢられて、恰も打倒さるゝ如くに倒されたが、その內なる眼が啓かれて、全能なる神の現示を見たのである（民數記廿四の一—四）。かくてバラムの宣べたのが、その「第三の歌」である（民數記廿四の三—九）。

バラムの第三歌

バラムの第四歌

偶像教の致命的預言

モーセの臨終前の諸事

バラクは失望の餘、怒つてバラムを叱責した。けれども バラムは未だ盡さゞる任務があつた。彼は王と別れざる前に、既にエホバより示されて、未だ告げざりし使命を傳へなければならなかつた。曰く「來れ我この民が後の日に汝の民になさん所の事を汝に告げ知らせん」と、かくて宣べたのが「第四の歌」である（民數記廿四の十—廿五）。

私は前に、バラクがバラムを招いて、イスラエルを詛はしめようとした事は、偶像教の死活問題に關はるからであると一言した。而してその結果は全然バラクの期待に反し、バラムは偶像教に對する致命的預言をなしたのであつた。而してこの「第四の歌」は偶像教の代表者としてのモアブ、アマレク、ケニ人、アッスリア國及びこの世の諸國並に世の終末に關する者であつて、全然神の選民の勝利を預言したものである。

（八）モーセの臨終　我らは右の事件が行はれた後、イスラエルの民に行はれたモアブの婦人に對する醜行及び其刑罰。第二回の戶籍調査、之に附帶せるゼロペハデの女等の

件

産業に關する事件（民數紀廿七の一―十一同廿六〇）。祭的法令の發表（民數紀廿八〇―三十〇）。モアブ人及びミデアン人に對する襲擊。ルベン、ガド、マナセの半支派にヨルダン以東の土地を分與した事。レビ人の郊地及び逃遁の邑に關する規定の發布（民數紀廿五〇）。律法の再布及び漂泊歴史の再説（申命記）等に關する穿鑿を略して、直ちにモーセの永眠に關する記錄に觀察の眼を向けよう。

モーセの願担まる

既にその準備全く整ひて、イスラエル人は今や將に約束の地に入らうとしてをる。モーセが偖にその恩惠に預らうと願つたのは、固より當然の願である。併し神はこれを許し給はなかつた（申命記三の廿三―廿六）。彼は自己が其代表者であつた者（イエス）に倣つて苦慮した後、その希望を棄てゝ、「我意にあらず聖旨のまゝに忠したまへ」と言はれたその尊き平安の經驗を學ばねばならなかつた。彼は恰も父がその家を整ふる如く、その死の爲に準備した。百二十年の長年月にわたる彼の生涯は、唯イスラエルの事をのみ思つたのであつたが、今や其臨終に至るも、彼の心は毫も變らない。彼の最終の考慮は彼が愛せし人民と、彼の獻げた事業の爲で、即ちヱホバがその會衆の爲に、彼らを導き出し、彼らを導

牧者の與へらるゝ願き

かる

ピスガの峯のモーセ

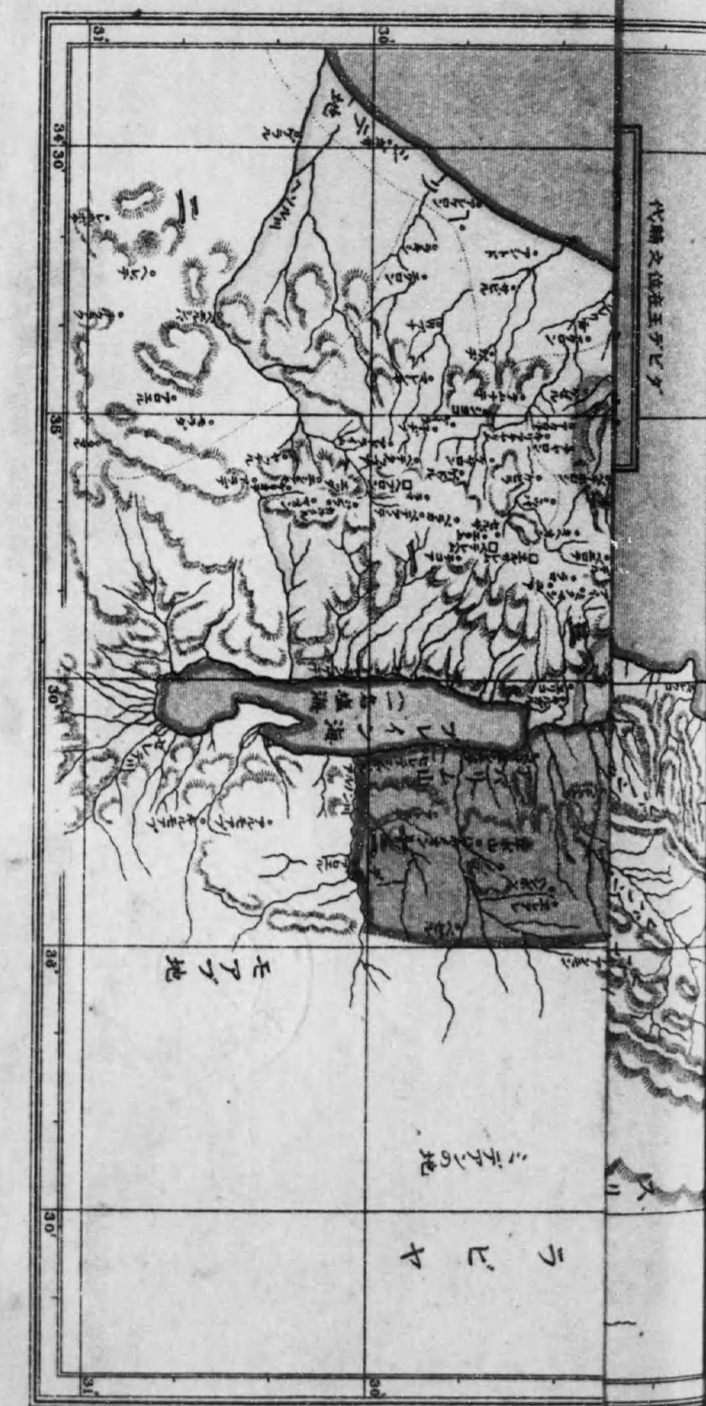
き入れる牧者を立て給はん事を願つたのである（民數紀廿七の十六―廿三）。而して彼の最後の記事は神の慈惠と眞理との歌（申命記卅二）。と、イスラエルに對する祝福（申命記卅三）。である。

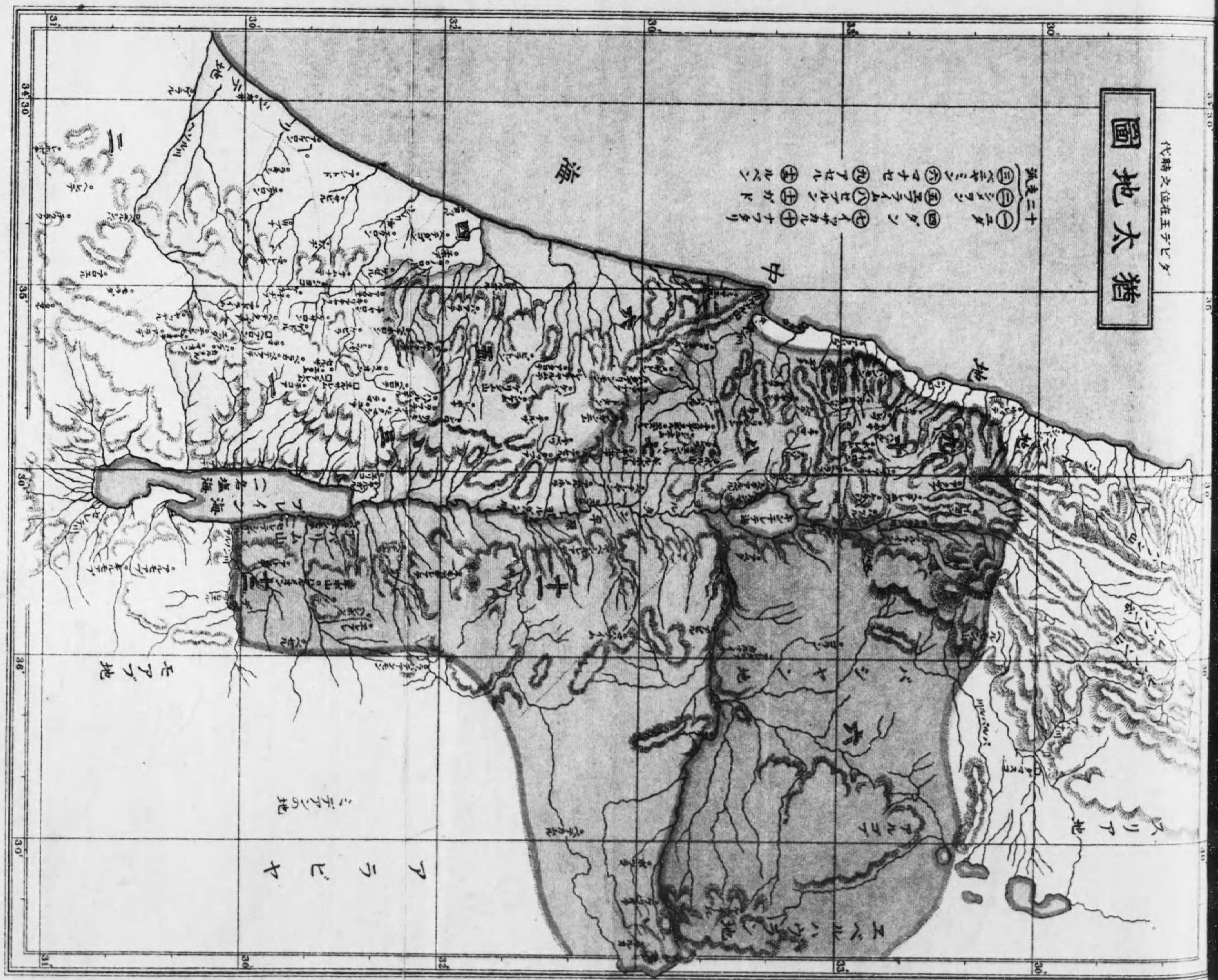
悲める民の森然として沈默せる中に、彼は獨りその最終の旅程に就いた。彼がピスガの山嶺に達したまでは、彼らは其姿を見たであらう。彼等は彼が太陽の沒せんとする時、其處に立ちてヱホバの如何に眞實なりしやを見んとて、その地の全景を眺望しつゝあるのを目擊したであらう。しかのみならず、暮色すでに蒼然たるに及んで、彼が或る谿谷に向つて進み行く姿をも、模糊の中に認め得たであらう。けれども是れより後は、エリヤと共にキリストの變貌の山に立てる時まで、絶にて人の目に見られなかつたのである。實に數百年の久しき以前に、モーセの渴望した所は、此時に於て、彼の考へ望みしものよりも遙かに過ぎて、成就せられたのである。彼は約束の地にある美はしき山（キリストの變貌山）の上に立ちて、凡ての約束を成就し給ふ者を拜み、又これが證をなした（ルカ九の廿八―卅六）。これはモーセの如き生涯に適當な終局であつて、嘗てアブラハムの忠僕ダマスコのエリエゼルは、その主人の子に與へ給うた新婦を携へ歸つた時、嗣子の產

業を受けたのを見て、己が任務を完うしたのを喜んだ事であるが、それは彼の山に於て神の子をその家で拜んだ神の家宰（モーセ）のこの喜にはこても及ばなかつたのである。

ピスガの峯の眺望

ピスガの山嶺はその高さ四千五百尺、急峻ではあるが嶮岨ではない。その絶頂に立つて四方を眺むれば、眼界殆んど限なく、東は遠くアラビヤを望み、茫々たる平野に於て草及び麥の靡ける狀は、恰も波濤の如く、南を向けばモアブの地を見渡して、遙にホルミセルイの兩山、およびアラビヤの赤き花崗石の峰を望み得らるゝ。西は死海に近づくに從ひて、地愈々低く、敢て眼界を遮る一物もない。而して眼下にある死海は、溶かした黄金の帶の如く日光を反射してをる、西岸には波が打つてをるが、東濱は見る事が出來ぬ、恰も深い洞穴から出てをるやうである。海より尚彼方を見れば、ヘブロンの山脈がある。更にその北を眺むればベテレヘム及びエルサレムを望む事が出來、聖城・モリア・橄欖の諸山は皆指呼の裏にある。その一方の山峽は即ちエリコに對する道路で、他の一方には圓きベニヤミシの山峯を眺める事が出來る。又北に向へば棕櫚の邑なるエリコより、ヨルダンの蜿蜒として流れてをるのが見る。その彼方にはゲリジム山が聞き





セイルの高山、およびアラビヤの赤き花崗石の峰を望み得らるゝ。西は死海に近づくに從ひて、地愈々低く、敢て眼界を遮る一物もない。而して眼下にある死海は、溶かした黄金の帶の如く日光を反射してをる、西岸には波が打つてをるが、東濱は見る事が出來ぬ、恰も深い洞穴から出てをるやうである。海より尙彼方を見れば、ヘブロンの山脈がある。更にその北を眺むればベテレヘム及びエルサレムを望む事が出來、聖城・モリア・橄欖の諸山は皆指呼の裏にある。その一方の山峽は即ちエリコに對する道路で、他の一方には聞きベニヤミシの山峯を眺める事が出來る。又北に向へば棕櫚の邑なるエリコより、ヨルダンの蜿蜒こして流れてをるのが見ゆる。その彼方にはゲリジム山が聞き

頂を露はし、その向にはエスドラエロンの平原があつて、又カルメル山の一角をも望み得られる。茫々として遠く、煙霧の如く見ゆるのは、即ち西の海である。尙ほ北を望めばタボル、ギルボアの諸山、白雪皚々たるヘルモン及びレバノンの最高山脈をも眺められる。而うしてその前面にはアヤロンの深林、ギレアデ山、又バシヤン及びボズラの地がある。記して「エホバモーセにギレアデの全地をダンまで見めし、ナフタリの全地、エフライムとマナセの地、およびユダの全地を西の海まで見めし、南の地と棕櫚の邑なるエリコの谷の原を、ゾアンまで見めし給へり」とある（申命記卅四の一―三）。

以上は即ちモーセが彼の山頂より見た景色である。彼は充分に之を眺めた後、永き眠に就かんとて、谷に下つて行つた。彼が死してエホバの手で葬られたその秘密は、我らの敢て深く穿鑿すべき事ではない。

第四節　約束の地パレスチナの概觀

今やイスラエル民族は、約束の地カナンに入らんとて、エリコの對岸なるモアブの平

野に陣取つて、神命の下るを待ちつゝある。されば我らはそのカナン征服の物語を研究するに先だち、豫めその地の大體を知り置く必要がある。そこで亦所謂「飛行機的觀察」をする事としよう。

一、國名

この國は時代の異なるに從ひ、種々の名を以て稱ばれてゐる。その第一はカナンである。カナンとは「低地」の義で、たゞヨルダン河と地中海との間の土地を指すのである。第二はイスラエルである。この名はヨシュアがこの地を占領した後に稱ばれた名であるが、併し後に至つて國家が二分して、南部をユダと稱する時に及んでは、イスラエルといふ名は唯北部の王國のみを指す事となつたのである。第三はユダヤ、新約時代に在つては政治上の名稱としてこの名が用ひられた。第四はパレスチナである、これは近代に至つての名稱で、古昔この國の西南部に住んでゐたペリシテ人（ペリシテナ）といふ語の轉訛したものである。第五、もう一つの名は聖地である。これは言ふまでもなく、世の救主

がこゝに降臨し、こゝに救の大業を完うせられたからである。

二、廣袤

カナンは南北直經六十里（ダンよりベエルシバまで）、幅は北は狹く、南に至るに從つて次第に廣くなつてゐる。狹い所で約十里、廣い所は三十五里、平均十二里ばかりで、面積は約一千方里である。我國の四國の十分の八半位である。しかしパレスチナ本部即ち十二支派の占有したヨルダン以東の地を加へたものは、約一千八百方里で、臺灣の十分の八位ある。

三、水域

パレスチナに於ける主要なる水域は、左の如くである。

（一）地中海　これは西方にあつて、その國土を限つてゐる。海岸線はカルメル岬を除く外殆んど凹凸なく、その延長は北ツロより南ガザに至るまで、約五十五里である。之

ヨルダン河

に流入する川には、北にキシオンがあり、ガザの南にベソルがある。

(二)ヨルダン河　この河には三つの水源があつて、何れもヘルモン山より發し、南流して死海に入るのである。その長さは直線にすれば約四十里であるが、屈曲せる河身に從へば、約八十里ある。この河の流域即ちヨルダンの谿谷は一種特別のもので、水源より南下するに從ひ益々低下してをる。即ち水源は海面上千七百尺の高さであるが、十六里を下つたメロム湖では、殆んど海面と平均し、この湖より以下は一里毎に百五十尺の割合で低下し、そこより六里の下流にあるガリラヤ海は、地中海面より低き事殆んど七百尺である。この湖より死海までは三十一里餘あるが、始の二十五里ばかりは兩岸が屹立つて、河の狀態(かたち)は恰も洞穴のやうである。この間の兩岸の距離は約一里乃至三里である。次に平原に達するのであるが、この平原は約五里半の幅がある。こゝは死海の水面よりも四百尺ばかり高い所にあつて、その周圍は四千尺以上の山嶽で圍まれてをる。地味は豐饒で、灌漑の便だにあれば、多くの農産物を産出する事が出來る。死海の水面はガリラヤ海よりも六百尺餘低いのであるから、水源より約千三百尺の低下である。河幅はガ

メロム湖

ガリラヤ湖

ヨルダン河

リラヤの附近で八十尺、死海附近は百八十尺ある。深さは五尺乃至十二尺許である。ヨルダン河の支流には、東にヤルモクとヤボクの二川があり、西にはアイノムとケリテの細流がある。

(三)メロム湖　これはガリラヤ海の北六里の所にある沼澤で、今はヒューレといふ。その形は三角形をなし、直徑約一里半ある。

(四)ガリラヤ海　舊約聖書には、キンネレテの海と呼んでをる(ヨシュア記十三の廿七)。「琴の形狀」といふ義である。南北の長さ五里半、幅は三里半ある。前述べた如く、海面以下殆んど七百尺の所にある。この湖と附近の狀態は、後

死海

に詳述する筈である。

（五）死海　長さ十八里半、幅四里の湖で、海面以下千三百尺の所にあつて、その深さも千三百尺ある。しかし南端は僅に二十尺に過ぎない。こゝはソドム・ゴモラの跡であらうごいはれてをる。この海を死海と呼ぶ譯は、湖中に一種の毒素があつて、一切の生物が棲み得ないからである。但聖書には死海とは記されず、「鹽海」（創世記十四の三）、「アラバの鹽海」（申命記四の四十九）、「東の海」（ヨエル書二の廿）などの稱呼が用ひられてある。この海に流入する河は、東よりするものにアルノン及びゼレデの二川があり、西よりするものにケデロンの細流がある。

海邊の平原

四、自然の區別

パレスチナの地勢は、自然に五部に分れ、殆んど皆互に南北に並行してをる。これを西より順次に述べると。

（一）海邊の平原　地中海に沿うた砂地の平原である。しかし平原とは名くるものゝ、その實表面には丘陵が起伏して、その高さは海拔百尺乃至二百尺である。其幅は廣い所で八里、狹い所は三里餘で、概して豐饒である。しかし、舊約時代に於ては、イスラエル人は多く山地に住居して、こゝに住んでをるものは極僅であつた。この部を地形によつて、更に次の如く四つに區別する。

フイニシヤ

エスドラエロンの平原

シヤロンの平原

ペリシテの平原

（1）フイニシヤ（ヒニケ）　これはカルメル山の北、幅狹き一帶の邦國である。この地は嘗て一回もイスラエル人の所有となつた事はない。

（2）エスドラエロンの平原　これはカルメル山の眞東に横はる地で、地學上よりいへば、山地に屬するものであるが、特別に平原の部に屬せしめて置く。海面上二百五十尺の所にある平原で、長さ六里、幅四里その周圍にはカルメル・タボル・ギルボアの諸山がある。

（3）シヤロンの平原　これはカルメル山の南にある平原で、「我はシヤロンの野花」と歌にあるあの地である。

（4）ペリシテの平原　これはシヤロンの平原の南にあつて、イスラエル人の敵なる

ペリシテ人の土地である。この地に數多の城邑があつた。

平地　(二)平地　原語で「セヘラ」といふ。即ち「山麓の地」或は「小岡」の義である。その高さは三百尺より五百尺に及び、サマリヤ及びユダヤの西を南北に貫いてをる。地味は甚だ豐腹である。

山地　(三)山地　パレスチナの脊骨をなす地方で、その山の高さは二千五百尺より四千尺に及んでをる。イスラエル人は重にこの地方に住んでゐた。これを自然の地形に從つて、五部に區別する。これを北から順次に述べると、

上部ガリラヤ　(1)上部ガリラヤ　この地方の諸山は、海上より高きこと、概して二千八百尺で、最も高き峯嶺は四千尺である。

下部ガリラヤ　(2)下部ガリラヤ　この地方の山嶺は殆んど千八百尺の高さで、其東南の部は頗る嶮岨であるが、西北の方はさうでない。部内に前に述べたエスドラエロンの平原がある。

サマリヤ　(3)サマリヤ　下部ガリラヤの南の地でエバルとゲリジムの兩山を除けば、あとは概して小山の集合である。南部にあるユダヤとの境はアケロンの谷である。

ユダヤ　(4)ユダヤ　この地方は高さ二千尺より三千尺に及び、山岳と谿谷があつて、サマリヤと共に地中海とヨルダン河との分水界をなしてをる。死海の西に近くユダヤの曠野がある。東西二里南北十四里ばかりの間、小山が波の如く起伏して、谷はあつても水はない。井といつても極めて稀である。生ゐてをるのは矮小な灌木や荆棘ばかりであつてそれらが黄色や褐色の砂原に多少の變化を與へてをるのみである。この地方に洞穴が多く、世捨人や盜賊の窟となつて居る。普通の人畜の住ふべき所ではない。エルサレムよりこの地方に達するには騎馬で僅か二時間を要するのみである。この曠野がユダヤ人に與へし氣分については後にのぶる事としよう。

ネゲフ　(5)ネゲフ　聖書に「南國」とある山地で、ヘブロンの南に始り、南に流れてアラビヤの砂漠に至るものである。但これらの丘陵は、北部に比べると甚だ低い。

ヨルダンの溪谷　(四)ヨルダンの溪谷　この溪谷については、既にヨルダン河の所で述べたから茲には略する。

東方の高原　(五)東方の高原　この高原はヨルダン河の東にある高原である。この地方の山嶽は極

バシヤン
ギレアデ
モアブ
ヘルモン山

めて嶮岨で、こても西部の諸山の比べものにならぬ。この山頂より平原は連續して、スリヤの大砂漠に達してをる。これを三部にわける。

（1）バシヤン　これは北部の高地で現今ハウランと稱ばれてをる。この地はヤルモク川の爲に充分の灌漑をうけてをる。

（2）ギレアデ　これは中部である。

（3）モアブ　これは南部の地であらう。

五、山　岳

パレスチナは山國である。我らはその中、最も重要なものゝみを擧げよう。先づ北方にあるものから、順次に數へ立てる事とする。

（一）ヘルモン山　この山はヨルダン河の水源近くにあつて、その東方に屹立してをるパレスチナ第二の高山で、その高さは九千二百尺ある。イエスの變貌は、この山上であつたと思はれる。

レバノン山
タボル山
ギルボア山
カルメル山
エバル山

（二）レバノン山　これはヘルモン山の西にある。山脈で、地中海と並行して、北に延長してをる。その高さは概ね五千尺であるが、その最高峰エベルモクミール峯は一萬二百尺ある。年中雪を戴いてをる時の多い所から、レバノン（極白）と稱ばれたのであらうこの山脈の香柏は有名なものである。

（三）タボル山　ガリラヤ海の西南にあつて、その高さ約二千尺、その形は圓錐狀である。こゝはデボラの勝利を得た古戰場である（士師記四の六）。

（四）ギルボア山　タボル山の南にあつて、その高さは千七百十五尺。昔ギデオンの勝利を占めた所で、又サウル王の戰死した場所である（士師記七の三、サムエル前書卅一の二、サムエル後書一の廿一）。

（五）カルメル山　ガリラヤ海の正西に當り、地中海の沿岸にある。高さ千七百五十尺エリヤがバアルの預言者と爭ひ、天より火を呼降して、エホバが眞の神である事を證據立てた所である（列王記上十八の廿・四十二）。

（六）エバル山　「咒詛の山」の義で、國の中央にある、高さ三千七十五尺の山である（申命記十一の廿六）

ゲリジム山

シオン山

オリブ山

ヘブロン山

ギレアデ山

ネボ山

(七)ゲリジム山　『祝福の山』の義で、エバル山の南にある、高さ二千八百五十尺の山である(ヨシュア記八の三十、ヨハネ四の廿)。

(八)シオン山　昔も今もエルサレムの立つてをる山で、シオンとは『日の照る處』の義である。死海の頭の正西に當り、高さは二千五百五十尺ある。

(九)オリブ山　即ち『橄欖山』である。これはケデロンの谷を隔てゝ、シオン山の東にある。キリスト昇天の山である。その高さは二千六百六十五尺である。

(十)ヘブロン山　この山は南方の砂漠に近く、高さは三千三十尺ある。

(十一)ギレアデ山　東方高原の中部にある高さは三千尺である。

(十二)ネボ山　死海を隔てゝ、シオン山と相對してゐる。モーセは死に臨んで、この山の一嶺すなはちピスガの峯に登り、遂に約束の地を瞰望したのであつた。その高さは二千六百七十尺である。

六、市邑

海邊の平原にある邑

山地にある邑

ヨルダンの谷にある邑

次に舊約歴史にある、重要なる地名を擧げる。

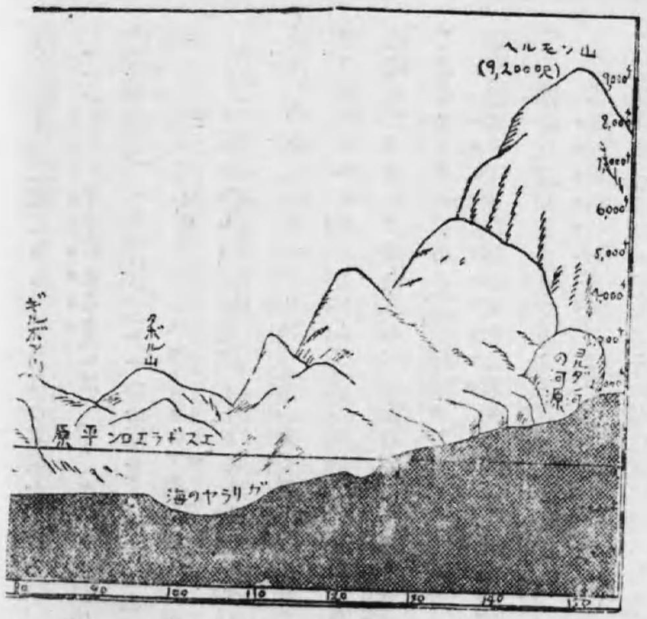
(一)海邊の平原にある者には、(1)サムソンが功業を成し、又彼の死んだ所であるガザ(士師記十、六の廿一)、(2)パレスチナの主要なる海港であるヨッパ(歴代史下二の十、六、ヨナ書一の三)、(3)フィニシヤの一大商港であるツロ(ヨシュア記十九の廿九)がある。

(二)山地に在る者には、(1)國の南端にあるベエルシバ(サムエル前書三の廿)、(2)族長たちの葬られたヘブロン、(3)ダビデ王の生れたベツレヘム(サムエル前書十七の十二)、(4)『大王の都』であるエルサレム、(5)ヤコブの異象を見たベテル等かある。(6)ノ國の中央に位して、ゲリジム山とエバル山の間にあるシケム(列王記上十二の一)、(7)北朝十支派の首府であるサマリヤがある(列王記上十、六の廿四)。

(三)ヨルダンの溪谷にある者には、(1)死海の頭の近傍にエリコがあり(列王記上十、六の三十四)、(2)國の北端であるダンがある(士師記十八、同廿の一)。

(四)東方高原にある者には、中央にラモテ・ギレアデがある(サムエル前書十一〇)。

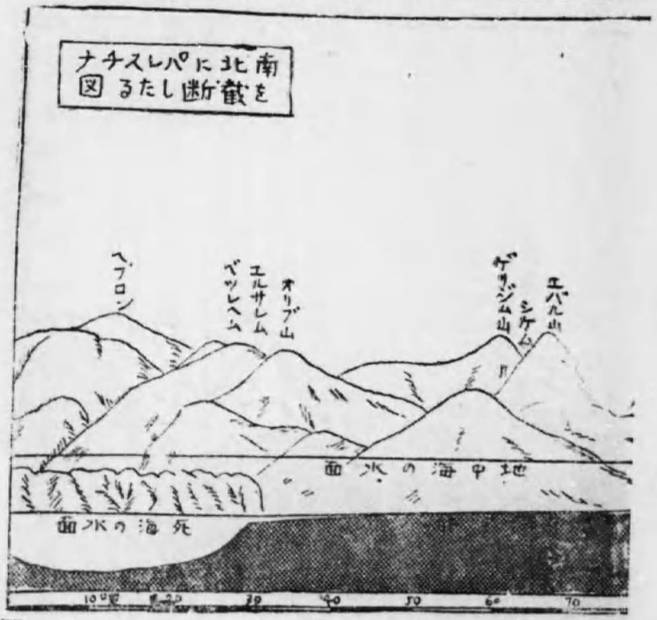
以上の市邑については、既に詳しく、述べたものもあるが、まだ述べないものについ



ては、それぞれ機會に應じて、解說しようと思ふ。

七、氣候及び動植物

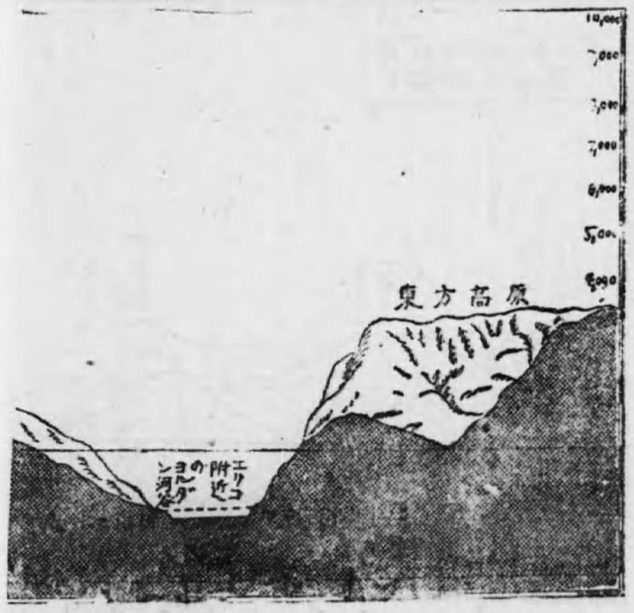
(一)地勢の影響　パレスチナの地は緯度よりいへば、我國の九州と同じである。それ故その寒暑の度も、略九州と同じであるが、地勢の影響によつて多少の相違のある事は勿論である。概觀すれば一方には一萬尺ばかりの山があるのに、他方には海面以下千三百尺の低地がある。西地中海よりは濕氣を含んだ温風を送り



來り、東アラビヤの砂漠よりは乾燥した熱風が襲ひ來る。隨つて氣候は土地によつて千種萬樣でその動植物も所によつて異なるのは、論をまたずして明かである。

北部にあるガリラヤは、全く温帶的で、その風土産物は殆んど歐羅巴的である。その極北部にあるヘルモン山は永久の雪を戴いてをる。ガリラヤを貫流してをるキシオン河の兩岸は、有名なる麥の産地で、その河口にあるカルメル山は、良好の葡萄園を以て有名である。その沿岸附近

南部地方



の丘陵は、栗・胡桃等北温帶と普通の樹木を以て掩はれ、我等日本人がそこに至るもその天然物に於て、本國のものと別段の差異を見ないであらうと思ふ。

然し南方サマリの地を經て、有名なるエルサレムに至り、更に四五里を南に進めて預言者アモスの住所であつたテコアの邊に至れば、その地質・植生は稍々熱帶的となり、尙更に數里を進みてアブラハムが始めて移住したヘブロンに至れば、アラビヤ的の風物が見られる。之より南エ

東西の差異

ジプトの國境に至るまでは、ベエルシバの砂漠といつて、萬事がアフリカ的である。僅に六十里の距離にヘルモンの永久の冬と、ベエルシバの永久の夏があるとは、實に奇態な現象ではないか。恰も東京に居つて嚴寒の冬を感ずる頃に、遠州濱松に至れば、赫々たる太陽の光線の下に、熱帶的狀況を目擊する事が出來るやうなものである。

以上は南北兩端に於ける氣候地質の差異の一班であるが、その東西に於ける差異に至つては、これよりも

一層甚しい。ヨルダン河沿岸の比類なき凹地である事は既に學んだ即ち北に閉ぢて南に向つて開いた廣い溝渠のやうな窪地である。それ故空氣も自ら濕り勝で、その流通の惡い爲に温度も非常に高い。これが原因となつて、ヨルダン流域一帶の地は、印度の恒河沿岸に於けるが如き狀態を呈し、草木は鬱蒼として繁茂し、獅子叢林に吼へ、鰐魚水邊に横はるの偉觀を北緯三十二度の處で見る事が出來る。

降雨期と旱魃期

エルサレムの城市は、寒中雪を見る事が屢々であるが、これと同時にその東方六里の地にはかく印度風の熱帶の植物の繁茂する處があり、忽ちにして凍寒、忽にして酷熱、ヘルモンの皚雪、ベエルシバの砂漠、或はヨルダン河畔の熱帶的深林、某旅行家は「三時間の旅行中四十三度の變化がある」といつてをる。凡そ世界廣しと雖も、かくも甚しき變化と反對的複雜を呈する地方は、この國を除いては、決して他にないと思ふ。

(二)降雨期と旱魃期　パレスチナの氣候に關するもう一つの特點は、この國には我國と同じく、春夏秋冬の四季があるけれども、降雨期と旱魃期とによつて、殊に著しき變化を生ずることである。降雨期とは十月の中頃より四月の終頃まで、多少の降雨がある

聖書の記事

時期で、旱魃期とは五月の始より十月の始頃まで、殆んど降雨のない時期である。降雨は十月始より月を追うて漸々量を增し、一月二月に至つてその絕頂に達し、三月に至りて漸くその量を減じ、五月に至つて皆無となるのである。ユダヤは概して水が乏しい故彼らは雨を非常に重視し、之を神の賜物だと思つてゐた。そして彼らは十月十一月の頃降雨を待つて播種した。この時の雨が所謂「前の雨」で、「後の雨」と稱ばれてをるのは三四月頃收穫期に至つて降るものをいふ。

聖書のあちこちに、氣候の事が出て居るが、その二三の例を引用すれば、雅歌二の十一以下に「視よ冬すでに過ぎ、雨もまた止みぬ云々」とあり、冬と雨とがならべられてある。傳道の書十一の四に「風を伺ふものは種播くを得ず、雲を望むものは刈る事を得ず」とあるのは、播種期が冬近くなつて居る爲に、播種に苦痛の伴ふ事と、刈入の時期が俄かに暑くなつて、日蔭を求むる樣とを暗示してをる。ヤコブ書五の七には農夫が「前の雨と後の雨」播種期の雨と收穫期の雨とを待望んでをる事が記されてある。かのサムエルがイスラエルの民が王を求めた罪を嗚らすに際し、麥刈時に雷と雨を降らせて、之を

證した事が記されてあるが、若しこれが我國であつたとしたならば、さう不思議にも思はれない。けれども之は彼國に於ける旱魃期で、普通ならば雨一粒も降るべき時期でなかつたのである。之を知つて彼らの驚きも無理からぬ事である事が察せられる（サムエル前十二の十六―）。

尙降雨期の終に雷が鳴り、霰が降る事は詩篇第十八篇によつて明かであり、雨期が終つて急に暑くなつた爲に、雨期の時に屋上に生じた草が忽ち枯れる事（詩篇百廿九の六）、露は深いけれども、日が出る時に、直ちに消ゑ去る事（ホセア十四の五、同六の五）、又雲や霧の速かに飛びさる狀態（イザヤ四十四の二十二、ヤコブ四の十四）など、眼に見ゑるやうである。

（三）風と氣候　冬の風は西より吹き、夏の風は西北より吹く、雲があつて西風の時には山々に觸れて雨となるに定まつてをる（ルカ十二の五十四）。夏には雲がない。亦西風も吹かない主として北西の風が吹く。その時は心地よく、農夫は穀物の殼と實とを吹き分けるのである。北風は十月の降雨期の始にふく（ヨブ記三十七の九）。それ故前述べた如く、農夫は之と戰つて播種せねばならぬ。東風は砂漠より來る。アラビヤ人は砂漠より來る風を皆シレッテ

（東風の意）といふ。ルカ傳十二の五十にキリストは南風といひ給うた。時には砂を混じたアラビヤの熱風がエルサレムまで到る事もある（エルミヤ四の十一、エゼキエル十七の十、同十九の十二、ホセア十三の十五、エレミヤ十八の十五―十七、エゼキエル廿七の廿六、詩四十八の七參照）。大まかに言へば以上述べた通りであるが、その内西の風は極つてをるけれども、他は不定である。この國の石は石灰岩で、冷熱を感ずる事が早い。晝は海から吹き來り、夜は海に向つて吹く。夏は晝十時より十二時頃まで熱く、その後は次第に冷くなる。

（四）動植物　この國の動植物については、さきにも述べた事であるが、尙詳細に研究するならば、この國の三大陸的である事は、これによつても證據立てられる、之に關するカノン・ツリストラムの研究の結果は誠に面白いことであるけれども、あまり專門に渉る故之を避ける。この方面に於ける、我國の權威である別所梅之助氏の「聖書の動物考」と「聖書の植物考」とは大なる助を與へる良書である。

八、パレスチナの風景

聖地の探見者の失望

カルメル山

ガダラ

エリコ附近

東のギレアデ

タボル

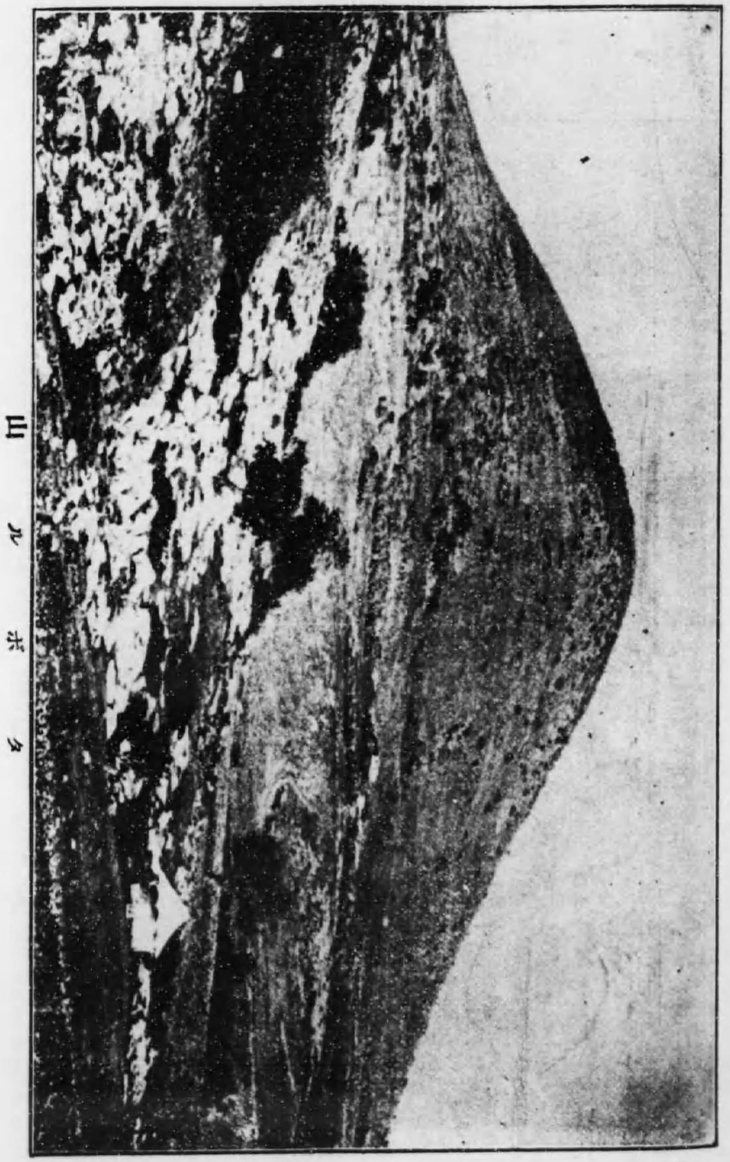
バシヤンの高原

モアブの壁

エンゲデ

現今パレスチナに旅行する人は、二つの點に於て失望する。その一は道路の嶮悪で旅行に不便な事で、一は至る處戰の爲に零落して、古跡を心のまゝに索り得ない事であるけれども景色は昔ながらのよい所が多い。私は大まかに之を述べよう。

カルメル山に上れば、麥畑や橄欖の樹園また海を眺め得て、景色が甚だよい。ガリラヤ海のほとりであるガダラの地もよい景色の處で、こゝから白雪を戴けるヘルモンを仰ぐ事が出來る。又ヨルダン河とその谷間の景色もよい。エリコの向ふから北を見る時、河の曲折の面白いのや、また遙に白雪の山を見上げる事が出來る。東のギレアデの森には數千年を經た大木があり、幽邃なる谷間の眺望がよい。タボルの月夜、また夕陽の將に地中海に入らんとする時は、言ひ難き佳景である。東北のバシヤンの高原から、日の出を眺むる時の景色、たちこめた霧が瞬間に退き去るその時の眺望も、實に美事である世界に比類なき絶景はモアブの壁と稱へられ、橄欖山より死海に下る路にある。エンゲデより滿月の時に死海を見る時は、黄金の橋を懸けた如く、またヨルダンの谷を超えて向ふを眺むる時は、得も言はれぬ絶景で、詩人も筆を投じて歎息するであらう。



ホルダ山

忘るゝ能はざる地

昔ながらの風色

よしパレスチナの景色がよくなくても、地中海と砂漠の間にあるこの高地は、常に我らの心に止まる所で、隨つてその眺めは他と異なる事であると想ふ。しかし聖書には景色について記される事が少い。これはイスラエル人は戰人、また預言者であつたから、景色などは單に說明の時に用ひたに過ぎない（一例として歷代史上十四の十三—十五、イザヤ四十の廿一—廿三參照）。預言者は亦大なる事に着眼して、たゞ景色の大體についてのみのみ述べてをる。例へば「神の惠は海の如く」「泉の如く」「日の輝きの如し」など。彼らは花の開閉、野の桑枯盛衰、牧場の狀態などを用ひて、人々を奬勵し、亦警誡したのである。

谷間の牧者が相呼び相應ふる樣、到る處に子供の歡迎する晝、火も見ない夜、駱駝を用ひて荷を運ぶ事、穀物を風に吹き散らす事など、昔ながらの風色を遺してをる。塵を町の中に投げ出す事や、井も墓も昔のさまを偲ばせる。亦こゝは印度とエジプトの通路であるから、隊商の人々、王より賤民に至るまでの種々なる變裝の人々の行きかふ事も妙味がある。

風景の事は今はこれ位に止める。その處々の特殊の景色については、何れ話をすゝめ

て行くに隨つて述べるであらう。

九、パレスチナ地方雜感

私は本節を終る前に、パレスチナ全體に關する雜感を、一くるめにして茲に列擧するこれは讀者諸君が更に深き考察をせらるゝ上に、幾分のヒントを與ふるものであらう。而してこの項に述ぶる所は、啻に神民の移住當時に關してのみの事でないことも含んで置かれたい。

世界の中心地

その一は聖地を含むスリヤの位置に關する事である。いふまでもなく、此地は亞細亞阿弗利加、歐羅巴の三大陸の中央にあつて、この三大陸の通商、文明の橋梁ともいふべき地である。それであるからまた此地は、屢々これら三國の係爭地となり、戰場となつたのである。のみならずこゝに世界の三大宗教（猶太教・基督教・回々教）が起つて、此地を基點として全世界に擴まつたのである。

しかしながら、彼らは比較的に外國文明の感化を受くる事が少かつた。彼らの建築は

閉鎖の感化を受けざる別天地

昔ながらのものである。その砂漠に住める民は、今尙水草を追うて彷徨する遊牧生活を送つてをる。彼らは一血統の者のみである。しかも多くの種族があり、各々その上に酋長を戴くと雖も、一統の政府を有つてゐない。これはその地勢に職由する特質である。

内より外へ

即ちこゝは其東と南は砂漠に限られ、西は海——しかも一の良港なき海——に限られ、北はレバノン及び對レバノン山脈によつて限られてをる別天地である。それ故外よりの感化を受くる事少く、天來のものを内より外に送り出す爲に、適當な狀態の下にあつたのである。但しその機會の來るまで、彼らは閉ぢ込められてゐたのである。然り、神は完全なる福音の發達するまで、パレスチナの民を閉ぢ込め置き給うた。而してその準備が成つた時に、世界に向つて開き給うた。即ち驚の族と共にキリスト教は全世界に擴められたのである。而してその始は攝理のうちに異邦人によりて開かれたカイザリヤ港、及びアンテオケであつたのである（使徒行傳十〇、十一の廿）。

沙漠と宗教

全體セムの子孫が宗教の先導者となつた事は、彼らが長き〳〵間砂漠に置かれたからである。彼らは砂漠にありて、目に見る物、口に味ふ物等の誘惑物がなかつた爲に、神

包世界的宗教の萌芽地

猶太民族の鍛練

について考ふる機會を與へられ、自ら宗教的でならざるを得なかつたであらう。誠に佛國の某記者の言へる如く「彼らは見るものが一つもなかつたから、上のみを見たのである」。彼らがアラビヤの野に於て得たものは、戰と語る事であつた。彼らは長い間考へた彼らが語る時に力のあつたのは、語る前によく考へた結果であると思ふ。而して亦アラビヤに於ける克己の生涯は、實戰に於て忍耐を與へた。これが大宗教家を出すと共に、大迷信家をも出したわけである。而してイスラエル人は、此處スリヤに入り來つて、神の默示によつて唯一の神を知るに至つたのである。

パレスチナに於ける地勢と氣候と産物などが、世界の小縮圖である事は、誰でも直ぐ氣付く事であるが、これは神の國には何れの國人、何れの種族も住み得る者であるとの暗示を我らに與ふる者である。この地に起つた宗教——殊にキリスト教——が、包世界的の宗教であるのは、この事に密接な關係があるやうに思はれる。しかもこの國に於ける氣候の變化は、如何なる境遇にも堪ゆ得る鍛練を、その住民に與へたのである。猶太人は身體は長大でないけれども、健康にして、よく之等に堪ゆて鍛練を受くるに適當な種族であつて、今尚彼らは全世界に亘りて、めざましき活動をなしつゝあるのである。

天惠の宗教の素因

又この國が人の工風によりて濕潤する便利少く、天よりの雨水にたよらねばならなかつた事は、この國人の宗教をして、天惠に待つものたらしめた素因を作つたものであるやうに思ふ。亦屢々襲來せる蝗軍の慘害、旱魃、飢饉、疫病、猛獸、地震、近傍諸國民の攻擊等は、イスラエル民族をして、地の物を頼むべからざるを痛感せしむると共に、

渴仰の宗教の素因

彼らをして只管に神を求むるやうに導いた。彼らがこれら氣候の變動その他の困難事に遭遇する度毎に、その罪を悟り、悔改めて神に立歸つた事は、枚擧に遑なき程で、實にこれらがイスラエル史の大部分を占めて居るものである。

第五節　パレスチナの先住民族並にその隣國民

本項に於ては、イスラエル人のカナン占領以前に於ける住民と、その隣國民について述べる事とする。これは時代によつて、幾分かづつその境界を異にして居る。

往古の住民

(一)往古の住民　この地の先住民族は、その起原、その歴史共に不明である。彼らは